



みえ災害ボランティア支援センター (MVSC)

活動報告

2013. 1. 1 → 2013. 12. 28



※ この活動報告書は三部構成となっています。

- ・平成 25 年 活動報告.....表紙より～32 ページ
- ・活動検証 次代への提言..... 33 ページ～47 ページ
- ・それぞれの東日本大震災支援.....裏表紙より～資 37 ページ(右綴じ)



事務局の壁面に貼られたカレンダー。
ボラバック第何便がいつ出発・帰着したか、一目で分かるようになっていました。

目次

活動カレンダー.....	2～3
山田町の紹介／被害状況と復興状況.....	4～5
みえ発！ボラパックⅡ.....	6
* 参加者の傾向(平成 25 年).....	7
* 活動紹介（団体／個人）.....	8～15
つぶやき.....	16～17
山田町まなびの時間.....	18～20
山田町のゆるキャラ／ゆるキャラ応援サポーター.....	21～23
防災キャラバン・市町等連携事業.....	24～25
県内避難者支援／啓発活動.....	26～27
情報発信／他の地域への災害ボランティア活動支援.....	28
継続支援団体交通費助成事業.....	29
収支報告／ご支援・ご協力いただいた企業・団体.....	30～31
資料・書式集について.....	32

※活動検証 次代への提言 は 33 ページに目次があります

※それぞれの東日本大震災支援 は裏表紙よりお読みください（右綴じ）



活動カレンダー

2013. 1. 1 ~ 2013. 12. 28

日付	項目	
1月		
4日	事務局会議	第26回 定例会議
8日	ボラパックⅡ	第23便 個人ボランティア募集開始
10日	みえで仲間をつくり隊	避難者向け情報 定期発送
14日	みえで仲間をつくり隊	第41回 打合せ 9名出席
17日	幹事会	11名出席
18日	ボラパックⅡ	団体打合せ 植える美 ing (津市)
19日	ボラパックⅡ	第25便 個人ボランティア募集開始
22日	みえで仲間をつくり隊	第42回 打合せ 7名出席
23日	ボラパックⅡ 第23便	活動事前研修 ファミリーバドミントン(津市)
25日	ボラパックⅡ 第24便	事前ガイダンス 植える美 ing (多気町)
30日	山田町のゆるキャラ	津5キャラえがおとどけ隊 打合せ (津市)
2月		
2日	ボラパックⅡ 第23便	事前ガイダンス 個人ボランティア
7日	ボラパックⅡ 第23便	出発 11名参加 (~10日 往路添乗:森本)
8日	ボラパックⅡ 第24便	出発 18名参加 (~11日 添乗:谷畑)
10日	みえで仲間をつくり隊	避難者向け情報 定期発送
13日	みえで仲間をつくり隊	第43回 打合せ 7名出席
13日	事務局会議	第27回 定例会議
15日	幹事会	10名出席
15日	出張(イベント出席)	山田町 「山田町社会福祉大会」出席 (~17日 若林)
16日	ボラパックⅡ 第25便	事前ガイダンス みえ防災市民会議、個人ボランティア
21日	ボラパックⅡ	第26・27便 個人ボランティア募集開始
22日	ボラパックⅡ 第25便	出発 19名参加 (~25日 添乗:谷畑)
23日	ボラパックⅡ	団体打合せ 心とむ蓄音機ホーン演奏会
23日	みえで仲間をつくり隊	坐禅体験イベント チラシ発送
26日	みえで仲間をつくり隊	第44回 打合せ 6名出席
3月		
6日	ボラパックⅡ	団体ボランティア募集開始
7日	ボラパックⅡ 第26便	事前ガイダンス 皇學館大学ボランティアルーム
9日	ボラパックⅡ 第26便	事前ガイダンス 心とむ蓄音機ホーン演奏会、個人ボランティア
9日	ボラパックⅡ 第27便	事前ガイダンス 三重大学めばえサークル
10日	みえで仲間をつくり隊	坐禅体験イベント開催 (津市)
10日	みえで仲間をつくり隊	避難者向け情報 定期発送
11日	出張(イベント出席)	桑名市 「3.11 ともしびのつどい」出席 (山畑、森本)
13日	みえで仲間をつくり隊	第45回 打合せ 5名出席
15日	ボラパックⅡ 第26便	出発 19名参加 (~18日 添乗:森本)
15日	交通費助成事業	助成団体募集開始 (~4月15日)
15日	山田町のゆるキャラ	山田町ゆるキャラ制作協力団体合会 出席 (山田町:佐藤、外館)
16日	ボラパックⅡ 第27便	事前ガイダンス ジョイフルアンサンブル
16日	写真パネル展	「東日本大震災とボランティア」開催 (~18日 津市)
17日	三重から見つめた東日本大震災	開催 (津市) 94名参加
17日	出張(調整等)	津市 (~19日 佐藤)
18日	幹事会	10名出席
18日	事務局会議	第28回 定例会議
23日	ボラパックⅡ 第27便	事前ガイダンス 個人ボランティア
26日	みえで仲間をつくり隊	第46回 打合せ 6名出席
28日	ボラパックⅡ 第27便	出発 14名参加 (~31日 添乗:松岡、谷畑)
28日	出張(イベント出席)	名古屋市 「大震災・原発事故一人ひとりを地域で支える交流会」出席 (森本)
28日	出張(会議出席)	山田町 「山田町地域支え合い体制作り事業連携調整会議」出席 (佐藤)
29日	ボラパックⅡ	第29便 個人ボランティア募集開始
30日	ボラパックⅡ 第28便	事前ガイダンス こころネット
4月		
1日	ボラパックⅡ	団体打合せ こころネット
2日	広域避難者支援	福島民報・福島民友閲覧開始(福島県ふるさとふくしま帰還支援事業協力)
3日	ボラパックⅡ	団体打合せ
5日	山田町のゆるキャラ	山田町ゆるキャラ制作実行委員会発足 第1回 山田町ゆるキャラ制作実行委員会会議 出席 (山田町:佐藤、外館)
10日	みえで仲間をつくり隊	第47回 打合せ 10名出席
10日	みえで仲間をつくり隊	避難者向け情報 定期発送
11日	出張(会議出席)	山田町 「山田町内復興支援団体交流

		会」出席 (佐藤)
12日	山田町のゆるキャラ	第2回 山田町ゆるキャラ制作実行委員会会議 出席 (山田町:佐藤、外館)
13日	ボラパックⅡ	団体打合せ こころネット
13日	広域避難者支援	東海エリア避難者支援団体合会 出席 (四日市市:山本、森本、谷畑)
15日	事務局会議	第29回 定例会議
16日	山田町のゆるキャラ	デザイン公募開始 (~6月1日)
18日	出張(会議出席)	山田町 「わくわく山田座団会」出席 (佐藤)
19日	幹事会	12名出席
20日	ボラパックⅡ	団体打合せ 人形劇団おたまじゃくし(伊勢市)
23日	みえで仲間をつくり隊	第48回 打合せ 6名出席
25日	出張(会議出席)	山田町 「山田町地域支え合い体制作り事業連携調整会議」出席 (佐藤)
26日	ボラパックⅡ 第28便	出発 20名参加 (~29日 添乗:松岡)
27日	ボラパックⅡ 第29便	事前ガイダンス 人形劇団おたまじゃくし(伊勢市)
27日	みえで仲間をつくり隊	第7回 楽しみ隊 チラシ発送
5月		
1日	みえで仲間をつくり隊	「コープみえ・くらしすけあいの会」協働事業開始 (~9月30日)
4日	ボラパックⅡ 第29便	事前ガイダンス 木曾三川公園紙飛行機の会、個人ボランティア
7日	広域避難者支援	東海エリア避難者支援団体合会 出席 (四日市市:若林、森本)
8日	みえで仲間をつくり隊	第49回 打合せ 8名出席
8日	山田町のゆるキャラ	応援サポーター募集開始 (~8月31日)
9日	みえで仲間をつくり隊	避難者向け情報 定期発送
9日	出張(調整等)	山田町 (~10日 若林)
9日	山田町のゆるキャラ	第3回 山田町ゆるキャラ制作実行委員会会議 出席 (山田町:佐藤、外館)
9日	出張(会議出席)	山田町 「わくわく山田座団会」出席 (佐藤)
10日	ボラパックⅡ 第29便	出発 20名参加 (~13日 添乗:森本、谷畑)
11日	出張(調整等)	多気町 (番家)
12日	山田町のゆるキャラ	山田町ゆるキャラ制作実行委員会 フェイスブック開始
14日	広域避難者支援	三重県避難者支援団体相談会 出席 (四日市市:若林、森本)
15日	出張(調整等)	多気町 (森本)
18日	出張(調整等)	多気町 (谷畑)
19日	みえで仲間をつくり隊	第7回 楽しみ隊開催 (多気町)
20日	事務局会議	第30回 定例会議
21日	みえで仲間をつくり隊	第50回 打合せ 6名出席
21日	山田町のゆるキャラ	山田町ゆるキャラ制作実行委員会 ツイッター開始
24日	幹事会	11名出席
24日	出張(会議出席)	山田町 「わくわく山田座団会」出席 (佐藤)
31日	ボラパックⅡ	第30便 個人ボランティア募集開始
6月		
3日	山田町のゆるキャラ	第4回 山田町ゆるキャラ制作実行委員会会議 出席 (山田町:佐藤、外館)
4日	広域避難者支援	三重県避難者支援団体相談会 出席 (四日市市:山本、若林、森本)
5日	山田町のゆるキャラ	一般投票開始 (~15日)
5日	事務局会議	防災キャラバン 臨時会議
6日	出張(会議出席)	山田町 「わくわく山田座団会」出席 (佐藤)
9日	みえで仲間をつくり隊	避難者向け情報 定期発送
12日	みえで仲間をつくり隊	第51回 打合せ 9名出席
12日	出張(会議出席)	山田町 「第1回被災者支援連絡調整会議」出席 (佐藤、外館)
13日	ボラパックⅡ	団体打合せ 三重短期大学
15日	ボラパックⅡ	団体打合せ はたいも、ひょうきんどんぶり
15日	防災キャラバン	名張・伊賀 打合せ (名張市:山畑、番家)
16日	出張(調整等)	多気町、松阪市 (森本)
17日	ボラパックⅡ	第32便 個人ボランティア募集開始
17日	ボラパックⅡ	団体ボランティア追加募集開始
17日	幹事会	10名出席
17日	防災キャラバン	四日市 打合せ (四日市市:山畑、番家)
19日	事務局会議	第31回 定例会議
20日	山田町のゆるキャラ	第5回 山田町ゆるキャラ制作実行委員会会議 出席 (山田町:佐藤、外館)
22日	ボラパックⅡ 第30便	事前ガイダンス 個人ボランティア
23日	出張(イベント)	山田町 「わくわく山田座団会 なかよし公園活動」参加 (佐藤)
25日	みえで仲間をつくり隊	第52回 打合せ 6名出席
25日	防災キャラバン	第1回 名張・伊賀 チラシ発送
25日	防災キャラバン	伊勢 打合せ (伊勢市:山畑、番家)
25日	山田町のゆるキャラ	ヤマダちゃん、たけちゃん発表
28日	ボラパックⅡ 第30便	出発 20名参加 (~7月1日 添乗:森本)
30日	ボラパックⅡ 第31便	事前ガイダンス はたいも、ひょうきんどんぶり

7月		
1日	防災キャラバン	第2回 津 チラシ発送
1日	防災キャラバン	四日市 打合せ (四日市市:山畑、番家)
2日	活動コーディネート	県教委 打合せ
4日	ボラパックⅡ 第31便	事前ガイダンス 三重短期大学
4日	ボラパックⅡ	団体打合せ 東部中学校
8日	出張(調整等)	東京都 (~9日 外館)
8日	広域避難者支援	三重県避難者支援団体相談会 出席 (四日市市:山本、若林、森本)
9日	出張(会議出席)	山田町「わくわく山田座団会」出席 (佐藤)
10日	みえで仲間をつくり隊	第53回 打合せ 7名出席
10日	みえで仲間をつくり隊	避難者向け情報 定期発送
12日	ボラパックⅡ 第31便	出発 19名参加 (~15日 添乗:谷畑)
12日	出張(調整等)	鈴鹿市 (番家、森本)
13日	ボラパックⅡ	第33便 個人ボランティア募集開始
13日	ボラパックⅡ 第32便	事前ガイダンス 個人ボランティア
14日	防災キャラバン	第1回 名張・伊賀 開催 (名張市)
15日	防災キャラバン	第2回 津 開催
17日	事務局会議	第32回 定例会議
17日	防災キャラバン	笹川 打合せ (四日市市:番家、森本)
19日	ボラパックⅡ 第32便	出発 17名参加 (~22日 添乗:松岡)
19日	幹事会	10名出席
22日	ボラパックⅡ	団体ボランティア追加募集開始
23日	みえで仲間をつくり隊	第54回 打合せ 6名出席
23日	活動コーディネート	県教委 事前ガイダンス (津市)
27日	防災キャラバン	第3回 学校・教職員 チラシ発送
29日	出張(広報)	桑名市、朝日町、川越町、四日市市、鈴鹿市、津市 (番家)
30日	山田町のゆるキャラ	第6回 山田町ゆるキャラ制作実行委員会 会議 出席 (山田町:佐藤、外館)
31日	防災キャラバン	多気 打合せ (多気町:山畑、番家)
8月		
4日	ボラパックⅡ 第33便	事前ガイダンス 個人ボランティア
5日	出張(座談会・補助等)	山田町 (~9日 松岡)
6日	出張(座談会)	山田町 (~7日 山本)
6日	座談会③	山田町関係者座談会 (山田町)
7日	活動コーディネート	県教委 まなびの時間補助 (山田町)
8日	活動コーディネート	県教委 ボラ活動補助 (山田町)
9日	ボラパックⅡ 第33便	出発 21名参加 (~12日 添乗:谷畑)
9日	防災キャラバン	紀北 打合せ (紀北町:山畑、番家)
10日	みえで仲間をつくり隊	避難者向け情報 定期発送
11日	出張(調整等)	津市 (~13日 外館)
12日	広域避難者支援	避難者対象アンケート実施 (~9月19日)
16日	ボラパックⅡ	第35便 個人ボランティア募集開始
16日	出張(調整等)	松阪市 (森本)
19日	ボラパックⅡ 第34便	事前ガイダンス 東部中学校 (松阪市)
20日	みえで仲間をつくり隊	第55回 打合せ 12名出席
20日	出張(会議出席)	山田町「わくわく山田座団会」出席 (佐藤)
22日	ボラパックⅡ	団体打合せ 東部中学校 (松阪市)
23日	幹事会	9名出席
23日	事務局会議	第33回 定例会議
24日	防災キャラバン	第3回 学校・教職員 開催 (津市)
25日	みえで仲間をつくり隊	第8回 楽しみ隊開催 (松阪市)
27日	みえで仲間をつくり隊	第56回 打合せ 5名出席
27日	防災キャラバン	多気 打合せ (多気町:山畑)
28日	ボラパックⅡ 第34便	出発 17名参加 (~28日 添乗:森本)
28日	ボラパックⅡ	団体打合せ 津っキャラえがおとどけ隊
9月		
1日	防災キャラバン	第4.5回 多気、伊勢 チラシ発送
1日	座談会②	ボラパックリーダー・サブリーダー座談会
1日	座談会①	支援センター立ち上げ座談会
3日	広域避難者支援	東海エリア避難者支援団体打合せ
7日	ボラパックⅡ 第35便	事前ガイダンス 津っキャラえがおとどけ隊、個人ボランティア
11日	みえで仲間をつくり隊	第57回 打合せ 9名出席
11日	みえで仲間をつくり隊	避難者向け情報 定期発送
11日	防災キャラバン	第6回 鈴鹿 チラシ発送
11日	幹事会	10名出席
12日	出張(VPⅡ前入り)	山田町 (~17日 山本)
13日	出張(VPⅡ前入り)	山田町 (~17日 番家)
14日	ボラパックⅡ 第35便	出発 41名参加 (~17日 添乗:松岡、谷畑)
15日	山田町のゆるキャラ	ヤマダちゃん、たけちゃんお披露目および山田町公認キャラ認定式
15日	発災(台風18号災害)	台風18号接近に伴い浸水や突風の被害が発生(伊賀市、志摩市、その他府県)
16日	防災キャラバン	第7~10回 桑名、笹川、四日市、紀北 チラシ発送
16日	台風18号災害	伊賀市災害ボランティアセンター(常設)が災害体制に移行
17日	ボラパックⅡ 第35便	県庁にて帰着式

17日	防災キャラバン	第11回 伊賀 チラシ発送
17日	幹事会(臨時)	9名出席 台風18号災害対策会議 ※情報提供、伊賀ボラセンへの人的支援の実施を決定
18日	出張(台風18号対応)	伊賀市 (~19日 松岡)
19日	事務局会議	第34回 定例会議
19日	防災キャラバン	笹川 打合せ (四日市市:山畑)
19日	幹事会(臨時)	8名出席 台風18号災害対策会議 ※伊賀ボラセンサテライトが閉鎖となり、近隣府県の情報を収集しバス企画の必要性を検討、情報提供の継続を決定
19日	防災キャラバン	四日市、笹川 打合せ (四日市市:山畑)
20日	防災キャラバン	第4回 多気 開催
20日	出張(調整等)	三重県 (~22日 外館)
21日	防災キャラバン	第5回 伊勢 開催
23日	出張(調整等)	多気町 (森本、谷畑)
24日	みえで仲間をつくり隊	第58回 打合せ 9名出席
25日	出張(会議出席)	山田町「わくわく山田座団会」出席 (佐藤)
26日	出張(講演会出席)	名古屋市「東日本大震災・津波・原発事故による県外避難」出席 (森本)
26日	出張(会議出席)	山田町「山田町地域支え合い体制作り事業連携調整会議」出席 (佐藤)
29日	防災キャラバン	第6回 鈴鹿 開催
30日	活動支援金	東日本大震災ボラ活動支援金受付終了
10月		
1日	防災キャラバン	第12回 企業・労組 チラシ発送
3日	みえで仲間をつくり隊	第9回 楽しみ隊 チラシ発送
3日	広域避難者支援	三重県避難者支援団体相談会 出席 (津市:山本、若林、森本)
3日	防災キャラバン	笹川 打合せ (四日市市:森本)
6日	防災キャラバン	第7回 桑名 開催
7日	防災キャラバン	第8回 笹川 開催 (四日市市)
9日	みえで仲間をつくり隊	第59回 打合せ 10名出席
9日	幹事会	9名出席
9日	出張(会議出席)	山田町「わくわく山田座団会」出席 (佐藤)
17日	事務局会議	第35回 定例会議
18日	広域避難者支援	支援団体打合せ (四日市市:山本、森本)
18日	出張(調整等)	三重県 (~22日 佐藤)
18日	防災キャラバン	第9回 四日市 開催
18日	防災キャラバン	第13回 松阪 チラシ発送
19日	防災キャラバン	第10回 紀北 開催
19日	防災キャラバン	第11回 伊賀 開催
22日	みえで仲間をつくり隊	第60回 打合せ 9名出席
22日	出張(講演会出席)	津市「大切な命を守るために~人災を減らすマン・パワーの存在~」出席 (松岡)
24日	広域避難者支援	東海エリア避難者支援団体打合せ
26日	出張(学習会出席)	名古屋市「保養リスクマネジメント学習会」出席 (森本)
28日	出張(調整等)	多気町 (森本、谷畑)
30日	みえで仲間をつくり隊	避難者向け情報 臨時発送
31日	山田町のゆるキャラ	応援サポーター特典シール 発送
31日	山田町のゆるキャラ	第7回 山田町ゆるキャラ制作実行委員会 会議 出席 (山田町:佐藤、外館)
11月		
1日	広域避難者支援	三重県避難者支援団体相談会 出席 (四日市市:山本、若林、森本)
4日	みえで仲間をつくり隊	第9回 楽しみ隊開催 (多気町)
7日	事務局会議	第36回 定例会議
8日	幹事会	10名出席
9日	防災キャラバン	第12回 企業・労組 開催 (津市)
9日	出張(調整等)	伊賀市 (松岡)
13日	みえで仲間をつくり隊	第61回 打合せ 11名出席
14日	出張(会議出席)	名古屋市「パーソナルサポート支援チーム会議」出席 (森本)
14日	出張(会議出席)	山田町「わくわく山田座団会」出席 (佐藤)
15日	防災キャラバン	第13回 松阪 開催
17日	出張(説明会出席)	名古屋市「第2回 子ども被災者支援法説明会」出席 (森本)
22日	事務局会議	活動報告書 臨時会議
22日	広域避難者支援	三重県避難者支援団体相談会 出席 (四日市市:山本、若林、森本)
12月(予定)		
2日	事務局会議	活動報告書 臨時会議
6日	出張(イベント)	津市 (~8日 佐藤、外館)
6日	事務局会議	第37回 定例会議
7日	災害ボランティアシンポジウム	「311を忘れないために~これから三重で取りくむこと~」開催 (津市)
7日	みえボラ交流会	開催 (津市)
11日	みえで仲間をつくり隊	第62回 打合せ
16日	出張(調整等)	山田町 (~18日 山本、若林)
20日	みえで仲間をつくり隊	交流会
28日	みえ災害ボランティア支援センター 閉所	

山田町の紹介

いわてけんしもへいぐんやまだまち

岩手県下閉伊郡山田町

岩手県下閉伊郡山田町はリアス式海岸で有名な景勝地「三陸海岸（三陸復興国立公園）」のほぼ中央に位置し、優美な自然環境に囲まれています。船越半島と重茂半島に抱かれた山田湾は内海で波も穏やかなのが特徴で、その豊かな海は牡蠣・帆立・ホヤ・ウニ・鮑・ワカメ・鮭などの漁場として有名。また椎茸は全国から高い評価を得ており、松茸も国内有数の産地で品質が良く香りが強いのが特徴です。



東日本大震災と山田町の被害状況

東日本大震災 概要

(気象庁資料より作成)

平成 23 年 3 月 11 日 (金)
14 時 46 分

震源 三陸沖 深さ 24km
規模 マグニチュード 9.0

同日 14 時 49 分
津波警報 (大津波) 発表

津波の観測値 (津波観測点)

・えりも町庶野	最大波	15:44	3.5m
・宮古	最大波	15:26	8.5m 以上
・大船渡	最大波	15:18	8.0m 以上
・釜石	最大波	15:21	4.2m 以上
・石巻市鮎川	最大波	15:26	8.6m 以上
・相馬	最大波	15:51	9.3m 以上
・大洗	最大波	16:52	4.0m

全国の被害状況

(平成 25 年 9 月 24 日 内閣府資料より作成)

死者	15,883 名	全壊	126,578 戸
行方不明者	2,654 名	半壊	272,305 戸
負傷者	6,146 名	一部損壊	742,664 戸

全国の避難者数 289,611 名

※避難所の他、親族、知人宅や公営住宅、仮設住宅への入居者も含む

山田町の被害状況

(平成 25 年 8 月 12 日 山田町総務課危機管理室資料より作成)

死者	807 名	全壊	2,762 戸
行方不明者	2 名	大規模半壊	202 戸
応急仮設住宅	1,940 戸	半壊	203 戸
※避難所は平成 23 年 8 月 31 日にて全て閉鎖		一部損壊	202 戸
		※非住家は含まず	

私たちが山田町を支援する理由

ボランティアを行う上で、活動先の地域の方々と信頼関係を構築することが必要不可欠と考え、支援先は1か所に絞り込むことにしました。既に支援に入っている防災 NPO 仲間から情報収集するとともに、

- (1) 首都圏から遠く、ボランティアが集まりにくいと思われた
- (2) 長期の活動に適した無償の宿泊施設を確保できた
- (3) 三重県と似たリアス式海岸の町で、復旧・復興の得がたい教訓を学べると考えられた
- (4) 先遣隊調査により三重から支援できるニーズが見つかったなどの理由から山田町を支援することにしました。



山田町の復興状況 (平成 25 年 10 月 29 日現在)



9月15日、雨中でも開催された山田祭り。たくさんの方が見物に訪れ、祭りを盛り上げました。また被災した大杉神社の本殿が高台に再建されました。



被災した山田町の魚市場が10月10日場所を移し再建されました(写真)。また同じく被災した船越湾漁協の魚市場も9月28日再建されました。



山田町で最初の災害公営住宅(県営・全2棟・72戸)が、平成26年度4月の入居を目指し豊間根地区に建設中です。



かさ上げ区域では住宅基礎の撤去工事が町内のいたる所で進められています。その後、かさ上げ工事が始まる予定です。



高台移転のための造成工事が進行中です。写真は織笠跡浜団地予定地。平成28年度の入居を目指します。



被災した船越小学校は元の場所をかさ上げし、平成26年度の入学に向けて建設中です。

山田町では中心部をはじめ、織笠地区・大浦地区の復興整備事業が着工されています。陸中山田駅周辺はかさ上げ宅地整備を進め、駅前には商業地の再開発を行う予定です。また県立病院・消防署・交番などを造成した高台に移転し、その周辺も住宅地となります。災害公営住宅は全19団地831戸となり、県営547戸・町営284戸をそれぞれ整備し平成29年度まで順次の入居を目指します。海岸では既存の防潮堤の解体が進められており、新たに高さを上げて建設される予定です。



平成 25 年 9 月撮影

みえ発！ボラパックⅡ

みえ発！ボラパックとは？

みえ災害ボランティア支援センターでは、現地へ行ってボランティア活動をしたいと考える方々に対し、費用など様々な負担や不安を軽減し、多くの方が現地で活動していただくためのボランティアバスパックツアーを企画しました。東日本大震災発災後、先遣隊が現地で調整し、4月下旬にボラパック第1便が出発してから約2年半を通して計72便のバスを運行しました。

ボラパックⅠ・Ⅱのちがい

平成23年(4月～11月)の活動【※後に、「ボラパックⅠ」と表現】では、がれき撤去や物資配布などの災害ボランティア活動を中心に行いました。現地の状況の変化に合わせて、平成24年4月以降は名称を「ボラパックⅡ」に変更し、サロン活動を中心に交流を目的とした活動を行ないました。ボラパックⅡに移行してからは、多様なプログラムづくりのため、活動団体を中心にボランティア募集をかけました。また、活動団体独自のプログラムとは別に、個人ボランティアや独自プログラムを持っていない団体ボランティアを対象にみえボラプログラムを考案しました。

出発前の準備

みえ発！ボラパックにご参加いただくにあたり、ボランティアの皆さんには「事前ガイダンス」への参加を必須としました。ボラパックの概要やスケジュールはもちろん、山田町のこと、ボランティアとしての心構えなどを事前にお伝えすることによって、ボラパックや現地のことをご理解いただいてから出発していただけるよう時間を作りました。

また、ボラパックⅡへと移行してからは、活動内容に応じた「講習会」を「事前ガイダンス」の後に受講いただき、活動の準備をしていただきました。

<活動区分>

●独自プログラム **団体**

団体ボランティア独自のプログラム。現地のニーズと照らし合わせ、活動の可否、会場などを調整した後の活動となりました。多数の団体の参加により多種多様なプログラムを提供することができました。

●団体補助 **団体** **個人**

ボラパックⅡ開始当初は主に個人ボランティアの活動の一つとしていましたが、独自プログラムを持っていない団体ボランティアにも補助に入っていました。団体同士で事前に打ち合わせを行った上で活動に入ることができる場合もあり、個人ボランティアとは違う面でのサポートができました。

●みえボラプログラム **団体** **個人**

みえボラから提案するプログラム。ボラパックⅡ開始当初より主に個人ボランティア向けに考案しましたが、独自プログラムを持っていない団体ボランティアにもみえボラプログラムの活動を行っていただく形となりました。また、みえボラプログラムを基に独自で企画を膨らませて活動いただく団体もありました。

●現地ニーズを元に実施した活動 **個人**

現地から上がったニーズ、またはこれまで活動したプログラムの中から再度開催などの要望があった場合の活動。できる限り現地の皆さまからいただいたお声を活動という形で返せるように調整を重ねました。団体ボランティアが参加できない便での独自プログラムへの要望も個人ボランティアの皆さんの協力で実現することができました。

事務局ボランティア

設置当初から、三重県からできるボランティアとしてご登録いただいた事務局ボランティアの皆さん。みえボラ、事務局スタッフの最も心強いサポーターとして様々な場面で手助けいただきました。



事務局ボランティア登録者数

151 人

<主な活動内容>

- ・事前ガイダンスの設営準備・司会進行・説明
- ・講習会の補助・指導
- ・ボラパックⅡの出発・帰着時の受付・お見送りお出迎え
- ・ビブス(ユニフォーム)・タオルの洗濯
- ・活動で必要となる物資の準備・キット作り

などをお手伝いいただきました

参加者の傾向（平成 25 年）

※「みえ発！ボラパックⅡ第 23 便～第 35 便」の参加者データを元に作成しました。添乗スタッフは人数に含まれません。

ボラパックⅡ参加人数 **256** 人

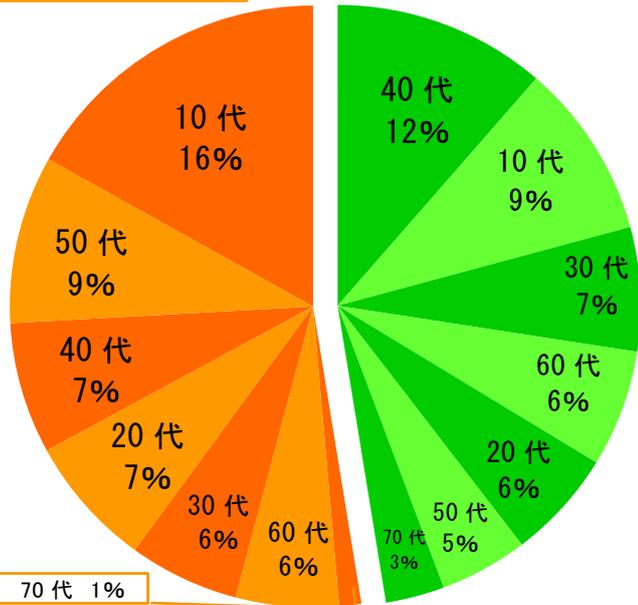
団体参加 **126** 人

個人参加 **130** 人

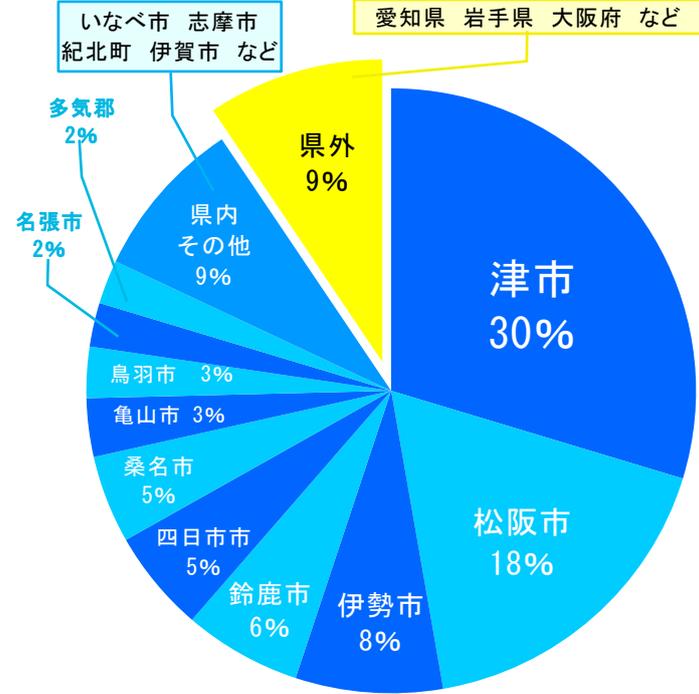
●参加者統計（性別／年代別）

女性 **135** 人

男性 **121** 人



●参加者統計（住所別）



平成 25 年内に複数回参加したボランティアのべ人数

41 人

平成 25 年内最多参加回数

4 回

最多人数の便

第 **35** 便（41 人）

最少人数の便

第 **23** 便（11 人）

最年長

76 歳

最年少

11 歳



●若者が持つエネルギー

昨年と比べて変動があったのは、年代の割合です。特に 10 代の割合が多くを占め、高校生、大学生による団体ボランティアの影響が大きく出ている結果だと言えます。

また、家族での参加により、小学生、中学生の参加も目立ちました。若者たちのはつらつとした活力と子どもたちの笑顔は、山田町の皆さんの笑顔や楽しい声を簡単に引き出してしまうパワーがあることを実感しました。

●リピーターの結束力

昨年同様、たくさんの方が複数回参加してくださいました。その要因として、ボラパックⅡの 4 日間行程やプログラムへの参加しやすさという声をいただきました。また、後半では同じ便で仲良くなったメンバー同士で声を掛け合って再度参加していただくことも多数ありました。「みえボラ」で築かれたボランティア同士のつながりが着実に残り、今後も広がっていくことを確信できました。

団体ボランティア

—独自プログラム団体—

心和む蓄音機 ホーン演奏会

[第26便(3月15日~18日)]
2名(男性2名)

活動内容:蓄音機による演奏会

これまでに単独で山田町他にて活動を実施した後、第26便でボラパックⅡに参加。個人ボランティアが補助に入り2グループに分かれ、仮設住宅談話室・集会所、公共施設等で活動しました。民謡や歌謡曲などのレコード鑑賞を行い、山田町の方々が懐かしいレコードの温かい音に浸る姿や口ずさむ歌声が印象的でした。また、ボランティアとともに法被を着用し手を取り合って踊る方々は大変楽しげで、会場に高らかな笑い声が響きました。

ボラパックはボランティア初心者も参加しやすいスキームがあり安全に最大限の配慮、多様な団体を一貫して支援する態勢が整っていました。

みえボラを通じて三重の皆様と活動するため団体として参加し、三重の次世代を担う若者達、山田町の皆様と語り合う中で、想いに共感させて頂きました。またご当地の民謡等で歌い踊る中で、山田町に代々脈々と受け継がれた郷土文化を感じる事が出来ました。

みえボラでの体験を糧に、三重のボランティアの輪が更に広がることを確信しています。



代表
服部 佳輝さん



三重ラフター (笑い)ヨガクラブ

[第26便(3月15日~18日)]
3名(男性1名/女性2名)

※ボラパックⅡ第6便で参加

活動内容:笑いヨガ体験会

仮設住宅談話室・集会所にて計3ヶ所で活動しました。昨年の活動ではまず、「笑いヨガ」とは何かを知っていただき、慎重に笑いを引き出すところから始まりましたが、時間の経過とともに自然に参加者同士が楽しめる空間が出来上がっていました。笑うことを通して、手を取り合ったり、涙を流したりと、様々な感情を表していたことは大変喜ばしい収穫となりました。

初回はまだまだ皆様が悲しみを堪えておられる様子が伺え、一緒に笑いヨガをする中で、笑い、泣き、笑いながらも涙があふれ、笑顔になっていく方々と過ごせてとても感謝し、心強い力を頂いた思いでした。

2度目は笑って元気になると、とても積極的に笑いヨガに取り組んでくださいました。中でも2歳の坊やも参加の仮設住宅では、この子が皆さんの宝、希望であり、確かな命の継承の尊さを目の当たりにし、共に笑える喜びをに満たされました。



代表
加藤 照美さん



—みえボラプログラム参加団体—

皇学館大学 ボランティアルーム

[第26便(3月15日~18日)]9名(男性4名/女性5名)

活動内容:新聞コサージュ・団体補助

個人ボランティアと新聞コサージュづくり、そして団体「心和む蓄音機ホーン演奏会」の補助と、柔軟に活動に参加していただきました。ボランティア活動に長けた大学生のパワフルな行動力がボランティア同士でも刺激し合える機会となりました。

震災から2年が経とうとする中、原発の報道ばかりで他の被災地の情報が分からず、「私たちの目で見て、感じて、被災地の現状を学生に伝えよう」という思いから、みえボラを利用した。現地では報道だけでは理解できないリアルな現状を体で感じ取った。津波の恐ろしさ、地震が起きたらすぐに逃げる事の大切さを学んだ。未だ支援を必要としている、多くのボランティアに来てほしいという現地の方々の声も聞いた。多くを感じ、学び、多くの人に関われた事、本当に感謝しています。

(代表:久保 圭さん)



ジョイフル アンサンブル

[第 27 便 (3 月 28 日～31 日)]

3 名 (男性 1 名 / 女性 2 名)

活動内容：音楽レクリエーション

団体「三重大学 めばえサークル」が補助に入り、学童、保育園、公共施設の計 3ヶ所で活動しました。各会場によって参加者の年齢が変化中、柔軟にプログラムを切り替えて活動いただきました。鳴り子を手に走り回ったり、新聞を思い切り破いたり、体を動かすことや遊ぶことに少し窮屈になってしまった生活の中で、気持ち良く声を出して笑う子どもたちの姿がとても印象的でした。また、子どもたちとボランティアが走り回る中、ママたちがゆっくりお茶をしてもらえた時間も貴重でした。

震災後、ショックと悲しさと苦しさと何もできないもどかしさで胸がいっぱいでした。何度か岩手県に足を運ぶ中で、音楽やレクリエーションを通して被災地の方々と「たのしい！温かい！一体感を感じられる時間を共有したい」という思いが強くなりました。活動の中で沢山の素敵な笑顔に出会い、勇気や元気、希望をもらいました。音楽と笑顔は世界共通。「人は心でつながっている」ことを改めて教えてもらいました。これからも出会った皆さんの事、東日本大震災の事をずっと忘れず、復興を応援し続けます。



代表
若林 真由美
さん



こころネット

[第 28 便 (4 月 26 日～29 日)]

20 名 (男性 3 名 / 女性 17 名)

※ボラパックⅡ第 2・10 便で参加

活動内容：子どもも大人もわくわく広場／フラワーポットづくり／音楽会／ぼんぼんマスコット＋ミニこいのぼりづくり

3 グループに分かれ、仮設住宅談話室・集会所、公共施設、福祉施設など計 9ヶ所で活動しました。昨年に引き続き第 28 便でも、子どもから大人まで楽しめる多様なプログラムをご用意いただきました。団体からの発案はもちろん、できる限り現地からのニーズに沿ったプログラムの実現に頭が下がる思いです。どの活動も大変人気で会場に参加者が入り切らない場面もある程でした。

「こころネット」の仲間とともに、子どもや女性、障がい者等を対象に、「face to face」被災者と支援者がつながる」を基本に活動してきました。関谷担い手仮設や町民グラウンド仮設には、継続して 3 度訪れ、顔なじみの方もできました。「3 度目の冬、どうしているだろう？」と気にかかります。また、障がい者自立支援施設「はまなす学園」「ケアホームきぼう」の皆さんに、「また、来るね！」と言って別れました。また、行かなくては！



代表
杉本 熊野さん



団体補助活動

三重大学 めばえサークル

[第 27 便 (3 月 28 日～31 日)] 2 名 (男性 1 名 / 女性 1 名)

活動内容：団体補助

主に障がい者交流等の活動を行なっているサークル。団体「ジョイフルアンサンブル」の音楽レクリエーションの補助として活動し、絵本の読み聞かせ等も行ないました。

インターネットでボラパックの活動を知り、普段ない機会だと思い参加しました。津波の被害にあった建物や街を見て悲しい気持ちになりました。

しかし、子どもたちとレクリエーションをして一緒に笑顔になる時間をつくることができ、「笑顔になってくれて来てよかった。」と感動しました。ボラパックに参加でき嬉しく思います。

(代表：岩瀬 徳紀さん)



木曾三川公園 紙飛行機の会

[第29便(5月10日~13日)]2名(男性2名)

[第30便(6月28日~7月1日)]2名(男性2名)

活動内容：紙飛行機教室

2便連続で参加いただき、個人ボランティアが補助に入り、学校や公共施設にて各便3ヶ所ずつ活動しました。集まった子どもたちの歓声と共に空に上っていく色とりどりの紙ヒコーキはキラキラした瞳に浮かぶ様々な思いを乗せて飛んでいくようでした。また、お子さまと同行された保護者の皆さんが童心に帰って楽しんでいただけたことも大変大きい収穫でした。

一枚の紙からワーツ、ウォーと歓声が上がリ、変化、変身し癒される紙ヒコーキは年令に関係無く誰でも何処でも楽しめます。紙ヒコーキでみえボラパックⅡに参加させて頂き、紙ヒコーキが取り持つ縁で色々の方々とお会い出来、又、会話も弾み、気分が和み、一度は皆経験された事が有る紙ヒコーキ。実に奥深い(嵌まれば嵌る程)楽しい遊びです。気が付けばもう十年以上も続け、紙ヒコーキ他、ボランティア活動を第二の人生。大いに楽しんで居ます。



代表
矢野 敏夫さん



三重県人形劇協会

[第29便(5月10日~13日)]2名(女性5名)

[第31便(7月12日~15日)]4名(男性4名)

活動内容：人形劇上演／パネルシアター／腹話術／ギター演奏／手品

三重県人形劇協会から、第29便では「おたまじゃくし」、第31便では「ひょうきんどんぶり」+「はたいも」が参加し、公共施設・福祉施設等で各3ヶ所ずつで活動しました。様々な催しに各会場でお子さまからご年配の方まで楽しい時間を過ごしていただきました。3団体それぞれの特色があり、会場や参加者に合わせたプログラムで終始笑顔が絶えず、終了が名残り惜しいほどでした。

上演場所はあるの？見に来てくれる人はいるの？事務局や現地スタッフの方がすべて準備をして下さっていたため、心配はありませんでした。元気な男の子3人組との会話で「海はきらい。津波があるから。」と言われたことが印象的でしたが、劇が始まると楽しそうに最後まで見てくれました。年配の方もお越しいただきゲームにも参加してくれました。普段自分達が行っている事でボラパックに参加できて嬉しかったです。ありがとうございました。



おたまじゃくし
今村 和代さん



N P O 法人 みえ防災市民会議

[第25便(2月22日~25日)]9名(男性6名/女性3名)

活動内容：新聞コサージュ／ガンブラ交流

みえ災害ボランティア支援センターの幹事団体の一つであるみえ防災市民会議。新聞コサージュづくりと、初の試みであるガンブラ交流の活動を行ないました。

幹事団体の一員として支援先の現状を自分の目で確かめることなどを目的に、積雪期の山田町を訪れました。外海に面する小谷鳥地区の津波被害の大きさには驚きましたが、仮設住宅や中央公民館での活動、街を行きかう人との何気ない会話などを通して、山田町の方々の芯の強さと優しさに触れる機会となりました。(西川 泰弘さん)



N P O 法人 植える美 i n g

[第 24 便 (2 月 8 日 ~ 11 日)]

18 名 (男性 6 名 / 女性 12 名)

活動内容: エアーフレッシュナー制作体験 / ハンドマッサージ

2~3 グループに分かれ、仮設住宅談話室・集会所、公共施設等で活動しました。ボラパックⅡ活動当初よりハンドマッサージ活動にて使用していた相可高校生と万協製薬が共同開発したハンドクリームを携えての活動となりました。高校生とのふれあいに特にご高齢の方々から有り難い声をいただき、笑顔の絶えない楽しい空間となりました。また、エアーフレッシュナーでは、お好みの香りを持ち帰っていただくことができ、参加された方々のリフレッシュした表情がたくさん見られました。

私達、相可高校の生徒が主体となって運営する NPO 法人は「たくさんの人に幸せを」を合言葉に活動をしており、東北の方々を元気付けようとボランティアに参加しました。

現地を見ると今ある日常がどれだけ幸せかと感じました。初めてみる光景に驚き、今、当たり前前に生活している環境が急になくなったら…と考えるだけでゾッとします。それでも元気で明るくやさしい山田町の皆さんに、逆に私たちが元気付けられました。今ある環境を大切にこれからも東北を元気付けていきたいです。



峯川 咲希さん



三重短期大学

[第 31 便 (7 月 12 日 ~ 15 日)]

15 名 (男性 4 名 / 女性 11 名)

※ボラパックⅡ第 17 便で参加

活動内容: 映画上映会 / ぼんぼんマスコット

ぼんぼんマスコット 2 グループ・映画鑑賞会 1 グループに分かれ、仮設住宅談話室・集会所にて計 9 ヶ所で活動しました。ぼんぼんマスコットでは、みえボラプログラムの案を基に学生たちによる様々なアイデアで可愛いマスコットがたくさん作成され、山田町のお母ちゃんたちの人気の的となりました。

映画鑑賞会では地域で人気の高い作品を選んで準備をし、集まっていたいただいた皆さんとゆったりとした時間を過ごすことができました。

私は、現地で活動したい想いで大学のゼミを選び、そのゼミの一環でボラパックに参加しました。実際に被災されたお話を伺った時は言葉になりませんが、みんなで立ち上がろうという想いがひしひしと伝わってきて、非常に感激したと同時に、自分を見つめ直す機会となりました。たくさんの方から「ありがとう」を受け、涙が出そうなくらい嬉しく、また言葉の大切さを学びました。本当に行けて良かったと心から思います。これからも人との出会いを大切に、今できることを精一杯行きたいです。



桑原 菜穂さん



松 阪 市 立 校 東 部 中 学 校

[第 34 便 (8 月 28 日 ~ 31 日)] 17 名 (男性 11 名 / 女性 6 名)

活動内容: ぼんぼんマスコット / 伊勢型紙ランプづくり

3 グループに分かれ、仮設住宅談話室・集会所にて計 9 ヶ所で活動しました。可愛い中学生の訪問に、参加いただいた皆さんの頬が緩み、温かくお迎えいただきました。細かい作業の多い伊勢型紙も集中して作成いただき、綺麗な作品が並びました。

自分で動いて、見て、聞いて、感じれば「何をすべきか」はわかってくる。そして、現地を訪ねて支援を続けることを通して学び、今後の地元の減災に備えていきたい。一人でも二人でも生き残れる人を増やすことが、被災された人々に報いることだと思う。

(乾 秀樹先生)



手づくり工房・ワイワイ

[第 30 便 (6 月 28 日~7 月 1 日)]

1 名 (女性 1 名)

※ポラパックⅡ第 6・19 便で参加

活動内容：ぼんぼんマスコット／七夕飾りづくり

昨年の活動が大変好評で山田町の方々から第 23 便で「お雛さまづくり」(P.15)の要望が上がりましたが、ご予約が合わず、代役として個人ボランティアの皆さんに活動いただきました。

第 30 便では、個人ボランティアが補助に入り 2 グループに分かれ、仮設住宅談話室・集会所など各 3 ヶ所で活動しました。昨年の活動した会場から再度開催の要望を多数いただいていたので会場選定となりました。器用な方々が多い獵師町、皆さん大好きな物づくりに没頭していただくことができました。

19 便で体験して頂いた「お雛様づくり」が好評だと再度 23 便で要請を受け、参加は叶わないためキット作りを頑張りました。その後も続けて楽しんで頂けている事が嬉しく感謝しています。30 便では、七夕飾りで短冊に復興・健康・大漁祈願を書かれ、願いが叶う事を祈らずにはられません。また、私の住む紀北町、山田町でも食されるマンボウのマスコットを毛糸で作し、皆様のひと時の安堵と癒しの姿や表情に、活動してこれた喜びを感じました。



代表
井谷 三枝子さん



津うキャラえがおとどけ隊

[第 35 便 (9 月 14 日~17 日)]

14 名 (男性 6 名 / 女性 8 名)

※ポラパックⅡ第 12 便で参加

活動内容：ステージイベント (ゆるキャラと遊ぼう) / 甲冑着付け体験

昨年活動いただいたことがきっかけとなり、山田町ゆるキャラ (P.21~) 誕生までのサポートをしていただきました。第 35 便では、山田祭にて開催されるゆるキャラお披露目会に津うキャラたちが山田町に駆け付けステージを盛り上げました。個人ボラが補助に入り、お互いに貴重な経験となり結束力も強く活動できました。また、山田祭 (P.15) にて立ち上げたみえボラブースでは、甲冑着付け体験を行たたくさんの子ども達の凛々しい姿が目眩しく残っています。

これまでのポラパックでの活動の集大成に、津うキャラえがおとどけ隊として山田町のキャラクター「ヤマダちゃん」「たけちゃん」の誕生に関わらせていただき大変光栄でした。これからもキャラクターを通じて山田町のみなさんの前向きな活動のサポートや、山田町に笑顔を届ける活動を続けていきたいです。山田町のみなさん、みえ災害ボランティア支援センターのみなさん本当にありがとうございました！これからもよろしく願いいたします！



代表
原田 浩治さん



活動サポート

三重県教育委員会

[8 月 7 日~8 日] 17 名 (男性 11 名 / 女性 6 名)

活動内容：ぼんぼんマスコット

三重県教育委員会が主催・運行する、三重県内の高校生を対象とした被災地への体験学習として、みえ災害ボランティア支援センターが、山田町でのボランティア活動の調整、事前ガイダンス等をサポートしました。

1 日目は「save the children 子どもまちづくりクラブ」の中高生との交流会に参加し、2 日目は仮設住宅等で、山田町の方々とぼんぼんマスコットづくりをしながら交流させていただきました。たった 2 日間でしたが将来の町づくりを真剣に考えている子どもたちの姿や、南海トラフ巨大地震が想定される三重県の私たちを気遣ってくださった被災者の方々から、大きな元氣と感動をいただきました。さらに三重県の高校生たちがこの 2 日間で大きく成長したと実感できたことも大きな感動でした。

(南伊勢高等学校 河北 冠校長先生)



個人ボランティア

個人ボランティアには、現地から寄せられるニーズ、団体ボランティアの活動補助、または当センターから提案するプログラムを事前に講習を受けた上で活動していただきました。今年は、みえボラ独自のプログラム、山田町の方々からいただいたニーズを元にした活動を行ないました。

-----みえボラプログラム-----

●継続プログラム

昨年から継続して実施したプログラム

ハンドマッサージ

ボラパックⅡ第24・27・35便で活動

ボラパックⅡ開始当初から活動を継続しているハンドマッサージ体験。山田町の方々からも大変好評いただき、平成24年のボラパックⅡ第1便から通して最多の活動回数を実施しました。手と手が触れ合って、ゆっくりお話をして、身も心も温まっていただける活動となりました。

新聞コサージュ

ボラパックⅡ第25・26・29・35便で活動

ボラパックⅡ第19便よりスタートした新聞コサージュは、家にある材料で簡単につくっていただけることと、新聞で作ったとは思えない可愛いコサージュが大変人気で、たくさんの方が個人的に引き続き作成してくださっていることを耳にし、大変嬉しく思っています。

●新規プログラム

今年より開始した新たなプログラム

ガンブラ交流

ボラパックⅡ第25・29・32便で活動

男性向けの活動としてできることはないだろうかと思案しボラパックⅡ第25便より開始した「ガンブラ交流」。ガンブラのうたい文句に集まったボランティアとガンダム世代の参加者さんの熱いトークバトルが繰り広げられる場面や、多数参加いただいた子どもたちが熱中する姿も微笑ましく、新しいボランティア活動・会場の雰囲気づくりができました。

※「ガンブラ」…ガンダムのプラモデルの略称



参加者の声

ガンブラ交流が企画された第25便と第29便に参加しました。「ガンブラ交流」募集を知ったとき「面白そうだけど、しばらくプラモなんか作ってないなあ」と思いつつも応募しました。結果は「これは面白い!」というのが率直な感想でした。

「ガンブラ交流」は「参加者からお金を頂きながら自分も楽しむ。」という異質な活動で、参加して頂いた方々との交流などを通じて、災害支援活動の違った面を学ぶことが出来ました。



ボラパックⅡ
第25・29便
山口 匡史さん

ぼんぼんマスコット

ボラパックⅡ第30・31・32・33・34便で活動

ボラパックⅡ第28便で団体「こころネット」が行った「ぼんぼんマスコット」活動をきっかけに、第30便よりみえボラプログラムとして始動しました。家にある材料で作れるようにと準備を進め、大変多くの会場で活動しました。毛糸を巻いて切るだけという簡単なレシピで、幾度も活動を重ねる度に、参加される方々の腕がどんどん上がってはオリジナル作品もたくさん増えていきました。



参加者の声

お婆ちゃんに頼まれてマスコットを作りました。彼女の希望は少し前に亡くなった愛犬のナナちゃん。彼女の話を聞きながら一生懸命に作りました。完成したマスコットを見て、懐かしそうに「ナナちゃん」と呟いた彼女を今も思い出します。彼女の代わりにマスコットを作ることで、彼女の心に少し触れた気がします。愛犬を偲びながらも、その大切な想いとともにも前へ進むためのお手伝いが、私にもできたでしょうか。あのひと時もマスコットも、お婆ちゃんやみなさんの癒しとなり、励みとなりますように。



ボラパックⅡ
第23・33便
西村 朋子さん

● 幼稚園・保育園での活動

平成 23 年の「絵本読み聞かせ」活動よりつながりのできた幼稚園・保育園よりニーズをいただき活動しました。

☆引っ越しお手伝い

ボラパックⅡ第 30 便にて、山田幼稚園の引っ越しのお手伝いをさせていただきました。園の先生方、園児の保護者の皆さんと仮園舎から新園舎への引っ越しを行いました。大型の荷物など人出が必要なものを中心にお手伝いし、大変喜んでいただけました。また、休憩時間などで交流ができ、とても有意義な時間になりました。



☆夕涼み会お手伝い

ボラパックⅡ第 32 便にて、山田町の 3 つの保育園の夕涼み会をお手伝いさせていただきました。主に、出発前に講習を行ったバルーンアートを中心に、それぞれの保育園の要望にお応えしながらの活動となりました。どの保育園でもバルーンアートは大変好評で、お子さまからお年寄りまで皆さんが風船を手に夕涼み会を楽しんでいただきました。

大浦保育園



バルーンアートブースと他の屋台の補助活動。休む暇もない大賑わいの後は花火鑑賞。園児から手づくりうちわのプレゼントもあり涼しく過ごせました。

大沢保育園



バルーンアートブースとやぐら設営、花火大会をお手伝い。最後には盆踊りの輪の中に入り、子ども達・地域の方々と一緒に踊るなど、たくさんの交流を持ってました。

船越保育園



バルーンアートブースと会場設営・ダンス等、ステージイベントをお手伝い。手作りヒーローに扮したボランティアの登場も大変好評でした！

参加者の声

ボラパックの魅力は、継続的なバス運行のため仕事の都合に合わせて参加できた事、同じ便の素敵な仲間達と活動でき感動を共有できた事、山田町の皆さんから感謝の言葉・笑顔をたくさん頂けた事、私のような県外参加者を 3 回も受け入れて貰えた事です。最後の 3 回目は小 6 の娘と一緒に参加できました。娘も、自分の進路を決めていく折々で、この経験が活かされていくかと思えます。

みえボラの精神は、関わったメンバーに様々な形で引き継がれていくものだと思います。みえボラ魂、大阪でもしっかりと繋いで行きます。



ボラパック第 13 便
ボラパックⅡ
第 19・32 便
星島 三徳さん

現地に足を運ばなければわからないことのない空気、テレビの枠内ではない視界いっぱいの風景、皆様の口から聴く言葉の重みを感じました。

私に何ができるのかとずっと考えていましたが、「来てくれるだけで嬉しい」と皆様が言うてくださいました。部外者の私たちだからこそ話せることもあるとも。

手芸や紙飛行機をする中で垣間見た皆様の笑顔は私の宝物です。テレビで出ることが少なくなっただけ復興は終わっていません、私は忘れたくないです。



ボラパックⅡ
第 23・29 便
加藤 千春さん

●お雛さまづくり

ボラパックⅡ第 19 便で団体「手づくり工房・ワイワイ」が活動した「お雛さまづくり」が大変好評で、山田町から再度開催のご要望をいただきました。

「手づくり工房・ワイワイ」のご指導・ご協力のもと、ボラパックⅡ第 23 便で個人ボランティアのプログラムとして実施し、たくさんの方に体験いただきました。



●ファミリーバドミントン大会

ボラパックⅡ第 16・20 便で団体「ふれ愛スポーツクラブ」が活動を行なった「ファミリーバドミントン」の大会が山田町で開催され、ボラパックⅡ第 23 便でサポートさせていただきました。

午前は大会、午後は体験会とし、約 30 名の参加者の皆さんに気持ち良く体を動かしていただくことができました。



●サマーチャレンジやまだ 2013

ボラパックⅡ第 33 便では、昨年度に引き続き山田町社会福祉協議会が主催する「サマーチャレンジやまだ 2013」にて活動させていただきました。昨年は団体「こころネット」による木工教室とテントペイントを行い、今年は個人ボランティアによるみえボラプログラム「伊勢型紙のランプづくり」を実施しました。刃先に集中して夢中になれる伊勢型紙、そして美しいデザインから溢れる温かい光。予想以上の人気に、ご希望いただいた皆さま全員に作成いただけなかったこと、反省とともに大変ありがたく感じています。



●山田祭

みえボラとして最後の活動をさせていただいたのは第 35 便での山田町最大のお祭り「山田祭」。お祭り広場「復興山田がんばっぺし祭り」にテントをお借りして「みえボラブース」を立ち上げました。これまでのボラパックⅡの活動で山田町の皆さんからご好評をいただいた 3 つのプログラム、ボラパックⅡに 3 回参加いただいた団体「桑名の連鶴を広める会」さん指導による「連鶴」、ボラパックⅡのみえボラプログラムで一番多く実施した「ハンドマッサージ」、新聞で手軽に作れるかわいい「新聞コサージュ」を体験していただきました。また、第 35 便に同乗した団体「津うキャラえがおとどけ隊」の活動補助も行いました。

残念ながら台風の接近により、2 日目の活動ができませんでしたが、これまでにみえボラの活動に参加いただいた皆さま、関わっていただいた皆さまにたくさん温かい声をかけていただきながら活動することができました。また、ブースの中にはこれまでの活動で山田町の皆さんが見せてくれた笑顔の写真を展示しました。



山田町の方のつぶやき

ボラパックⅡでは、昨年の活動に比べて直接山田町の方々と接する機会が多くあります。毎便、参加者の皆さんが聞いた現地の方の声を書き留めていただきました。その「つぶやき」をまとめた用紙をガイダンスで配布し、出発する前の心の準備の一つとして目を通していただいていたいました。今年の「つぶやき」の一部をこちらで紹介합니다。



今はこういうものを作るのが一番の楽しみ。

津波は見てからでは逃げられない！

この人はダンナさんがいないから気兼ねしないで一緒に写真撮ってもいいよ。

自然に荒らされたけど、自然と生きていく。

私たちがこの震災のことを次世代の子どもたちに伝えなくてはいけない。

今度はゆっくりきてね。

いつどこにおるときでも津波のことを考えてる。どこに行けばどこに逃げるか考えてる。

みなし仮設は交流がなくてさびしい。

どうせ、私のことなんて、すぐ忘れるんでしょ？

長生きしたくない。

2年経って、今はもうこの景色があたり前になっている。

生きなければ
今がない。

毎日毎日が幸せ。

ストレス発散法はボランティアさんと接して話すこと。

津波のすぐ後はこんなに笑えなかった。

家族が2つに分かれてバラバラ。

三重にももうすぐ来るね。

津波のことは、もう忘れたよ。

津波ですべて流されてしまっても、作ったら、なんとかなる。

復興ってどういうこと？元の状態に戻すことなら、お母さん返してよ。

今日は月命日。やっぱりあの日の事を思い出してしまう。

あなたたちの元気が私たちの元気になるからね。

遠くから、わざわざありがとう。私は家も娘もみんな流されたからねえ。

嫌なことは、3歩歩いて忘れるもの。

仮設での生活は楽しみが無いので来て良かったです。

私は目が見えないけれど、みんなの思いとパワーをもらったよ。本当にありがとう。ありがとう。

津波で家が無くなっちゃったから、宮古に転校するんだ。

将来、復興を担う今の中高生の意見を聞いてみるのが重要。

桜があったけどどこかに流れて行った。隣の家も。でも、ここが一番。

復興にはあと100年かかる。

みえの人たちにはお世話になったの。だから来てくれるだけで嬉しいの。

今日は気持ちよく寝られる。

私も震災時は本当にこわい思いもしました。でも今、こうやって仕事ができるので幸せです。

「津波てんでんこ」は、家族同士の信頼関係がないとうまくいかないよ。

がれきがなくなると町が消えてしまうみたいでさみしい。

津波から1年、2年、と月日が経つごとに不安は増す。今でも毎晩、津波のことを思い出すので、夢中になれる時間をつくってもらったことに感謝しています。

漁師町(山田)の女は強いよ。

山田町まなびの時間

平成 24 年 4 月、みえ発！ボラパックⅡ第 3 便より、「被災地のことを知る時間」として実施してきたのが、「山田町まなびの時間」です。およそ 1 時間 30 分の「まなびの時間」では、山田町住民の方に「山田町まなびのガイド」として町を案内していただきながら、震災当時の体験、町の被害状況や復旧・復興の状況、ご自身の思いなどを語っていただきました。

平成 25 年 2 月、第 23 便からは、当時の様子や体験を聴くだけでなく、対話や交流に重きを置くように心がけました。山田町の方が、何を大切に思い、大災害に見舞われた今、何を支えに生きているのかを、同じ時間と空間を共有することで感じ取れるように配慮したつもりです。ガイドをお願いしたみなさんも、時間の経過とともに、ただ当時の状況を話すだけでなく、今後の災害に対する取り組みや考えなどをお話しいただける方も増えてきました。

一緒に「防災・減災について考える」時間を持たせたことで、これから起こるとされる災害にどのように備え、自分が何をすべきか考えるきっかけを得ることができたのではないのでしょうか。

「山田町まなびの時間」プログラム

※プログラムの設定は現地スタッフが担当。内容は便ごとに変わりました。

第 23 便 当時の体験と、女性の目から見た漁業復興
2. 8 三陸やまだ漁業協同組合 大浦女性部のみなさん

第 24 便 水産加工業の工場見学と産業復興について
2. 9 水産加工業経営 木村さん

第 25 便 薬剤師から見た東日本大震災
2. 23 薬剤師 内田さん

第 26 便 当時の避難所の状況について
3. 16 元小学校長 菊池さん

第 27 便 鯨と海の科学館見学と被災後の第三次産業の在り方
3. 29 鯨と海の科学館 専門指導員 道又さん

第 28 便 震災前・後の児童生徒のこころの変化
4. 27 元中学養護教諭 古川さん



第 24 便

NPO 法人 植える美 ing のみなさんが、水産加工業の現場を見学。産業復興への取り組みをまなびました。



第 27 便

大災害を乗り越えた鯨の骨格標本。鯨と海の科学館では、海の怖さと偉大さを知ることができました。



第 28 便

時には宿泊場所での開催も。大災害のあとの学校の様子や、子どもたちへの対応についてお話しいただきました。

「山田町まなびの時間」への声 第 26 便

三重県の大学に通う私は、よく友達に「山田町に行く理由」を聞かれる。理由は言葉で表せないから、友達を山田町に連れていく。友達は自然と山田町の人々の温かさを感じて笑顔になれる。人の温かさって言葉では表せないですよね。

震災で亡くなった方々の御冥福をお祈りするとともに、私たちを山田町の方々に出会わせてくれてありがとうございます。

また必ず山田に帰ります！！



第 26 便参加者 玉井隆至さん

あの、夢であってほしいと思う「未曾有の大災害」から、間もなく 3 年が経過しようとしています。この度は、当時の緊迫した状況、避難所運営の様子をお話しさせていただきましたことに感謝申し上げます。ご参加いただいた皆様は、どの方も真剣に耳を傾けていただきました。被災地を想う三重県の方々には「有難うございます」の言葉しか見つかりません。東北人、力を合わせて頑張りますので、これからも宜しくお願いします。



第 26 便ガイド 菊池清太さん

第 29 便 震災時の自身の体験と現状
5. 11 学習塾講師 竹内さん

第 30 便 座談会と文化交流
6. 29 三陸やまだ漁業協同組合 大浦女性部のみなさん

第 31 便 漁業・漁業施設の復旧、復興状況について
7. 13 大沢地区 漁師 大石さん

第 32 便 水産加工業の現状と
災害を乗り越えるために必要なこと
7. 20 水産加工業経営 木村さん

第 33 便 復興状況への私見とボランティアへの想い
8. 10 山田町議会議員 豊間根さん

第 34 便 これから起こる災害を生き抜くために
8. 30 元山田消防署副署長 三浦さん



第 30 便

大きな被害を受けた大浦地区の漁協女性部のみなさんとの座談会。山田町の風土・文化を感じることができました。



第 31 便

漁業を襲った大災害。地元の漁師さんに震災前・後の作業と生活の違いについてお話しいただきました。



第 34 便

三重県松阪市の中学生が、町内を回りながら、被害の大きさと、生き抜くための知識をまなびました。

第 35 便 見る、感じる、参加する、山田町の魂
復興山田がんばっぺし祭りを一緒に楽しむ
9. 15 山田祭りに関わるすべてのみなさん

ガイドの設定をしなかった第 35 便。ボラパックⅡ最終便は、山田の祭りを町の人たちと一緒に楽しんでいただくことを「まなびの時間」とさせていただきました。「盆や正月に帰郷しない人も、この祭りには必ず帰ってくる」と言われる山田の祭り。出展したブースを訪れた町の人との会話から、この祭りをどれほど楽しみにしていたかがわかります。郷土芸能や神輿の巡行を間近に見て、町の空気を肌で感じ、山田町の人々の魂、町の人々が誇りに思う文化にふれることができました。

祭りに参加するという、これまでの「まなびの時間」にはない体験をしていただけたのではないのでしょうか。



第 35 便

「山田町まなびの時間」への声 第 30 便

少しでも山田町の方々の心に寄り添った活動をしたい、そのために「まなびの時間」は、私にとってなくてはならないものでした。ともに生きてきた海に荒らされ、それでも、これからも海とともに生きていく。「生きる」ということの重さをこれほど強く感じたことはありませんでした。

この時間を通じて私がすべきことは、いざ来る災害時に「生き延びる力」を備えることだと感じています。大切な時間をありがとうございました。



第 30 便参加者 三浦洋子さん

みえボラのみなさんは、あまり多くのことを質問しませんでした。被災地のことや人の気持ちをしっかり考え、心に寄り添う活動をしているのが伝わってきました。できれば、みなさんには被災してほしくはありません。災害への危機感を日ごろから持つのは難しいことですが、常に災害のことを念頭に置いて、自分たちの、子どもたちの命を守ってほしいと思います。みえボラのみなさんの笑顔に感謝しています。



第 30 便ガイド 阿部秋子さん

子どもたちが考える、
防災と減災についての意見交流会

山田町子どもまちづくりクラブメンバー

三重県教育委員会が主催する交流事業で、岩手県を訪れた高校生が、山田町でボランティア活動をするにあたり、活動に併せて「まなびの時間」も設定させていただきました。公益社団法人セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン「山田町子どもまちづくりクラブ（通称 KYT）」のメンバーとの意見交流です。あえて、「子ども同士」の環境

としたことで、お互いの地域のことや、防災・減災に必要なことを存分に話し合うことができました。引率の先生方には、別行動で町内の視察などをしていただきました。

また、意見交流会終了後には宿泊場所へ移動し、夕食を食べながらの交流会。にぎやかな雰囲気の中で会話も弾みました。三重県と山田町、次代を担う子どもたちの、良い交流の場所になったのではないのでしょうか。



「山田町まなびの時間」への声 県教委

僕は昨年に引き続き東北へ復興ボランティアに参加させていただきました。瓦礫は撤去されているだけ、また途切れたままの線路を目にした時は、とても胸が痛くなりました。

KYTさんとの交流では防災についての見直しをグループに分かれて話し合いをしました。2年半たった今、防災に対する意識が薄れていた頃、貴重な話も聞くことができました。また、何気なく生活している今、見直さなければならない点も多く見つかりました。特に、避難所の確認は帰宅してすぐ行かない、より安全な場所へ避難することを決めました。KYTの人たちの防災への意識、また今回も山田町の方々の温かさに感動しました。

KYTのみなさん、山田町のみなさん、ありがとうございました。

県教委参加者 石塚僚さん



「三重県の高校生と一緒に」という言葉にひかれ、交流会に参加させていただきました。意見交換をした時にどんどんアイデアが出て、他地域の人と関わりたいという目標がかないました。交流の機会をくださった方々に感謝しています。また、意見交換をする中で、三重県と山田町の防災の課題の共通点、相違点をまとめることにより、お互いの地域に足りないものを知ることができ、防災意識が高まったような気がします。

三重県の人たちが親しみやすく、話しやすかったおかげで充実した時間が過ごせました。ありがとうございました。

県教委ガイド代表 外館ひなたさん



前年に引き続き、今年の「まなびの時間」でも、多くの方にご協力をいただきました。生々しく残るあの日の記憶や体験を話す環境をつくることは、過去を克服できる可能性もある反面、当時の感情を思い出す危険も含む、非常にこわい取り組みでした。

「うまく話せないと思う」「人前で話すことなんかない」「何を話したらいいのかわからない」。これは、ガイドをお願いするにあたり、必ずといっていいほど、相手に返される答えです。最初は不安げに引き受けていただいたガイドのみなさんも、「まなびの時間」が終了すると、とても晴れやかな表情をされていました。そして、お話を伺ったボランティアも多くのことを感じ、まなぶことのできる素晴らしい時間を作ってくださいました。

震災で辛い思いをされた方に「まなびのガイド」を依頼することは、心苦しいことでしたが、今後、三重県でも起こるとされている大災害で、学んだことを活かせるよう、一人でも失われる命を減らすための取り組みがなされることを期待しています。

「まなびの時間」があってよかった！

「まなびの時間があってよかった！」とは、帰着直後のふりかえりの場で必ず聞くことばです。

約 15 時間バスに揺られて現地に降り立ち、町を回りながら、まなびのガイドさんが語る被災当時の様子、被災前の町のこと、そしていまのことや気持ちに耳を傾ける 1 時間半が、ボランティア活動に入る気持ちを整えるうえで、とても貴重だったと言います。

様々な分野の、様々な立場のガイドさんをお願いするのは現地スタッフのふたり、被災直後では難しかった山田町の方によるまなびの時間はボラパックⅡになくはない企画になりました。ガイドを引き受けていただいた皆さんに心から感謝します。

事務局長 若林千枝子

山田町のゆるキャラ

平成 24 年 8 月、キャラクターによる町おこしを目的とする「津うキャラえがおとどけ隊」のみなさんが、みえ発！ボラパックⅡに参加、山田町でキャラクター交流活動をしたことをきっかけとして、「山田町にも、ゆるキャラほしいよね」という声が上がリ、山田町のゆるキャラ制作事業を開始しました。

山田町のゆるキャラができるまで

いつでも会える・だれでも会える、山田町を PR するキャラクターをつくろうと呼びかけ、「山田町ゆるキャラ制作実行委員会」が発足。当センターは事務担当として、キャラクター誕生のお手伝いをさせていただきました。デザインの公募を全国に向けて行い、寄せられたデザインから、実行委員会メンバーで優秀作品 10 点を選出、町内投票所と Facebook で一般投票をした結果、最優秀作品 2 点が、山田町のゆるキャラ「ヤマダちゃん」「たけちゃん」が誕生しました。

「山田町にもゆるキャラ、いたら良いよね」
「いたら嬉しいよね！」

デザイン一般公募
応募資格は「山田町を好きな人」
(平成 25 年 4 月 15 日～6 月 1 日)

山田町を好きでいる人なら誰でも応募できる!!
山田町の魅力を全国にPRできる「ゆるキャラ」をつくろう!!

募集期間: 平成25年4月15日(火)～6月1日(日)

募集対象: 山田町を好きな人(年齢、性別、住所は問いません)

募集内容: 山田町の魅力を全国にPRできる「ゆるキャラ」のデザインを募集します。応募作品は、山田町の魅力を表現し、かつ、ゆるキャラらしいデザインであることが条件です。

応募方法: 応募作品は、A4用紙に描き、応募用紙に貼付して、〒990-0001 山田町役場 企画課 宛に郵送してください。

応募用紙: 応募用紙は、山田町役場 企画課 宛に郵送してください。

応募料: 応募料は、応募作品1枚につき、100円です。

抽選: 応募作品の中から、実行委員会メンバーで優秀作品10点を選出します。

投票: 優秀作品10点の中から、町内投票所とFacebookで一般投票を行います。

発表: 投票結果に基づき、最優秀作品2点を発表します。

制作: 発表された最優秀作品2点に基づき、ゆるキャラの制作を行います。

デビュー: 制作されたゆるキャラ2体を、山田町のゆるキャラとしてデビューさせます。

ゆるキャラ応援サポーター募集開始
(平成 25 年 5 月 8 日)

ゆるキャラフェイスブックページ開設
(平成 25 年 5 月 12 日)

ゆるキャラツイッター開設
(平成 25 年 5 月 21 日)

ボラパックⅡ第12便で津うキャラ9体が来町
(平成 24 年 8 月 19 日～20 日)



ゆるキャラ制作の呼びかけ (平成 25 年 3 月～)

山田町ゆるキャラ制作実行委員会発足
11 団体参加 (後に 12 団体に)
(平成 25 年 4 月 5 日)

応募作品データ

およそ 1 ヶ月半という募集期間の短さを感じさせないほど、多くのデザインをお寄せいただきました。山田町への想いが詰まった作品や、この募集を機に山田町のことを調べてデザインした作品もありました。さらには、学校をあげて応募に取り組んでいただくなど、注目を浴びた事業でした。どのデザインも、ユーモアや独創性にあふれ、非常に難しい選考となりました。

応募総数 351 点 (うち無効 19 点)

※無効基準…応募期間終了後に到着したもの

転作であることが明らかなもの	氏名未記載のもの
最年少応募者 (年齢記載分)	小学 1 年生
最年長応募者 (年齢記載分)	78 歳
山田町内応募作品数	71 点
岩手県内応募作品数	32 点
岩手県外応募作品数	229 点

一般投票（平成 25 年 6 月 5 日～15 日）

開票（平成 25 年 6 月 16 日）

最優秀作品発表（平成 25 年 6 月 22 日）

お披露目準備・運用規約決定等
（平成 25 年 8 月～）

実行委員会予備審査
ツヨインジャーも三重県から参加
（平成 25 年 6 月 3 日）



完成お披露目（平成 25 年 9 月 15 日）



今年 9 月に行なわれた「復興山田がんばっぺし祭り」では、イベントステージをお借りして、町のみなさんにごあいさつ。この日が「ヤマダちゃん」と「たけちゃん」の誕生日です。津うキャラえがおとどけ隊のみなさんも、新しいキャラクターの誕生をお祝いに来てくださいました。

さらに、山田町の公認キャラクターとして認定されるという、輝かしい出発点をいただきました。今後も復興の原動力として、また、みなさまに愛されるキャラクターとして、山田町を盛り上げていくことが期待されます。

キャラクタープロフィール



山田町上豊間根地区出身。マツタケのお父さん、しいたけのお母さんから生まれました。元気のない人を見ると、お母さんに作ってもらった「こびり（おやつ）」を食べさせてあげる、心優しい女の子。山に登って、海をながめるのが大好きです。東日本大震災で落ち込んだ、しいたけ栽培の復興を願っています。

たけ
ちゃん

ある日突然、「もっと山田町のいいところを、みんなに教えたい！」と、海から飛び出してきました。毎朝、ホタテのネクタイをしめ、鏡の前で気合を入れます。頭についているのは、お気に入りの髪飾り。山田湾に浮かぶ、オランダ島と小島がモチーフです。背中でも山田町をアピールしています。



ヤマダ
ちゃん

現在の「ヤマダちゃん」と「たけちゃん」



ふだんは「道の駅やまだ」のレジの奥でお店番をしています。お買い物に来られたお客様も、笑顔で写真を撮っていかれます。踊りの練習もして、アイドルグループのご当地版 PV にも出演しましたし、ゆるキャラグランプリにもエントリー。山田町を PR するため、ポスターやふるさと CM の撮影、イベントに出かけたりと大忙しです。

「ヤマダちゃん」と「たけちゃん」は、どこへ行っても大人気。子どもから大人まで、たくさんの方にあたたかい声をかけていただいています。今日もどこかで、たくさんの笑顔に出会っています。

「山田町ゆるキャラ制作実行委員会」参加団体

山田町観光協会 山田町社会福祉協議会 山田町商工会 山田町特産品販売協同組合 NPO いわて郷プロジェクト
 ほっとサポートセンター山田 三陸やまだ漁業協同組合 新生やまだ商店街協同組合 船越湾漁業協同組合 山田町
 公益社団法人セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン 津うキャラえがおとどけ隊 みえ災害ボランティア支援センター
 (掲載順不同 なお、今後は新団体として発足予定です)

山田町ゆるキャラ制作実行委員会より

このたび、みえ災害ボランティア支援センター様の協力を経て誕生した山田町のゆるキャラ「たけちゃん・ヤマダちゃん」。このゆるキャラも、東日本大震災がなければ誕生していなかったのではないかと思います。震災により壊滅的な被害を受け、被災地となってしまった山田町。まだ震災の爪痕が色濃く残る時期に「津うキャラえがおとどけ隊」のみなさんが、道の駅やまだでキャラクターとのふれあいイベントを行い、子どもたちと接している姿を見て、「これは山田町にも必要なのではないか」と思っていました。それから山田町のゆるキャラ作成が決定、そして2体のキャラクターが誕生しました。子どもたちだけではなく、おともも笑顔にするゆるキャラの癒し効果は絶大です。これからは、保育園や幼稚園、小中学校などを訪問し、子どもたちとの交流を深める事により、子どもたちが山田町を好きになってくれることを願っています。また、岩手県内外のイベントに積極的に参加し、「たけちゃん・ヤマダちゃん」と共に日本全国に山田町の良さをPRしたいと思います。



最後になりましたが、みえボラの皆さんの活動には心から感謝しています。山田町の復興が成されたときには、ボランティアではなく観光で来ていただき、山田町を楽しんでいただければと思います。本当にありがとうございました。

道の駅やまだ 副支配人 豊間根仁さん

今回のゆるキャラ制作については、三重県のご理解とみえ災害ボランティア支援センターの多大なるご支援、ご協力がなければ実現することができず、ヤマダちゃん、たけちゃんにも会うことができませんでした。

現在、各種イベント、ふるさとCM大賞出演、保育園等の催し、地域福祉セミナーなどに引っ張りだこです。又、デザイン使用では町のホームページ、ガイドブックの表紙、ポスターへの掲載など多種多様な活躍をしています。

今後は、二人の存在が町を明るくし、復興の原動力となり、町のPR、情報発信などに活用してまいります。そして、全町民から認められ、愛されるゆるキャラにしていきたいと思えます。

山田町観光協会事務局長 湊 敏さん



ゆるキャラサポーター

山田町のゆるキャラ制作にあたり、1口1,000円の応援サポーターを募集しました。応援サポーターの資格は「山田町と山田町のゆるキャラ誕生を応援する方」とし、キャラ誕生を熱く見守り応援していただける方としました。結果、三重県を中心に全国から162件、約70万円ものご協力をいただきました。

サポーターのみなさまには、お礼として限定シールを準備。山田祭りでの新キャラクターお披露目ののち、郵送にて発送しました。

この「山田町のゆるキャラ応援サポーター」は、山田町ゆるキャラ制作実行委員会の一員として、当センターが事務を担当しました。



ゆるキャラ応援サポーター事業に係る収支報告

収入の部

応援サポーター募金	695,312円
-----------	----------

支出の部

着ぐるみ制作費	467,250円
印刷製本費	84,141円
旅費交通費	27,735円
通信運搬費	87,970円
消耗品費	25,496円
雑費	2,520円
租税公課	200円

収入の部 合計 695,312円

支出の部 合計 695,312円

防災キャラバン・市町等連携事業

平成23年4月28日にボランティアバス（みえ発！ボラパックⅠ・Ⅱ）の運行を開始して以降、平成25年9月14日発のボラパックⅡ第35便まで、のべ1,290名のボランティアが岩手県山田町に継続して活動しました。この多くの人材が山田町で得た知識や経験は、やがて起こるであろう南海トラフ地震等の災害において、大きな力となります。

3年目となる今年、三重県内各地において、このボランティア経験のある方々と、企業・労組、地域の市民や行政、関係諸団体の方々との間に、平素からの交流が生まれるような機会を設けるべく、防災キャラバン・市町等連携事業「大規模災害、そのときボランティアができること」を開催しました。

事業の概要は、地域住民や行政、社協、自主防災組織、企業等、災害ボランティアに関心ある方々を対象に、東日本大震災の被災者または支援者による講演と、みえ発！ボラパック参加者による活動報告です。防災/災害ボランティアの担い手のネットワークを地域に構築するきっかけを提供することを目的に、いざ地元で大規模災害が起こった時にどんなボランティア活動が必要とされるのか、参加者と共に意見交換を行い、平成25年7月～11月末までに県内各地で13回実施しました。

第1回 名張・伊賀

日時：7月14日

場所：名張市つつじが丘公民館

基調講演：「3.11ふるさとを語り継ぐ」

菊池 清太 氏（元釜石市立甲子小学校 校長）

ボラ活動報告：2名

参加者数：89名



第2回 津

日時：7月15日

場所：みえ市民活動ボランティアセンター

基調講演：「3.11ふるさとを語り継ぐ」

菊池 清太 氏（元釜石市立甲子小学校 校長）

ボラ活動報告：2名

参加者数：26名



第3回 学校・教職員

日時：8月24日

場所：メッセウイング・みえ

基調講演：「東日本大震災というペール」

黒澤 克行 氏（岩手県立大槌高校職員）

ボラ活動報告：3名

参加者数：22名



第4回 多気

日時：9月20日

場所：多気町社会福祉協議会

基調講演：「日頃の近所付き合いから大災害を乗り越える」

阿部 秋子 氏（山田町消防団第3分団婦人消防協力隊長）

ボラ活動報告：2名

参加者数：51名



第5回 伊勢

日時：9月21日

場所：いせ市民活動センター北館

基調講演：「日頃の近所付き合いから大災害を乗り越える」

阿部 秋子 氏（山田町消防団第3分団婦人消防協力隊長）

ボラ活動報告：2名

参加者数：54名



第6回 鈴鹿

日時：9月29日

場所：天澤山 龍光寺

基調講演：「東日本大震災における消防団活動」

大石 秀男 氏（岩手県山田町消防団副団長）

ボラ活動報告：2名

参加者数：84名



第7回 桑名

日時：10月6日

場所：長島輪中図書館

基調講演：「東日本大震災を経験して」

大宮 好子 氏（山田町在住 仮設団地区長）

ボラ活動報告：2名

参加者数：32名



第8回 UR笹川団地

日時：10月7日

場所：UR笹川団地集会所

基調講演：「東日本大震災を経験して」

大宮 好子 氏（山田町在住 仮設団地区長）

ボラ活動報告：2名

参加者数：48名



第9回 四日市

日時：10月18日

場所：四郷地区市民センター

基調講演：「避難所の運営と実情」

狩野 英夫 氏（山田町在住 避難所を運営）

ボラ活動報告：2名

参加者数：82名



第10回 紀北

日時：10月19日
 場所：紀北町社会福祉協議会
 基調講演：「避難所の運営と実情」
 狩野 英夫 氏（山田町在住 避難所を運営）
 ボラ活動報告：2名
 参加者数：36名



第11回 伊賀

日時：10月19日
 場所：ゆめぼりすセンター
 基調講演：「遠野まごころネットに学ぶベースキャンプ地としての被災地支援」
 多田 一彦 氏（(特非)遠野まごころネット理事長）
 シンポジウム：「伊賀は遠野になれるか」
 参加者数：59名



第12回 企業・労組

日時：11月9日
 場所：三重県勤労者福祉会館
 基調講演：「東日本大震災 産業の復旧・復興について」
 湊 敏 氏（岩手県山田町観光協会事務局長）
 ボラ活動報告：2名
 参加者数：91名



第13回 松阪

日時：11月15日
 場所：松阪市産業振興センター
 パネルディスカッション：「ニーズ・ボランティアの移り変わり」等
 パネリスト：福士 豊 氏、阿部 寛之 氏（(社福)山田町社会福祉協議会 職員）、みえ発！ボラパック（I、II）参加者
 参加者数：79名



■ 来場者アンケートより（抜粋）

基調講演、ボランティア活動報告を聞いての感想

- ◇ 三重で災害が起こった時にも考えるべきところがたくさん聞いた。
- ◇ 災害時、どのような状態になるのか、どう行動すべきか考えさせられた。
- ◇ 今になって眠れないという話に、心が痛む。
- ◇ ずい分辛い体験をされたのに、今は明るく、周囲の方々に接しておられる事、素晴らしいと思いました。
- ◇ 参加された方が、出会いとつながりを強く感じたと話されたことが、印象的だった。
- ◇ ドロカき以外の仕事もあることが判った。
- ◇ 今まで物的ボランティアのみ思っていたが、精神的ボランティアも加えて、なにができるか勉強していきたい。
- ◇ 私には、とても災害ボラは無理・・・と思っておりましたが、体力が無くても出来る事があるんだと、わかりました。
- ◇ 自分がボランティアに行ったときのことを思い出しました。決して忘れてはいけないのですが、自分の中でも風化していることに気付かされました。
- ◇ 災害ボランティアのイメージが、変わりました。



わが町で大規模災害が起きたとき、あなたがボランティアとして活動するためには、今、何が必要だと思いますか？

- ◇ 防災、減災の勉強をし続ける。知識と訓練。
- ◇ 心構えと防災準備とシミュレーション。
- ◇ 今はまだ漠然とした状況で、どうしたら良いか分からない。
- ◇ ボラ活動の輪を広げる。
- ◇ 減災への心構え。日頃のネットワーク。
- ◇ ネット音痴なので、その関係のスキルアップかな。
- ◇ これから、考えてみます。
- ◇ 情報キャッチ、講座等を受けて、知識・技術をつけておく。
- ◇ 各個人が、災害を重く考えてほしい。
- ◇ 日頃の近所づきあいをよくするように一層つとめたい。

県内避難者支援 みえで仲間をつくり隊！

東日本大震災により、東北・関東から多くの方が三重県内各地に避難・疎開し生活をされています。震災から3年近く経過した現在も帰郷される方は少なく、今もふるさとを離れての避難・疎開生活や生活再建に、不安を感じる声が絶えません。

みえ災害ボランティア支援センターが、そういった県内避難者の方々の支援活動として、平成23年7月から取り組んでいる「みえで仲間をつくり隊！」も3年目を迎えました。三重県での生活をより楽しんでいただく事を目的とした平成24年の活動に引き続き、主に交流イベントを中心として、センタースタッフ、事務局ボランティア、企業・団体の協力を得て取り組んできました。

■三重県の情報誌「月刊 Simple」等の定期発送および関係各所からの情報提供

三重県の情報誌「月刊 Simple」や、三重県内のイベント・相談会の情報、東北三県からの情報や支援団体からの交流会のご案内を毎月1回定期的に発送しました。また、ホームページ等での案内も随時行いました。定期発送以外にも必要に応じて臨時発送を行うなど、避難されてきた方々にいち早く情報をお届けしました。

■交流イベント「楽しみ隊」

県内各地でイベントを開催し楽しんでいただく「楽しみ隊」。参加された皆さまに楽しんでいただくだけでなく、スタッフも一緒になって楽しむイベントを企画・開催しました。

第7回楽しみ隊 in 五桂池 開催日：5月19日 会場：五桂池ふるさと村 参加者数：20人

子ども達だけではなく大人の方にも楽しんでいただける旬の味覚と、動物とのふれあいを楽しんでいただこうと開催いたしました。当日は、時折り小雨の降る天候でしたが、美味しいイチゴや普段はふれることのない動物、そしてボランティアによるミニコンサートと、盛りだくさんの内容で賑やかな一日を過ごしていただくことができました。



(参加者の声)

- ・楽しかったです。お弁当だったので、皆さんと（ボランティアの方とも）いっぱい話が出来て良かったです。
 - ・いちご摘みは子供も楽しんでたくさん食べていました。甘くておいしかったです。
- 動物園はあいにくのお天気でしたが、スタッフの方が傘を持ってきてくれたり、屋根の下で色々なふれあいができたので、とても良かったです。



第8回楽しみ隊 in うきさとむら 開催日：8月25日 会場：うきさとむら 石窯ふれあい工房 参加者数：13人

豊かな自然の中で、なかなか体験する機会のない石窯を使ったピザつくりを開催しました。自分の手で生地からつくって石窯で焼き上げたピザは絶品。朝からあいにくの雨でしたが、落ち着いた空間で話も弾み、お腹いっぱいになった一日でした。

(参加者の声)

- ・楽しい雰囲気スタッフの方も気さくに話かけて下さり満喫できました。自分でピザをのばしてトッピングして石窯で焼き上げてもらって、最高においしかったです！自然たっぷりの場所でおいしいものをたくさん頂いて癒されました～！
- ・初参加でドキドキでしたが皆さんの笑顔になごみました。
- ・みなさまに優しくしていただき、子どもたちもすぐ地を出して、楽しくすごさせていただきました。火吹き竹、川魚の塩焼きなど、ふだん体験できないことをさせて頂きました。また、様々な方とお話出来た事もとても嬉しかったです。ありがとうございました。



最後となる楽しみ隊は、平成23年11月の第1回楽しみ隊で好評を得た芋煮会を再び開催。みんなで一緒に材料を買って、作って食べて、油田公園の広い芝生の中、何種類もの温かい芋煮に舌鼓をうちました。芋煮をいただいたあとは、みんなで話をしたり子どもたちと遊んだり、楽しい一日でした。



(参加者の声)

・イモ煮を皆でワイワイ作って食べて、とても楽しくおいしい時間でした。数回参加させて頂きましたが、毎回楽しくスタッフの方も気さくであたたかく、感謝、感謝です!!最後ということで、さみしいですが、また何かの機会にお会いできるといいですね…



・「ふれあいの館」「まめや」から始まり、丹生の自然豊かな場所で、スタッフさん、ボランティアさんがいつものようにあたたかく子どもたちを見てくれたり、遊んでくれたり、私は野菜を切るのに集中してました。このようなすてきな場所で避難者の方、スタッフの方たちとお話ししたりすることができて良かったです。

楽しみ隊ではありませんが、3月11日を迎えるにあたり、心を落ち着ける坐禅体験を開催しました。



(参加者の声)

- ・坐禅は初めてでしたが、非常に落ちついた気持ちになれた気がします。
- ・経験した事ない事ができよかったです。なかなか他の地域に出かける事がないので、その点もよかったです。

■生活支援（コープみえ・くらしたすけあいの会協働事業）

東日本大震災で三重県に避難されている方々への支援の一つとして、コープみえ・くらしたすけあいの会のシステムを活用した事業を今年も実施。5月1日～9月30日の期間で利用料等の一部を協働で支援しました。

啓 発 活 動

■三重からみつめた東日本大震災（3月17日）

東日本大震災から2年が経過し、世間の関心が薄れ、震災が過去のものとなりつつありました。支援活動を行っている方がみつめた2年間と、被災・避難された方々の思いをお聴きすることで、私たちがこれからできることを考えるための報告会を開催しました。

三重県内の避難者支援活動を行っている方々と実際に避難されている方、三重から被災地の支援活動を続けて行っている方々と被災当事者の方、それぞれの立場からこれまでの2年と今をお話いただきました。

また、基調講演の講師として、精力的に東日本大震災支援に取り組まれているタレント・山形弁研究家のダニエル・カールさんをお迎えし、震災当時からこれまでの取り組みをユーモアを交えながらお話いただきました。講演後には鈴木英敬 三重県知事との熱い対談もあり、様々な立場から2年と今を考える機会となりました。



■写真パネル・各種資料貸し出し

東日本大震災の啓発活動に役立てていただくため、希望する団体・事務所等に以下の貸し出しを実施しました。

- ・ 発災直後やその後の山田町の様子（現地スタッフ撮影）および「みえ発！ボラパック」の活動を記録した写真パネル
- ・ 事務局が所有する震災関連 DVD や書籍



■講師派遣

地域や学校等から、被災地でのボランティア経験者への講演依頼があった場合、ボラパック参加者に講師を依頼し、活動経験を話していただきました。「東日本大震災」や「ボランティア」について、伝え考えていただく機会となりました。

情報発信

みえ災害ボランティア支援センターでは、以下の様々な媒体を使い情報発信をしました。

■ホームページ <http://mvsc.jp>

ボラパックⅡ参加者募集・活動報告、みえで仲間をつくり隊活動報告など、各種情報を掲載。他団体のイベント情報提供もしました。

■ツイッター

- ・ 事務局スタッフアカウント [mvsc_jimukyoku](#)
ボラパックⅡガイダンスや各種イベントの様子のほか、山田町を中心とした被災地の「今」の話題をツイート。

- ・ 山田町スタッフアカウント [mvsc_yamada](#)

山田町の現地スタッフ中心に、「今」の山田の状況やボラパックⅡの活動の様子などをお届けしました。

■フェイスブック <http://www.facebook.com/mvsc0311>

ホームページおよびツイッターと連携した情報の発信。

■ニュースメール（不定期配信）

ボランティア募集、震災支援・防災関連イベントなどのお知らせをお届けしました。

他の地域への災害ボランティア活動支援

東日本大震災以降も、豪雨・豪雪や台風など、国内外各地で様々な災害が起きました。

大規模な災害の発生時には、多くのボランティアが被災者・被災地の大きな力となります。それらのボランティア活動が円滑に行われるよう、様々な形で支援活動を行うのがみえ災害ボランティア支援センターの役割です。

今年も東日本大震災の支援活動を継続しつつ、発災時のボランティア募集等の情報発信や、9月の台風18号で被災した伊賀地域の災害ボランティアセンターへの人的支援などを行いました。

■主な活動支援

- ・ 4月6日 暴風雨に関する注意喚起情報提供
- ・ 7月28日 山口・島根豪雨の災害ボランティア活動に関する情報提供
- ・ 台風18号災害のボランティア活動に関する情報提供
- ・ 台風18号災害への対応のため、伊賀市災害ボランティアセンターへの人的支援を実施。



東日本大震災 継続支援団体交通費助成事業

三重県を拠点とし、現地への継続した支援活動を行っている団体への交通費の一部助成を通じて、より多くの方々が東日本大震災の被災地を訪れ支援活動を行う機会を増やすとともに、その活動を通じて参加者の防災・減災意識の向上に寄与することを目的として、この助成事業を実施しました。助成した4団体には、それぞれの活動を通じて、現地および参加者との交流が深められたとともに、支援活動に参加された方々にも貴重な気づき・学びの場となりました。

◆防災一座（所在地：四日市市）

代表：松野 博さん

活動期日：5月2日～5月5日

人数：24名

活動内容：“みんなでお祭りに行こう！”宮城県女川町熊野神社例大祭大作戦！

代表者の一言：震災後、支援活動をしている中で、「今年の春祭りは三重のみなさんに協力してほしい！」とのお声掛けをいただいたことを契機に、女川流お祭り参加型観光産業の礎づくりにつながればとの思いから、昨年に引き続き実施しました。観光産業としての位置づけとまちの活性化につながれば、まちの復興にあわせて、産業として育っていく可能性があるのではと思います。その強い思いから、今年も、お祭りに参加し、思い出をつくり交流を深めあってきました。



◆ほがらか絵本畑（所在地：菰野町）

代表：三浦 伸也さん

活動期日：7月11日～7月14日

人数：20名

活動内容：“被災地保育交流ツアー in 陸前高田（9ヶ所の保育園にて活動）”

ふれあい教室の園庭でバーベキュー・ダンス・合唱等の交流会

代表者の一言：信頼関係の構築に努め、3回目にしてようやく陸前高田市と三重県の保育士との交流会が実現できました。1,000キロ先に保育士仲間ができ、その仲間同士が交流し合い、子ども達のために切磋琢磨する関係づくりのスタートがようやく叶いました。今後は、支援する・されるという関係を越えて、継続的な関係へとつなげていきたい。



◆あすなる応援便（所在地：鈴鹿市）

代表：樋口 博也さん

活動期日：7月26日～7月29日

人数：15名

活動内容：“夏まつり実行隊” 実施会場：宮城県気仙沼市、岩手県陸前高田市にて

代表者の一言：鈴鹿市を26日夜、大型トラック・マイクロバスの計2台で出発し、陸前高田市へ。陸前高田市では、仮設団地の集会所周辺にて、また気仙沼市では開発総合センター施設を借用して、夏まつりを開催しました。会場内では、物資配布ブース・飲食ブースを設置し、特に飲食ブースでは、炊き出しの準備などに現地の高齢者の方のご参加をいただき、大いに盛り上がりました。地元の方との一体感を強く感じる事ができ、「草の根交流」が広がってきていることを実感させていただきました。



◆心和む蓄音機ホーン演奏会（所在地：亀山市）

代表：服部 佳輝さん

活動期日：9月21日～9月29日

人数：3名

活動内容：“心和むレコード演奏会”

演奏会会場：岩手県陸前高田市・大槌町・山田町、福島県相馬市、宮城県石巻市にて

代表者の一言：震災以降の大変な状況の中、“戦後復興期の流行歌、ご当地の民謡など”を通して、かつての時代に思いを馳せて、若々しい元気な気持ちになって頂けたのではと思っています。被災地の現状をみて、心と心を結ぶ交流活動が今後より欠かせないものになるのではと強く感じました。また、今回の活動が今後のより充実した交流活動のための環境づくりにつながっていくものと思っています。



収 支 報 告

東 日 本 大 震 災 支 援 収 支 報 告

(平成 25 年 4 月 1 日～10 月 31 日)

【収入の部】

(単位：円)

予 算 科 目	金 額	摘 要
県の負担金	16,517,000	
みえ防災市民会議負担金	2,500,000	
参加負担金	2,257,500	ボラパック参加費：大人 15,000 円、18 歳未満 5,000 円 ※大人往復 140 名・片道 7 名・18 歳未満 21 名
寄付金	541,310	57 件（銀行振込 37 件、窓口 20 件） ※9 月 30 日募金活動終了
目的寄付金	695,312	「ゆるキャラ応援サポーター募集」募金活動：162 件 ※8 月 31 日募金活動終了
前年度繰越金	5,163,904	前年度寄付金の繰越金
※その他	1,218	利息(事務費通帳 786+支援金通帳 432)
合 計	27,676,244	

【支出の部】

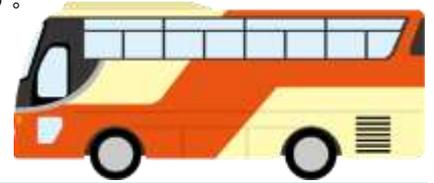
① 負担金 ②みえ防災市民会議負担金 ③参加負担金 ④寄付金（含：繰越金） ⑤目的寄付金 ※その他

予 算 科 目	金 額	財 源 内 訳						摘 要
		①	②	③	④	⑤	※	
ボランティアバス事業費	5,409,736	○		○	○			第 28 便～35 便に係るバス代・活動費他
県内避難者支援事業費	361,063				○			県内避難者支援活動に係る諸経費（イベント経費・メール便代他）
東日本大震災継続支援団体交通費助成事業費	199,535				○			継続支援をする団体への交通費助成金
情報交流事業費	0				○			
その他事業費	627,963				○			各種支援事業等に係る諸経費
ゆるキャラ制作事業費	890,544				○	○		ゆるキャラ制作に係る諸経費
旅費交通費	641,560	○						事務局職員に係る出張旅費
消耗品費	232,377	○						事務局運営に係る事務用品代他
印刷製本費	53,390	○						キャラバン事業広報チラシ印刷代他
通信運搬費	420,023	○						固定電話・携帯電話通話料・メール代他
燃料費	5,746	○						山田町出張時レンタカー燃料代
使用料及び賃借料	97,252	○						銀行口座振込手数料・会場使用料他
防災キャラバン市町等連携事業費	440,210	○						県内各地域にて 11 回実施（13 回開催予定） 講師旅費・報酬
給料手当	6,556,839	○						事務局職員（三重 5 名・山田町 1 名）給料手当
法定福利費	1,019,837	○						上記職員の社会・労働保険料
被災地支援事業費	948,328		○					事務局職員（山田町 1 名）給料手当、社会・労働保険料
予備費	0				○	○		
合 計	17,904,403							

※平成 26 年 1 月末日締め収支決算報告は、2 月初旬に当センターホームページに記載させていただく予定です。

【ボラパックⅡ 1便あたりの経費及び参加者負担分】について

- ・大型バス1台の経費（含：高速道路料金+乗務員経費）+マイクロバス経費（まなびの時間）
※およそ55万円 1行程：2夜行4日 季節・行楽シーズン等により、若干金額が異なります。
- ・参加者負担分（1.5万円 ※18歳未満0.5万円）について
平均乗車人数を18名と想定。参加者の方々に総額のおよそ半額の1.5万円をご負担していただき、県の負担金からもおよそ半額を支出しています。
※なお、不足分が生じた時および高校生以下の割引分については支援金で賄っています。



ご支援・ご協力いただいた企業・団体

企業・団体だけでなく、個人の方々からも、活動支援金のご寄付や物資提供、ボランティアやスタッフへの差し入れなど、たくさんのご支援・ご協力をいただきました。本来なら全ての方々のお名前をご紹介させていただくところですが、匿名の方も非常に多く、また紙面に限りもあるため、ご紹介を省略させていただきます。お一人おひとりの皆さまに、心より感謝申し上げます。

また、ここに掲載していない企業・団体につきましても、匿名や他団体を介してなど、多大なるご支援・ご協力をいただきました。重ねてお礼申し上げます。

■ ご支援、ご協力いただいた企業・団体一覧（平成25年1月1日～11月4日 敬称略・順不同）

<活動支援金・支援物資のご支援・ご協力>

あじさい茶屋実行委員会／アクアクリニック伊賀／川越町防災ボランティアネット／三重県立桑名高校厚生委員会・くわな特別支援学校／元気です たまきまつり実行委員会／(社福)玉城町社会福祉協議会／玉城町職員組合／タンポポの会／手づくり工房・ワイワイ／松阪地区農村青少年クラブ連絡協議会／マママルシェ／三重街道マラニック実行委員会／三重県消防協会北勢支会

<ボラパックⅡの活動に必要な資材等のご支援・ご協力>

株式会社エスパ／手づくり工房・ワイワイ／中尾カメラ／ふれ愛スポーツクラブ／伊勢型紙協同組合／鈴鹿市伝統産業会館／桑名の千羽鶴を広める会

<山田町での活動に関するご支援・ご協力>

山田町／(社福)山田町社会福祉協議会／山田町社協復興支え愛センター／山田町観光協会／山田町商工会／ほととサポートセンター山田／山田町スポーツ推進委員会／山田町教育委員会／大沢保育園／第一保育所／船越保育園／大浦保育園／轟児童館学童施設／荒川小学校／大沢小学校／山田北小学校／大浦小学校／山田南小学校／岩手県北自動車(株)／三陸やまだ漁業協同組合大浦女性部／木村商店／鯨と海の科学館／山田消防署／(社福)三心会／街かどギャラリー／医療法人晃生会／(社福)親和会／道の駅やまだ／びはん株式会社／ホームワンサトー／高砂商店街／嶋田鉱泉株式会社／和井内工務店／龍昌寺／スズキプリント／(公社)セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン／(公財)国際開発救援財団 FIDR／OMF 岩手支援プロジェクト いっぱい 山田／(特非)石峠宅老所

<県内避難者支援活動に関するご支援・ご協力>

(特非)Mブリッジ／(株)ZERO／(株)ぎゅーとら ハイジー店／(有)松本畜産／うきさとむら本店／おきん茶屋／支援ねっと@みえきた／(社福)育心会多気天啓苑／ふくしまいせしまの会／ふれあいの館／宇気郷地区市民センター／花と動物ふれあい広場／五桂池ふるさと村／甲陽商事(株)／車川山里ファン倶楽部／車川自治会／石窯ふれあい工房／曹洞宗塔世山四天王寺／多気町 勢和の語り部会／(農)せいわの里まめや／生活協同組合コープみえ／コープみえ・くらしたすけあいの会／桑名市／いなべ市／鈴鹿市／亀山市／四日市市／津市／松阪市／伊賀市／名張市／伊勢市／鳥羽市／志摩市／尾鷲市／熊野市／朝日町／川越町／木曾岬町／東員町／菰野町／多気町／明和町／大台町／大紀町／紀北町／玉城町／度会町／南伊勢町／御浜町／紀宝町

<ボランティア活動の啓発（写真パネル展示）のご協力>

(社福)津市社会福祉協議会芸濃支部／百五銀行安濃支店／(社福)玉城町社会福祉協議会／長島輪中図書館／三重県立桑名高校／平林克己写真展「陽」SUZUKA 実行委員会／10Years サポート実行委員会／三重県聴覚障害者支援センター

<ボランティア活動の啓発（防災キャラバン・市町等連携事業）のご協力>

(公財)岩手県スポーツ振興財団陸中海岸青少年の家／山田町消防団／山田町婦人防火クラブ連合会／(特非)遠野まごころネット／山田町観光協会／(社福)山田町社会福祉協議会／つつじが丘・春日丘自治協議会／津市ボランティア協議会／津市市民活動センター／(社福)津市社会福祉協議会／津市／三重県教育委員会／(社福)多気町社会福祉協議会／多気町／いせ市民活動センター／伊勢消防団互助会／天澤山龍光寺／(学)鈴鹿学園／(特非)SUZUKA 文化塾／長島輪中図書館／UR 笹川団地自治会／笹川団地管理サービス事務所／国際共生サロン／四郷地区自主防災協議会／四郷地区連合自治会／(社福)紀北町社会福祉協議会／伊賀市災害ボランティアセンター／三重県労使会議（三重県経営者協会・連合三重）／(社)三重県労働者福祉協議会／(社福)松阪市社会福祉協議会

<その他のご協力>

百五銀行／ゆうちょ銀行／株式会社グリーンズホテルグリーンパーク津／東紀州コミュニティデザイン／(社福)三重県29市町社会福祉協議会

資料・書式集について

みえ災害ボランティア支援センターでは、東日本大震災の支援活動において作成・使用した様々な書式や資料を、ホームページに公開します。当センターの理念に基づき試行錯誤しながら作成したものであり、完全版ではありませんが、今後の支援活動において何かしらの参考となれば幸いです。

みえ災害ボランティア支援センター ホームページ <http://mvsc.jp/>

● ホームページにて公開する資料・書式（予定）

- ・活動報告書（2011.3.11～2012.1.31）
- ・活動報告書（2012.2.1～2012.12.31）
- ・ボラパック参加申込書
- ・ボラパック活動報告書
- ・つぶやき用紙
- ・活動希望用紙
- ・保護者同意書
- ・健康管理記録票
- ・「土嚢袋は危険がいっぱい」リーフレット
- ・安全管理マニュアル（動画）
- ・サロン活動で使用したレシピ集
- ・ヒヤリハット報告書

など





みえ災害ボランティア支援センター (MVSC)

活動検証 次代への提言

～ 3年間をふりかえって ～

目次

参加者の傾向、データ	34～37
県内避難者支援／広域避難者支援	38～40
みえ災害ボランティア支援センター～設置と運営～	41
活動検証	42～44
支援センターによせる言葉	45
支援から交流、そして継承へ（センター長挨拶）	46
発行者情報	47



参加者の傾向（ボラパック全体）

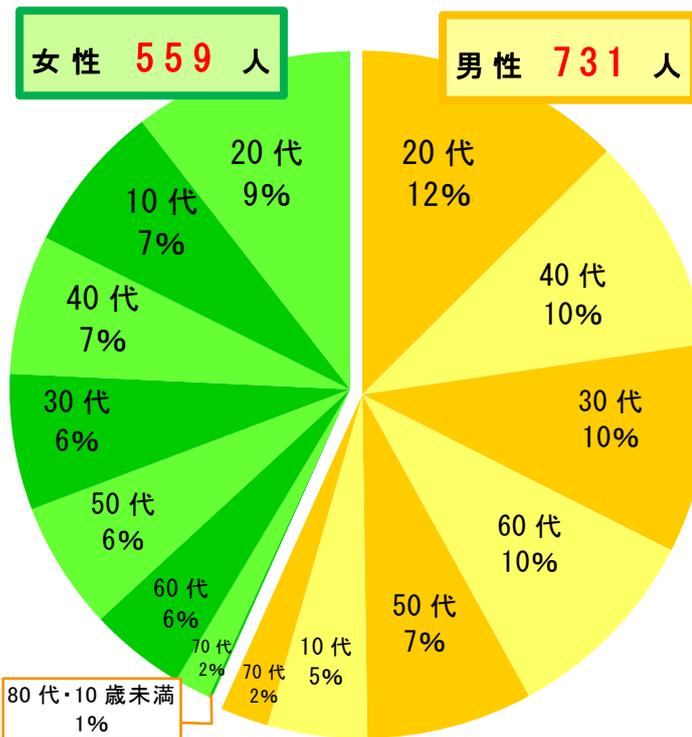
ボラパックⅠ参加人数
(平成23年4月～平成23年11月) **648人**

ボラパック
総参加人数 **1290人**

ボラパックⅡ参加人数
(平成24年4月～平成25年9月) **642人**

日別活動総人数 **4955人**

●参加者統計（性別／年代別）



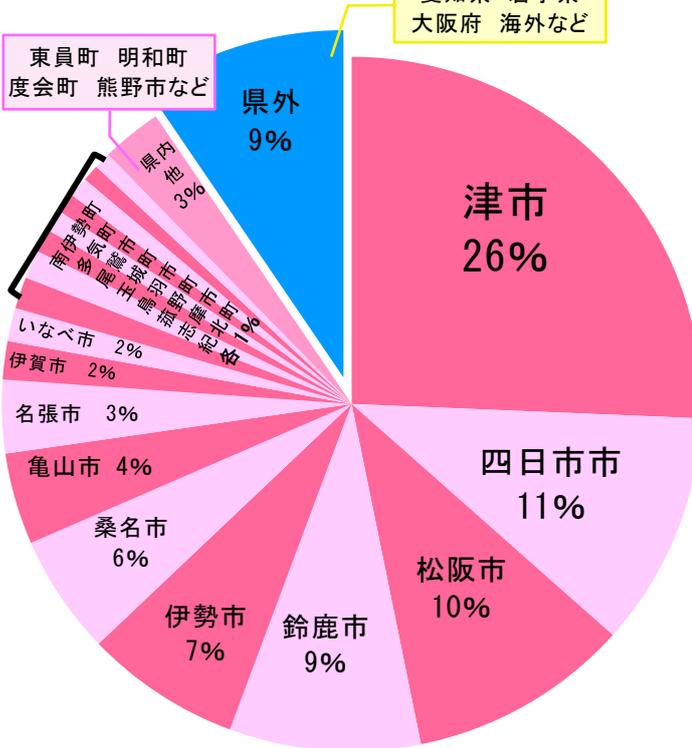
●活動ニーズとボランティア

ボラパックⅠでは主に屋外作業が多く、ボランティアも男性が圧倒的に多く参加してくださいました。ボラパックⅡではサロン活動を中心としていたため、女性のボランティアも多く参加いただけるようになりました。結果として、ボランティアニーズに応じて男女に大差なく活躍いただくことができました。

●世代を越えたチームの絆

ボラパック運行当初は危険を伴う作業も多くあり、18歳以上の方のみに限られていた参加も、ボラパックⅡからは保護者同伴で年齢制限なく参加いただけるようになり、参加者の年齢層も幅広くなりました。最年少は9歳、最年長は81歳と、世代を超えてのチームづくりは各便の色を彩る重要な要素でした。ボラパック2年半を通して、ボラパックに参加しなければ交わることのなかったであろうチームのメンバーとの出会いは、今後も続く確かな絆となっています。

●参加者統計（住所別）



●三重県民の意識

2年半を通して、発着地である津市からの参加者が圧倒的に多く、次点の市町は流動的でした。近隣の県外からの参加者も徐々に増える中、常に県内からの参加者が9割を占めていたことを大変誇りに思います。全国的に被災地へのツアーなどが減少していく中で、継続して運行しているボラパックは県外の方々からも強い支持をいただきました。県内の方々が進切れることないように意識高く参加していただいたおかげです。

●広がるみえボラの輪

ボラパック開始当初は三重県在住・勤務している方に限定して募集し殺到するボランティアを制限しました。ボラパックⅠ第6便より募集制限を解消したところ、県外からの参加も多数ありました。三重県内はもちろん、全国にみえボラによって築かれたネットワークが広がっています。山田町へ馳せる想いとみえボラという共通の認識が、今後の災害ボランティア活動に大きな原動力となることと確信しています。

ボラパックⅠ
最多リピーター
全5回

ボラパックⅠ 第3・9・20・30・35便
ボラパックⅡ 第27・30・33便
堀井 理さん



平成23年5月より11月まで合計5回参加し、四季折々の変化も体感しました。被災地域の住民の方と直接お話しする機会は少なかったですが、東北地方の方々の礼儀正しさ、粘り強さに感銘を受けました。ボラパックを通して、地域の方、ボランティア仲間同士で信頼関係を築く共助の持つ役割の重要性を痛感しました。

今後大きな災害が発生した時には、今回得た知識・運営のノウハウを活かして、災害ボランティアとして取り組んでいきたいと思ひます。

ボラパックⅠ 第21・31便
ボラパックⅡ 第2・8・10・21・28・30・35便
浅井 剛史さん

ボラパックⅡ
最多リピーター
全7回



2年4ヶ月の山田町との関わりは様々な経験や出会いの数々でした。大震災が風化しつつある中、その対極にある“忘れない”、“関わりを切らさない”人々の存在を感じることができました。そうした方々と連帯して、まずは山田町からいただいたバトン（震災への備え）を確実に伝え、拮げ、確かなものにします。自分にできることは公私ともに人に接する機会の多い立場を利用して数多く発信し、ボランティア活動も続けることです。

最年長 **81** 歳

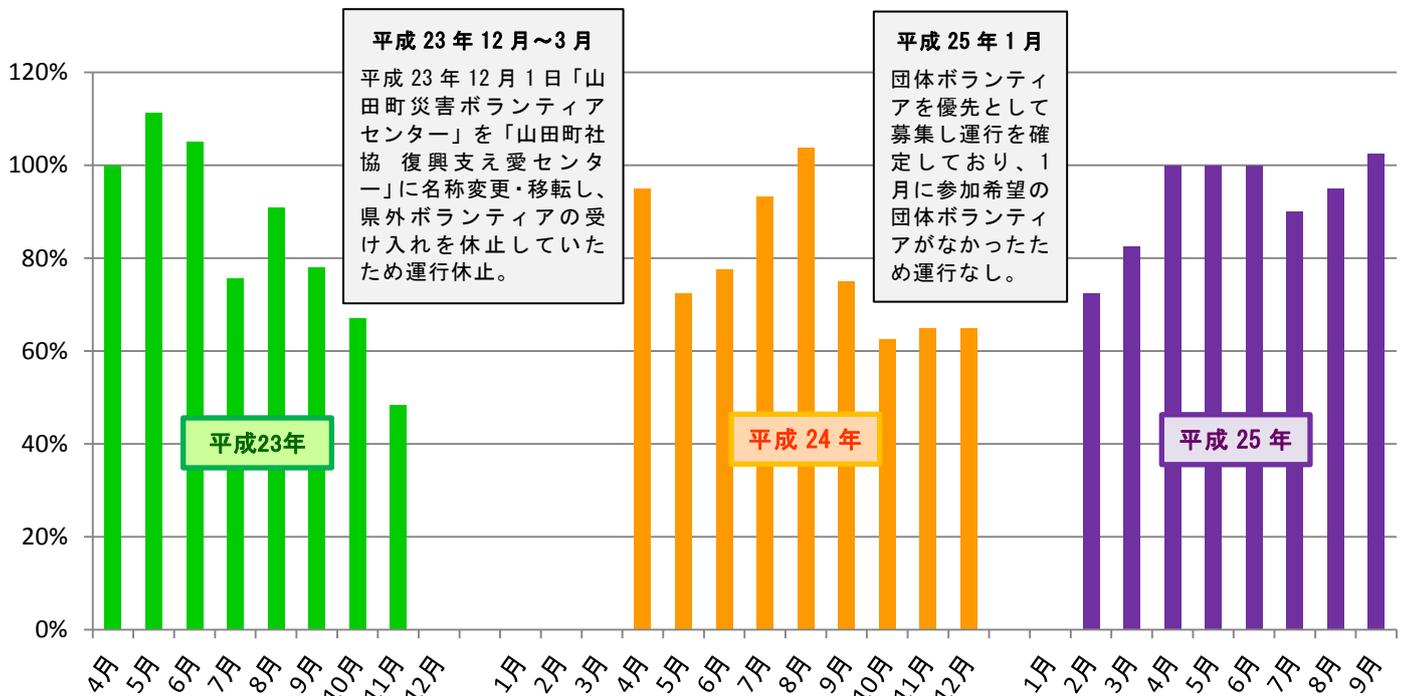
最年少 **9** 歳

リピーター人数（実数）

139 人

※ボラパックⅠ・Ⅱを通して2回以上参加された方

●定員数に対する参加者数の割合



平成23年12月～3月

平成23年12月1日「山田町災害ボランティアセンター」を「山田町社協 復興支え愛センター」に名称変更・移転し、県外ボランティアの受け入れを休止していたため運行休止。

平成25年1月

団体ボランティアを優先として募集し運行を確定しており、1月に参加希望の団体ボランティアがなかったため運行なし。

●季節ごとの変化

季節や時期により、参加者数の変動が目立ちました。秋から冬にかけての参加者はなかなか集まらず、初年度は2つの便（ボラパックⅠ第35便と特別便）の同乗とするなどの対策をとりました。温度差や積雪等への懸念が多く感じられ、冬場にはバスを出せる回数が減少してしまったことも原因にあると思われまます。また逆に、夏休みや春休みの時期には学生や学校関係の方の参加が多く、便数の増加へと繋がりました。

●経過による変化

発災から時が過ぎるほどに、現地の状況や活動ニーズの変化があると共にボランティアの意識にも変化が出てきています。発災直後は、参加希望者が殺到し参加可否を抽選で決めなければいけない状態でしたが、バスの本数・定員が減っても定員数に満たないことも増えていきました。

また、ボラパックⅠからⅡへの切り替え時には、新たな試みを開始するにあたり、活動形態がボランティアの皆さんに十分に伝えきれず、参加団体・参加者の伸び悩みとなりました。ボラパックⅡを試行錯誤しながら継続していく中で、活動形態がボランティアの皆さんに徐々に浸透し始めたことにより、安定した参加者数を集めることができるようになりました。更に、時を重ねるごとにみえボラのリピーターも増え、ボランティア同士の連携により集まっていたことは大変ありがたく思ひます。

みえ発！ボラパックⅠ・Ⅱの違い

平成23年4月より運行を始めた「みえ発！ボラパックⅠ」は、平成24年より「みえ発！ボラパックⅡ」と名称を変えて約2年半継続しました。現地の状況に合わせて、活動ニーズはもちろんボランティアの募集形態や運行スケジュールなども移行していきましました。「みえ発！ボラパックⅠ」と「みえ発！ボラパックⅡ」の特徴と違いについて検証します。

みえ発！ボラパックⅠ（全36便） 平成23年4月～平成23年11月

●7～10日間 行程●

主に7～10日間の行程で運行しました。長期の滞在には、参加するための苦労も大きい反面、共に活動するチームの絆を深める期間となりました。

●リーダー・サブ リーダーによる チームづくり●

スタッフ添乗等がなく、各便のメンバーから選ばれたリーダー、サブリーダーによる完全自己組織化でのボラパック運行でした。

●個人ボランティア のみの募集●

個人ボランティアのみを対象とした募集を行っていました。個々に集まったチームが帰る頃には強い団結力を持っていました。

●現地ニーズを 中心とした活動●

現地ボランティアセンターの運営補助から開始し、現地の方々から寄せられるニーズを中心に活動しました。がれき撤去等の力仕事が多くありました。

●18歳以上の み参加可能●

当初は、危険を伴う作業が多いため、ボラパックの参加にあたり18歳以上（高校生不可）の年齢制限を設けました。

●宿泊施設 の統一●

ボランティアセンターに併設された武道場に無料で宿泊することができ、チームで寝食を共にしました。チームミーティング等も円滑に行われました。

みえ発！ボラパックⅡ（全36便） 平成24年4月～平成25年9月

※ボラパックⅡの試行として特別便（平成23年11月）を運行

●4日間行程●

主に週末を挟む4日間の行程で運行しました。参加しやすいメリットと、山田町を知る時間が短いデメリットから、第3便より「まなびの時間」（P18～）を導入しました。

●スタッフ添乗●

過密なスケジュール調整と多様な活動コーディネートのため、スタッフ添乗と現地スタッフによる全面サポートの中、活動いただきました。

●団体ボランティア 中心に募集●

ボラパックⅡでは、サロン活動を中心に活動しました。様々なプログラムが必要となるため、活動団体を中心とした募集方法に移行しました。

●独自プログラムを 中心とした活動●

活動団体から提案されるプログラム、個人ボランティアに対応した独自プログラムを中心にサロン活動、現地ニーズによる活動等を行いました。

●年齢制限 なし●

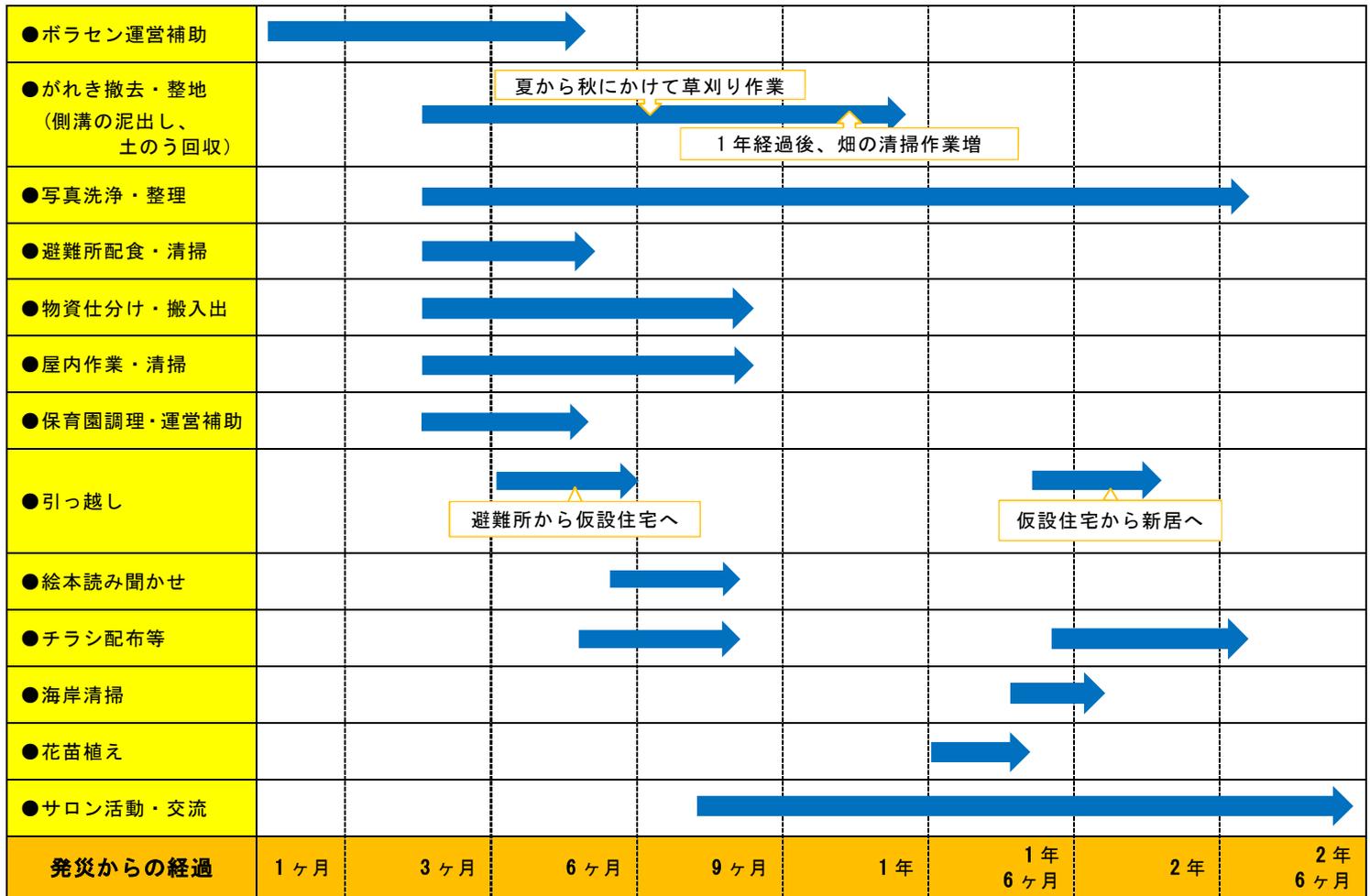
保護者の同行の場合に限り未成年も参加可としました。年齢制限がなくなったことにより、家族での参加が目立つようになりました。

●宿泊施設 の選択●

有料宿泊施設での宿泊が中心となりました。平成24年は無料宿泊所も選択可とし、他のボランティア団体との交流もできました。

みえ発！ボラパック活動傾向

「みえ発！ボラパックⅠ」～「みえ発！ボラパックⅡ」の活動期間中、現地の状況の変化と共に活動ニーズも移り変わっていきましました。みえボラで行なった活動を基に、時間の経過と共に活動傾向を検証いたします。



●ニーズの変化

・ボランティアセンター運営補助

発災当初は住民の方の「ボランティア」の認識が薄く、ボランティアセンターの存在意義やシステムを理解していただく時間が必要でした。みえボラが活動を始めるにあたりノウハウのあるボランティアを集め、殺到するボランティアの対応をするためボランティアセンター運営の人的支援を行ないました。

・ボランティア単体で行う活動

最も長期に亘って活動したがれき撤去・整地作業は、家財清掃から始まり泥出しや草刈りなど、時期や季節ごとに細やかに内容が変わりました。避難所運営時には物資に関する活動やお風呂清掃など、避難所閉鎖までお手伝いしました。また、海岸清掃や畑清掃、花苗植えなどの活動を行なったのは発災から1年以上後となり、写真洗浄は発災直後から現在も継続されています。

・地域の方と交流する活動

発災から半年が過ぎた頃、つながりのできた町の方々からの声が少しずつ届くようになり、みえボラ独自のニーズとして町内の小学校・幼稚園・保育園にて「絵本読み聞かせ」活動を開始しました。その後、特別便として初めて開催したサロン活動がボラパックⅡの形式が成り立つためのきっかけとなりました。季節に合わせたプログラムや、家でも個人個人が楽しめるプログラムなど、参加される方々の声にヒントをいただきながら活動を進めました。

●問題点

・体調管理

ボランティアとして活動する上で留意すべき点として、体調管理があります。みえボラの心構えとして「自分で体調を見極める」というお願いをしていました。特にボラパックⅠでは、慣れない環境や危険が伴う作業が多い中で約1週間連日の活動が続き、体調不良や疲労が原因の怪我や事故などもありました。体はもちろん、心にも負担をかけないようにチーム内で声を掛け合って「休むこともボランティア」という意識を持って活動していただきました。

・天候の影響

屋外作業が続く発災後、天候に左右され作業に遅れが出ることが多々ありました。その影響により作業の引き継ぎにも支障がでることがありました。特に梅雨の季節や台風が多い時期は、屋外作業ができずボランティアセンターで待機となってしまうこともあり、屋外作業のニーズが重なるタイミングでの天候の影響は大きくありました。また、夏の炎天下、秋冬の寒波などによる体調への影響もありました。

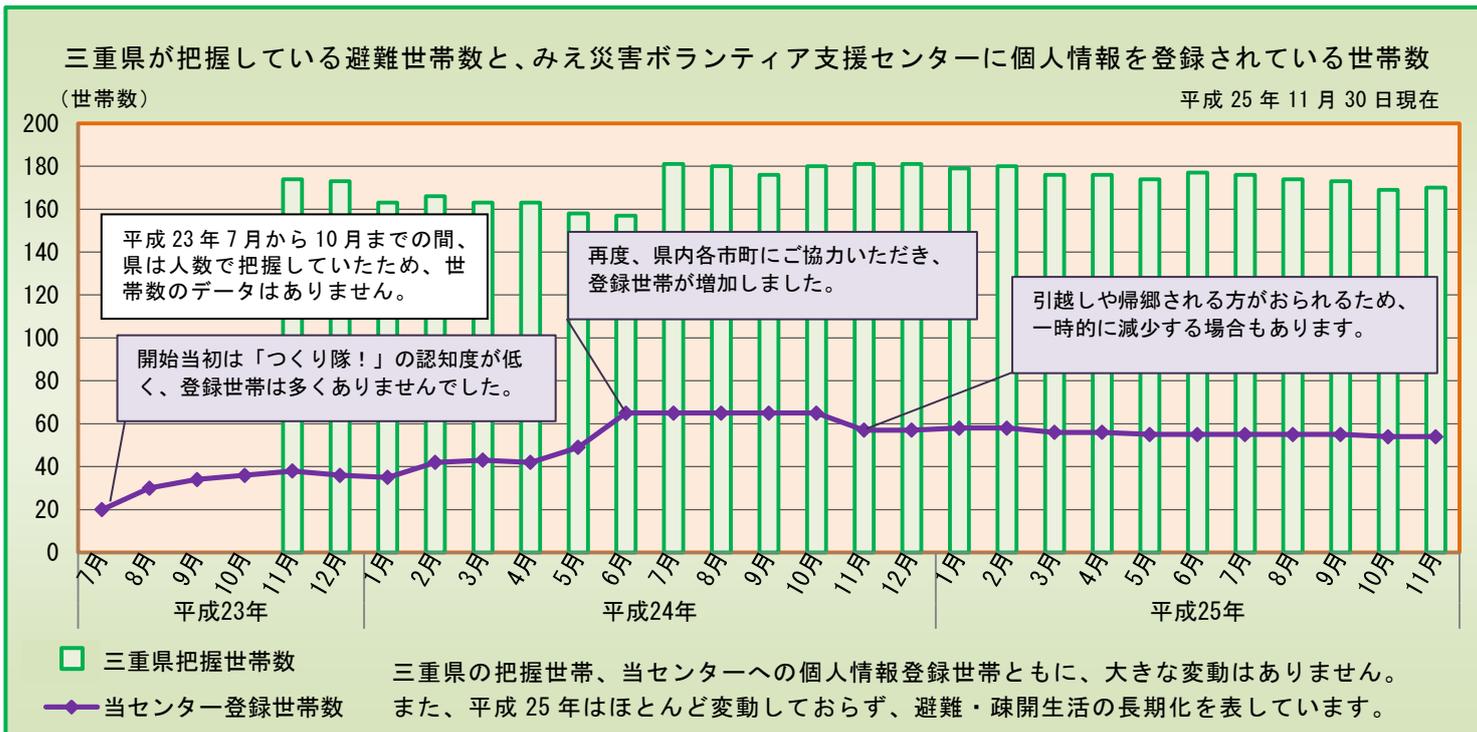
・ニーズとボランティアのバランス

ボランティアの多く集まるタイミングでたくさんのニーズが上がっていないこと、人数がたくさん必要なタイミングでボランティアの数が減少してしまうことも多々ありました。また、活動内容や会場、参加者とボランティアのバランスは、活動を行なう上で重要なポイントでした。

県内避難者支援 みえで仲間をつくり隊！

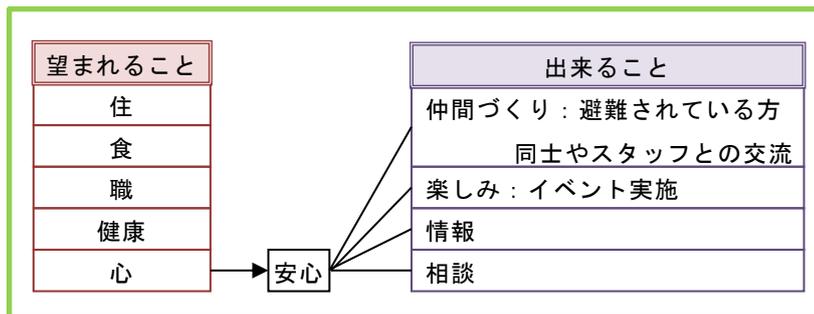
● 東日本大震災支援団体として

平成 23 年 3 月 14 日から現地支援を開始したみえ災害ボランティア支援センターですが、東日本大震災の影響で東北三県・関東地方から全国へ、そして三重県へ避難されている方々のことを知りました。ふるさとから遠く離れた三重県での避難生活や、生活再建への不安の声が絶えません。そんな中、「何か自分達にできる事はないか」という思いを持つボランティア、企業の方々、三重県に避難されている当事者の方々、そして当センタースタッフが一緒になって何度も話し合いを重ねました。そして、平成 23 年 6 月に「みえで仲間をつくり隊！」（以後、つくり隊！）を結成、活動を始めました。



● 望まれることと出来ること

避難されている方々には、人それぞれ、様々な問題があります。ですが、そのほとんどは専門的なことであり、「つくり隊！」では対応は困難です。そこで、「避難されている方々が少しでも不安を解消していただければ」との思いで、交流と情報発信を柱として取り組みました。



● 情報の重要性

避難されている方々にとって三重県は見知らぬ土地です。まずは、三重県のこと、今お住まいの地域のことを知っていただくために、県内各地域の飲食店情報や主要な地図が掲載されている県内情報誌「月刊 Simple」を主としてお届けしました。しかも、より身近に感じていただくためには避難されている方々のお手元に直接お届けすることが重要と考え、県や各市町のご協力のもと、当センターの主旨にご賛同いただいた方からお名前やご住所といった情報をお預かりし、直接発送を行いました。

● 会話・交流の重要性

「もっとたくさんの声を聞かなければ」そう思うまでにさほど時間はかかりませんでした。住み慣れた土地を突然離れなければならない、日頃の交流もままならない方々が気軽に話せる場の必要性を感じ、避難されている方々同士の座談会（後に、しゃべり隊と命名）を開催しました。多くの意見を伺うことができた座談会ですが、避難されている方々の悩みや不安はそれぞれであり、一括りにはできませんでした。そこで、一時でも日常を忘れて楽しんでいただけないか、「しゃべり隊」は次の段階、イベント形式の交流会「楽しみ隊」へと進みました。

● 成果と課題

2年半に亘る活動の成果、課題を検証します。

＜成果＞

- ・見知らぬ土地である三重県を知るための定期的な情報発信は、大きな安心感につながりました。
- ・交流会である「しゃべり隊」「楽しみ隊」を様々な地域で開催し、多くの方に楽しんでいただきました。日常を離れて楽しむ時間が、仲間づくりにつながりました。
- ・活動を続けてきたことで、当センターや「つくり隊！」が少しずつ認知され、同時に信頼度も上がりました。これは活動を継続してきた成果です。続けることの重要性を表しています。

＜課題＞

- ・各地域で活動されている他の支援団体それぞれの活動内容が異なっていたため、連携した活動ができませんでした。
- ・避難されている全世帯に対する支援ができませんでした。避難されてきた方々に直接何かをお届けするためには、お名前やご住所などを伺わなければなりません、個人情報の保護という観点から、私たちがそれを知ることはできませんでした。そのため、前述のように県や各市町のご協力、および「つくり隊！」の主旨にご賛同いただいた方のみへのお届けとなってしまいました。

● これからについて

長期化している避難・疎開生活に必要なのは、何か困ったことがあればいつでも誰かに相談できる、いつでも頼れるところがあること、そして息長く寄り添うことです。県域で支援を実施していた「つくり隊！」は、毎月定期的に情報誌をお手元にお届けするなど、避難されている方々に寄り添えるよう、「忘れられていない」と感じていただけるように取り組んできました。ですが、当センターが閉所することで、このままでは2年半続けてきたことで培った、目には見えないつながりもなくなってしまいます。閉所と同時に終わってしまうのではなく、息長く寄り添うために何ができるのかを考え、次の活動につなげなければなりません。

■しゃべり隊：全5回



平成 23 年 7 月 18 日

第 1 回 津市
23 人



平成 23 年 8 月 7 日

第 2 回 伊勢市
20 人



平成 23 年 8 月 27 日

第 3 回 鈴鹿市
42 人



平成 23 年 10 月 29 日

第 4 回 津市
8 人



平成 23 年 12 月 17 日

第 5 回 津市
15 人

■楽しみ隊：全9回

第 1 回
五桂池ふるさと村
(多気町)
参加：30 人



平成 23 年 11 月 20 日

第 2 回
湯の山温泉 希望荘
(菟野町)
参加：24 人



平成 24 年 2 月 25 日

第 3 回
アスパia 玉城
(玉城町)
参加：45 人



平成 24 年 5 月 20 日

第 5 回
二見シーパラダイス
(伊勢市)
参加：23 人



平成 24 年 10 月 20 日

第 6 回
関宿
(亀山市)
参加：9 人



平成 24 年 11 月 17 日

※第 4 回は延期となり、
第 6 回として開催しました。



平成 25 年 5 月 19 日

第 7 回
五桂池ふるさと村
(多気町)
参加：20 人



平成 25 年 8 月 25 日

第 8 回
うきさとむら
(松阪市)
参加：13 人



平成 25 年 11 月 4 日

第 9 回
油田公園
(多気町)
参加：15 人

坐禅体験
曹洞宗塔世山
四天王寺 (津市)
参加：3 人



平成 25 年 3 月 10 日

広域避難者支援

避難生活が長期化し、避難されている方の状況はますます複雑化してきています。そんな中、みえ災害ボランティア支援センターが平成 25 年 12 月末に閉所することに対し、避難されている当事者の方や他の支援団体の方より、その後の窓口や情報発信等について心配される声がありました。

そこで、平成 25 年 4 月より、三重県内で避難者支援に関わっている他団体（支援ねっと@みえきた、ふくしまいせしまの会、三重県社会福祉協議会、三重県）が集い、今後の県内避難者支援がどうあるべきかを話し合う場を設け、相談を続けてきました。そして、今後の方針を検討するにあたり、一番大切である当事者の方の意見や想いを確認するため、アンケート調査を実施することが決まりました。



● 三重県内に避難された方への支援のあり方考えるためのアンケート調査

アンケートは「三重県内に避難されている方の実態」および「受けたことのある支援と今後必要・不要となる支援」を把握することを目的とし、平成 25 年 8 月中旬～9 月中旬に実施しました。一人でも多くの方の意見を確認するため、当センター登録世帯（54 世帯）以外にも、県および市町や各支援団体が把握している世帯へアンケートを送付し、78 件の回答をいただきました。

回答では、既に移住や帰郷を決めている世帯の方もいましたが、3 分の 1 以上の世帯が今後について決めかねている状態であり、先の見えない不安な生活を続けているということと、各世帯の状況により異なる部分はありますが、今後の支援においては「住居」「食の安全」「健康」「就職」「情報」「相談」がキーワードとなることがわかりました。そして、避難者支援に関する総合窓口が必要とされていることも明らかとなりました。

● 三重県内避難者支援団体ネットワーク組織（311 みえネット）の発足

避難者支援総合窓口の必要性が明確となったことから、今まで行政や民間等の各団体で実施していた活動を、今後は団体同士が地域やセクターを越えて手を繋ぎ、活動や情報を共有できる体制を整えるため、平成 25 年 12 月 7 日に県内避難者支援関係団体のネットワーク組織「311 みえネット」が立ち上がりました。

避難されている方には、「311 みえネット」の立ち上げ報告、情報誌（Mie tell）0 号や支援団体等の情報一覧リーフレット等をアンケート集計結果と共に送付しました。同時に、今後も引き続き情報を必要とされる方へは「311 みえネット」に登録いただくように呼びかけも行いました。

「311 みえネット」は「支援ねっと@みえきた」が事務局を担い、息長く寄り添っていただける活動を実施していきます。



【311 みえネット活動内容】

- ・ 支援団体や協力団体の情報収集および発信
- ・ 支援団体や協力団体間の連携促進
- ・ 避難者交流プログラムの促進
- ・ 情報誌（Mie tell）の発行

【311 みえネット参加団体】（※平成 25 年 12 月 7 日現在）

支援ねっと@みえきた、ふくしまいせしまの会、なな色の空、（特非）みえ防災市民会議、生活協同組合コープみえ、（社福）三重県社会福祉協議会、三重県

【311 みえネットホームページ】 <http://311mienet.jimdo.com>

● 県域を越えた繋がり（ネットワーク）への広がり

各県によって避難者数の差はありますが、他県に避難されている方の状況は、三重県と大きくは異なりません。しかし、避難者支援に関わる団体は様々であるため、実施される支援も様々な状況です。現在、東海地区の避難者支援団体で横の繋がりを作る動きがあり、県を越えて情報交換および協力し合える体制を構築することで、より丁寧で多彩な支援活動への広がりが期待されます。

これまで北勢を拠点として避難者支援をやってきました。発足当初は 3 人でしたが賛同し応援してくれる人が増えネットワークとして連携しながら活動を続けています。

過度な支援は自立を妨げ依存を助長することにもなりますが、知人も身寄りもない三重での生活は孤独で孤立しかねません。大変だったのはこのバランスをとることです。支援の形は一律でなくても、それぞれの支援者ができることを持ち寄り、選択肢を増やす事はできます。

今後は必要な時に一緒に考え寄り添いながら息長く見守っていく三重県内のネットワーク「311 みえネット」を立ち上げ、避難者と支援者をつなぐ県全体の活動を続けていきたいと思えます。ご協力よろしくお願ひします。



311 みえネット 代表

木田 裕子さん

（母子疎開支援ネットワーク「hahako」代表、支援ねっと@みえきた 代表）

みえ災害ボランティア支援センター～設置と運営～

三重県地域防災計画には、風水害や地震の被害から復旧・復興する過程において災害ボランティアの果たす役割に着目し、「みえ災害ボランティア支援センター」（以後、支援センター）を、市民と行政の協働で設置することを明記しています。支援センターは現地の災害ボランティアセンターを後方支援するために設置し、県災害対策本部や県内の関係機関、また県外のボランティアネットワークや関係機関との連携・調整や、県内外への様々な情報の受発信などの支援を行う役割を担います。

支援センター設置基準

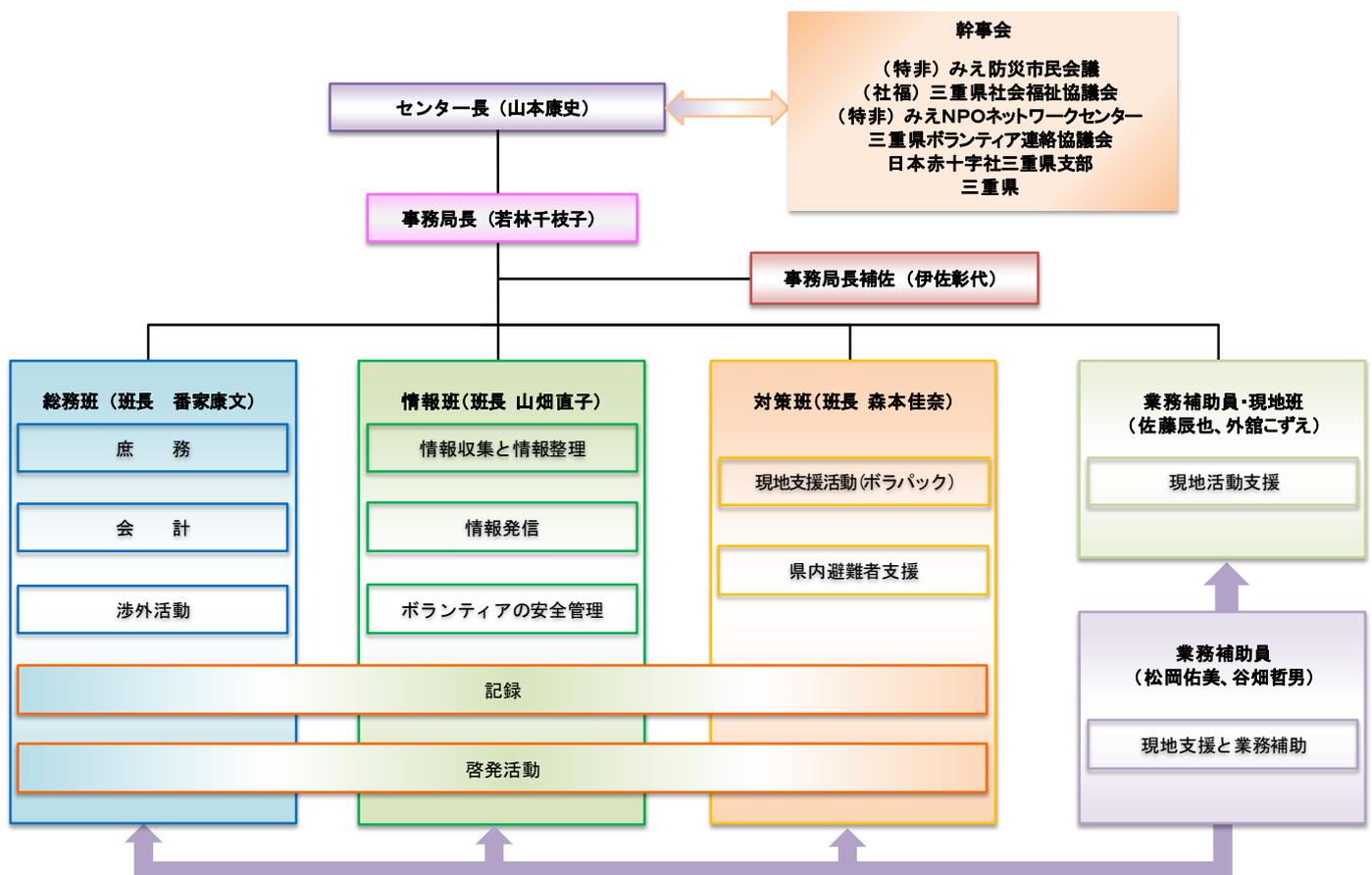
- ① 災害が発生し、県内に現地センターが設置された場合
- ② 県内に震度6弱以上の地震が発生した場合
- ③ 幹事団体が支援センターの設置を必要と認めた後に開催する臨時会（参加団体で構成）で設置決議があった場合

◆支援センターの立ち上げは発災3日後

2011年3月11日14時46分に東日本を襲った大震災を目の当たりにしたその日の夜、「私たちにできることは何か」と、6団体の幹事会メンバーがみえ県民交流センターに集いました。幹事団体は三重県地域防災計画および「災害ボランティア活動の支援に関する協定書」を締結しています。そしてこれは、三重県内や近隣地域での発災を前提としたものでした。しかしながら東北を襲った地震、そして津波による未曾有の大災害にあって、「オール日本として動かなくてはいけない。」「被災された地域の皆さんに寄り添い、ともに乗り越える力になるボランティアの方たちにとっての『受け皿』が必要だ。」として、みえ県民交流センター内に「みえ災害ボランティア支援センター」を設置することを決定しました。発災から3日後、3月14日のことでした。

◆支援センターの事務局体制

「みえ災害ボランティア支援センター設置マニュアル」には、「災害ボランティア活動の支援に関する協定書」に調印した幹事団体の初動体制と事務局体制を定めており、人員を各幹事団体に呼びかけて確保していましたが、本来の仕事・業務と並行しての作業は厳しい状態にありました。今回のように長期に亘る大規模災害の支援活動については、専従スタッフによる事務局体制が必要になり、5月1日より専従スタッフを各班1名ずつ配した新事務局体制をスタートしました。以降、事務局ボランティアの方々の協力を得ながら、刻々と移り変わる状況に即して臨機応変に業務を見直すとともに、スタッフ個人の持てる専門性や知識・能力を活かせる体制としました。また、現地でスタッフを雇用したことも大きな特色です。なお、各班1名の体制ではすべての業務に対応できなかったことから、随時業務補助員を補充配置しました。



活動検証 ～成果と課題～

東日本大震災を受けて組織されたみえ災害ボランティア支援センター（以後、支援センター）は、ボランティアにとっても、スタッフにとっても、幹事団体にとっても初めてとなるボランティア活動を行ってきました。次の災害に備えて、今回達成できた成果と、次回に向けての課題を検証します。

○成果

・専従スタッフを擁する体制の構築

支援センターはこれまでに県内や近隣の災害発生を受けて設置されたことはありましたが、活動が短期間（1ヶ月程度）であったため、各幹事団体のメンバーが負担し合って支援センターを運営していました。しかし今回は、当初の想いとして3年程度を目処に活動を立ち上げました。その際にとっても重要なことは、裏方としてボランティア活動を支えるスタッフの体制です。これについて、幹事団体である県が専従スタッフ7名の人件費を拠出することを決定しました。そして支援センター全体の運営責任をもつセンター長には（特非）みえ防災市民会議議長が、同じくみえ防災市民会議から事務局長補佐に、事務局長には元県 NPO 室長に常勤ボランティアとしての入局承認を取り付けて、現体制を構築することができました。また専従スタッフに関して忘れてはならないのが現地スタッフの存在です。これだけの体制が構築できた事で、ほぼ3年間に亘る長期的な活動を行うことができました。



・約1300人というボランティア

東日本大震災で被災した方、地域の方々のボランティアへのニーズは、信頼できるボランティアが継続して活動してくれることでした。一方、ボランティアを志す人の不安は、安全に、また被災した方に本当に喜んでもらえるにはどんな活動をすればよいか分からないことでした。その二つのニーズを支援センターが「みえ発！ボラパックⅠ・Ⅱ」という事業で橋渡しをすることで、三重県から多くのボランティアが被災地に駆けつけることができました。

・ボランティア自身によるチーム作り

支援センターがボラパックⅠで継続的に山田町にボランティアを送り出しできた大きな要因の一つは、ボランティアのみなさん自身に、各便のチームづくりを任せたことでした。（自己組織化と呼び、その実態は座談会②でも取り上げています）



毎週ボランティアを出し続ける事業で、毎便支援センターのスタッフを同行させることは大変な負担となります。その負担を、参加していただいたボランティアのみなさんを信頼してチームづくりを任せることで、支援センターのスタッフは現地との調整やバスの手配、支援センター自体の運営という裏方作業に専念することができました。

・支援地域との信頼関係

災害時のボランティア活動で大切なことのひとつに、被災した地域で外部からのボランティアの受け皿となる方々、組織との信頼関係づくりがあります。災害による混乱の中、初めて出会う外部のボランティアを被災した方々が信頼するにはいくつか重要な点があります。（これについても座談会③に詳しくあります）

その中でも今回の活動では、

- 1) 現地雇用のスタッフを配置できたこと
- 2) 活動地域を1ヶ所に限定して継続支援を続けたこと
- 3) 活動について、被災地内のパートナー組織に対して一歩下がった姿勢で何でも相談し続けたこと

これらが、信頼関係構築に寄与したと考えています。



・外部団体との連携

今回の支援センターに多くのボランティアが参加いただけた一つの要因は、三重大学や連合みえなど、ボランティア活動を積極的に推進しようとする組織と連携してボランティア募集に取り組むことができた事が挙げられます。三重大学は学生が授業期間中もボランティアに参加する事を容認する仕組みを作っていました。連合みえでは企業におけるボランティア休暇の一括取得への働きかけと、ボランティア参加者への活動備品手配の支援も行って、ボランティアへの参加を呼び掛けていただきました。

・東紀州地域での水害対応

平成 23 年は、東日本大震災の他に、三重県内の東紀州地域でも大きな水害が発生しましたが、東日本大震災支援のための事務局ができていたため、比較的スムーズに東紀州地域への支援にも取り組むことができました。ただし、東日本への支援を継続しながらの地元支援は、事務局やボランティアのみなさんにとって大きな負担にもなりました。



●課題

・初動体制の混乱



支援センターを立ち上げる母体となる幹事団体では、これまで 10 年近く幹事会を定期開催して災害時に備えた意見交換を続け、マニュアル等も作っていましたが、今回の東日本大震災の支援センター設置では、初動時にたくさんの課題がある事が判明しました。

(座談会①で詳しく取り上げています)

- 1) 初動時のスタッフの確保—専従スタッフを雇用するまでの立ち上がり時のスタッフ不足。特に被災地と最初に関係を作る大切な役割の先遣隊や、集まってくるボランティアを受け入れるボランティアコーディネーターが不足していました。
- 2) 初動時の資金不足—各幹事団体の中から災害時予算を出し合うしかなく、不安定な中での活動開始となりました。
- 3) 臨時組織の弊害—電話、インターネット、銀行口座の開設等、支援センターとしてすぐ実施すべき事柄が、臨時の任意組織の為スムーズに行えず、本格立ち上げに 1 ヶ月近くかかりました。また、業務に使用する携帯電話の回線契約がセンター長個人での契約になるなど、一部個人への負担が非常に大きい形になりました。
- 4) 役割分担—平常時から幹事団体会議を行ってききましたが、支援センター設置後の役割や負担の分担がハッキリしておらず、一部の活動できる団体に負担が集中する状況が生まれていました。

これらの課題は災害毎に支援センターを開設するという臨時組織型では改善できないものが多く、将来の災害発生に備えて常設型に移行していくことを視野に入れる必要があります。

・支援センター実施事業の偏り

支援センターのそもそもの設置目的は「被災した地域、方々を支援すること」と「災害ボランティア活動を行う県民の活動を支援すること」です。今回の支援センターでは、自主事業「みえ発!ボラパック」「みえで仲間をつくり隊!」を大きな柱として活動し、多くのボランティアが参加しやすい仕組みを構築することができましたが、他方、例えば山田町以外を支援したい三重県民や、特徴を持った活動を東北各地で、また三重県内で展開したいと考えていた三重県内の NPO/ボランティア団体への支援は、つながろう三重(支援団体連絡会)の呼びかけや継続支援団体交通費助成事業などで一部実施しましたが、ほとんど行えませんでした。



他県の県域センターでは、東北各地でのボランティア募集情報の集約/紹介や、活動希望団体と活動希望場所との接点づくりの支援、活動助成金制度の運用、県内で活動する団体情報の収集/PR 支援など、東日本大震災で被災した地域や人を支援する団体や個人に対する様々な支援活動が行われている例があります。三重の支援センターが今後、災害発生時にどのような役割を担いどのような事業を行う必要があるのか、今回の経験や東北での取り組みを参考に考えていく必要があります。

・閉所時期を決める議論の不足

支援センターの解散時期を決める話し合いが十分にできないまま、当初計画の「3年」で支援センターを閉所することになったのは大きな反省点です。発災当初の想定である「3年」という数字がひとり歩きし、3年後の閉所ありきで話が決まってしまうました。事業規模を考えるために計画当初に目安として活動期間は考えておくべきですが、その年数はあくまで目安であり、例えば1年毎に活動計画を見直しておくことや、終了時期を年数のみでなく「達成すべき目標の姿」として明示しておくことが大切です。

(なお今回の当初計画「3年」という数字は、仮設住宅の設置期間が災害救助法で「2年」であることから、閉所が近づく3年頃には「被災者の多くが定住できる復興住宅への引っ越しを始め、復興の歩みが始まっている」姿を想定して設定しました。しかしながら現実には、被害の大きさから岩手県山田町では復興住宅が1軒も完成していない時期での閉所となってしまいました。)

・支援センター閉所に向けた取り組みの不足

支援センターを閉所するにあたり、関係いただいた多くの方から「閉所後、三重と山田の関係をどうするのか」「まだまだ一時避難生活を続ける広域避難者への取り組みをどうするのか」「今回の活動に参加して多くの経験を積んだボランティアの方々をどう三重の防災力向上につなげていくのか」「今後の災害に向けて、支援センターのあり方をどうブラッシュアップしていくのか」という4つの課題を投げられています。それらについて継続議論を担うべき幹事団体の中で、課題の共有化や検討できる体制がまだまだ十分には整っていません。これらの課題について、現在の幹事団体の枠組に囚われず、強く課題意識を共有できる団体や、県内で今もそれぞれの課題について活動している団体にも広げて、継続した取り組みができるよう呼び掛け、取り組んでいく必要があります。



特に支援センターのこれからのあり方について、立ち上げについて振り返る座談会では、今回初動を経験したメンバーが常設の必要性をそれぞれの視点で述べており、しっかりした検討の場が必要だと考えられています。そのためには、常設する支援センターのスタッフが平時にどのような取り組みを行うのか、そこにかかる経費は誰がどのような形で担うのか、平常時の組織のあり方など、今までの経緯を踏まえつつも大きく形を変えていかなければなりません。その為の議論がまだ十分になされておらず、今回の支援センター活動で得られた知見が、ごく一部のスタッフにしか蓄積されない危険があります。



◎来たるべき次の災害に備えて

今回の支援センターの取り組みは、三重県で過去最大規模の官民協働による災害ボランティア支援活動であり、数多くの成果を参加したボランティア、そしてスタッフの中に残しました。

この成果を個人の中に留めず三重県の教訓として蓄積し、

- 1) 頻発する風水害対応
- 2) 来たるべき南海トラフ沿いを震源とする超巨大地震・津波
- 3) 首都直下を始めとした県外巨大災害への対応

という大きく3つの場合について、これから息の長い事業として対応できる仕組みづくりを進めていく必要性を強く感じています。



支援センターによせる言葉

みえ災害ボランティア支援センターの山本センター長から、12月に支援センターを閉じることになったので、外部の有識者として文章を書いてほしいとの依頼を受けました。私は皆さんの活動を評価出来る様な立場にはないのですが、僭越ながら感じたことと今後の期待を書かせていただく事にしました。

東日本大震災は、防災の専門家である我々にとってもとんでもない出来事でした。私自身、震災直後は思考停止あるいは完全な無力感につつまれ、呆然としてしまったことを覚えています。死者・行方不明者がおよそ2万人、罹災者数100万人以上、東日本沿岸部600km以上に渡る広域の被災エリアは、まさに近代国家になって初めて経験する未曾有の震災であり、国も地方自治体も住民も何をして良いかわからず、非常にどたばたした印象が今でも強く残っています。

そんな中、民間のボランティア団体の皆さんは、比較的早期に現場に入り必要な支援を見極めながら、公的な支援からこぼれ落ちる「きめの細かい」支援をして下さいました。これは、本当に困って途方に暮れたときにさしのべられる手がどれだけ温かく、救われるかという事を数々の災害を通じて学び、その気持ちを共有する仲間を地道に増やしながらかつ活動の輪を広げてきた皆さんの大きな成果だと思っています。

また、今回の震災では長期にわたる支援、しかも日々変化する被災地のニーズにきめ細かく対応し、支援の手をさしのべ続けられたことに敬意を表さなければならぬと思います。ともするとこういった活動は一過性になりがちで、ほとぼりが冷めてしまうと一気に支援がしぼんでしまうことが多いのですが、2年以上に渡る長期間安定的に活動を維持してこられたことは、被災地にも大きな勇気と希望を与えたことでしょう。

いま、我々の目の前には、避けられない地震・津波災害の危機が横たわっています。皆さんが今回の支援活動で得た経験を是非次に繋げてほしいと思います。きっと、東日本の皆さんもそう思っていることでしょう。みんなが笑顔であり続けるために、センターとしての活動が終了しても、今後も皆さんの活動を期待しています。



三重大学大学院工学研究科／地域圏防災・減災研究センター
川口 淳

みえ災害ボランティア支援センターがこの12月で閉じられるということで、これまでの3年近くのご支援、本当にお疲れさまでした。

多くの地域で大震災の支援が行われましたが、みえの官民一体となった迅速な立上げと継続的なご支援はさすがと感じました。東日本大震災だけではなく、震災後各地で発生した水害にも対応されたことには驚きました。こういったことができたのは、大震災前に民間と行政がしっかりとご議論と実績を重ねてきたからだと思います。平時からの関係づくりは、やっつけながらやっている中で本当に効果があるのか見えづらいのですが、これまでのご活躍を見れば一目瞭然です。センターは解散されますが、民間と行政との情報交換は継続されることを願っています。

そして、「みえ」といえば、業界的に有名なのが「ボラパック」。平成16年にノウハウがまとめられ、これまでも様々な地域で実績を積まれたことが、センターの継続的な山田町のご支援につながったと感じています。このノウハウは、他の地域でも学ぶものがたくさんあるのではないのでしょうか。あわせて、想定されている大規模災害時に備えて、被災地外から応援するしくみを検証されることなども期待しています。

ひとつ残念なことといえば、センターが解散してしまうことです。解散されるのは様々な事情、理由があったとお察しします。他の地域を見ていると、活動資金の確保が困難というお話もお聞きしています。みえの場合、県が負担された予算が続かないところがあったと思いますが、東日本大震災の支援では様々な民間の基金、国の制度が活用されています。こういった基金や制度を柔軟に活用して、もっと継続した活動につなげるという選択肢もあったのではないかと思います。

東北の被災地にかぎらず、三重県に避難されている方々へのご支援はまだこれからも必要です。民間と行政が協働実績を活かして、孤立対策や避難者に寄り添ったご支援を検討いただくことを期待しております。



株式会社ダイナックス都市環境研究所
研究員 津賀 高幸

支援から交流、そして継承へ

みえ災害ボランティア支援センター長 挨拶

2011年3月11日。あの日から私達の社会や生活は一変し、はや3年が経とうとしています。

被災された方々に少しでも元気を届けようと運営してきたみえ災害ボランティア支援センターも、一つの区切りを迎える事となりました。

まずは、無事閉所を迎えるまで支えて頂いたみなさんに心から感謝を述べたいと思います。

支援センターの取り組みは、お一人おひとりの善意が付託された支援金と、多くの方の血税である三重県の県費によって実現しました。三重県費とはつまり、全ての三重県民のみなさんに支えられた活動であったということです。予算を編成して頂いた三重県、その予算を承認頂いた三重県議会のみなさま、そして三重県民のみなさまの応援を受けてこの活動が取り組めたことを心から誇りに思っています。

そして、支援センターの事業にみえボラ（山田町に行くボランティア）として、また事務局ボラ（事務作業を手伝うボランティア）として参加していただいた多くの方のおかげでこの取り組みを行うことができました。支援センターは、ボランティアのみなさんの想いを現地に届けるお手伝いできていたのでしょうか。みなさんと共に汗を流したスタッフの力で、きっと届けることができたと信じています。

更に忘れてはならないのが、私たちが伺わせて頂いた山田町のみなさんの優しさです。オレンジのビブスを着て山田町を歩くと、あちらこちらで「ありがとう」「お疲れさま」と声を掛けられました。ボランティア活動は、支援する側と受け入れる側、その両方があるのはじめて成り立ち、その関係は一方的なものではなく「お互い様」の関係なのだ改めて気づかされました。この「お互い様」の気持ちは、三重県内に避難されているみなさんとの交流の中でも感じました。

復興は、被災された方々一人ひとりの力によって成し遂げられます。私達ボランティアはその過程を応援し、寄り添い、共に笑い、時には泣き、被災された方々のご自身の足で前に進むのを見守って行くことしかできません。そんな微力な取り組みでしたが、山田町のみなさんに、そして三重に避難している方々に、少しでも勇気をもたらすことができていると、と心より願っています。

未曾有の災害であった東日本大震災から復興するまで、まだまだ時間がかかるのは間違いありません。そんな状況であるにも関わらず支援センターを閉所する事について、あたかも野球の試合で3回裏なのに帰ってしまう応援団の様なもので、とても心苦しく、申し訳ない気持ちです。

「東日本大震災支援」を看板に掲げた支援センターはこれで閉所となりますが、支援センターの幹事団体はそれぞれに今後も事業の一部を引き継いで取り組み続けていきます。そして支援センターに関わってくれた全ての方々は、きっとそれぞれの方法で東北の方々や三重に避難されてきたみなさんに関わり続けてくれると信じています。それは「お互い様」の「支援」から更に一歩前に踏み出した「交流」となり、更にこれからは教訓の「継承」へと繋がっていくのだと思います。

東日本大震災で亡くなった全ての方の命の声と、今も復興に汗流す東北のみなさんの経験した重い教訓を一つずつ丁寧に学び、三重の私達の防災に「継承」していくこと。三重の私たちにできる「忘れない」取り組みが今から始まるのです。

平成 25 年 12 月
みえ災害ボランティア支援センター長
山本康史





活動報告書

編集・発行：みえ災害ボランティア支援センター

発行日：平成 25 年 12 月 11 日

発災直後写真提供：佐藤辰也

写真提供：先遣隊、ボランティアの皆さん、黒澤克行さん

※本書掲載写真・記事の無断転載を禁じます。

当センターは平成 25 年 12 月 28 日をもって閉所します。
この刊行物に対するお問い合わせは、下記までお願いします。

三重県環境生活部男女共同参画・NPO 課 NPO 班
〒514-0009

三重県津市羽所町 700 番地アスト津 3 階

TEL：059-222-5984

E-MAIL：seiknpo@pref.mie.jp

みえ発！ボラパックⅡ 集合写真

第30便 (H25. 6/28-7/1)



第25便 (H25. 2/22-2/25)



第19便 (H24. 10/26-10/29)



第31便 (H25. 7/12-7/15)



第26便 (H25. 3/15-3/18)



第20便 (H24. 11/9-11/12)



第32便 (H25. 7/19-7/22)



第27便 (H25. 3/28-3/31)



第21便 (H24. 11/23-11/26)



第33便 (H25. 8/9-8/12)



第28便 (H25. 4/26-4/29)



第22便 (H24. 12/21-12/24)



第34便 (H25. 8/28-8/31)



第29便 (H25. 5/10-5/13)



第23便 (H25. 2/7-2/10)



第35便 (H25. 9/14-9/17)



第24便 (H25. 2/8-2/11)



みえ発！ボラパックⅡ 集合写真

第13便 (H24. 8/24-8/27)



第7便 (H24. 7/6-7/9)



第1便 (H24. 4/13-4/16)



第14便 (H24. 9/7-9/10)



第8便 (H24. 7/13-7/16)



第2便 (H24. 4/27-4/30)



第15便 (H24. 9/17-9/20)



第9便 (H24. 7/27-7/30)



第3便 (H24. 5/11-5/14)



第16便 (H24. 9/21-9/24)



第10便 (H24. 8/2-8/5)



第4便 (H24. 5/25-5/28)



第17便 (H24. 9/26-9/29)



第11便 (H24. 8/5-8/8)



第5便 (H24. 6/8-6/11)



第18便 (H24. 10/12-10/15)



第12便 (H24. 8/17-8/20)



第6便 (H24. 6/22-6/25)



みえ発！ボラパックⅠ 集合写真

第31便 (H23. 10/8-10/15)



第25便 (H23. 9/2-9/8)



第19便 (H23. 8/1-8/7)



第32便 (H23. 10/15-10/22)



第26便 (H23. 9/6-9/12)



第20便 (H23. 8/5-8/11)



第33便 (H23. 10/22-10/29)



第27便 (H23. 9/10-9/17)



第21便 (H23. 8/17-8/23)



第34便 (H23. 10/29-11/5)



第28便 (H23. 9/17-9/24)



第22便 (H23. 8/21-8/27)



第35便 (H23. 11/5-11/12) 特別便 (-11/8)



第29便 (H23. 9/24-10/1)



第23便 (H23. 8/25-8/31)



第36便 (H23. 11/12-11/19)



第30便 (H23. 10/1-10/8)



第24便 (H23. 8/29-9/4)



みえ発！ボラパックⅠ 集合写真

第13便 (H23. 7/8-7/14)



第14便 (H23. 7/12-7/18)



第15便 (H23. 7/16-7/21)



第16便 (H23. 7/21-7/26)



第17便 (H23. 7/24-7/30)



第18便 (H23. 7/28-8/3)



第7便 (H23. 6/4-6/11)



第8便 (H23. 6/11-6/18)



第9便 (H23. 6/18-6/25)



第10便 (H23. 6/25-7/2)



第11便 (H23. 6/30-7/6)



第12便 (H23. 7/4-7/10)



第1便 (H23. 4/28-5/4)



第2便 (H23. 5/2-5/8)



第3便 (H23. 5/6-5/15)



第4便 (H23. 5/13-5/22)



第5便 (H23. 5/20-5/29)



第6便 (H23. 5/27-6/4)



2013年（平成25年）

12月	11月	10月	9月	8月
4日 ・「和食」がユネスコの世界遺産（無形文化遺産）に登録	20日 ・東北楽天ゴールデンイーグルス初の日本一 ・小笠原諸島・西之島南東沖で海底火山噴火による新島出現	16日 ・台風26号接近により伊豆大島で土石流による被害が発生	7日 ・2020年夏季オリンピック開催都市が東京に決定 15日 ・台風18号により浸水や突風の被害が発生	30日 ・気象庁が「特別警報」の運用開始 12日 ・高知県四万十市で日本国内観測史上最高気温となる41度を観測 9日 ・北海道や北東北で豪雨災害発生
8日 ・やまだの鮭まつり		12日 ・山田地区復興整備事業安全祈願祭（旧わかき保育園）新園舎落成式 10日 ・山田漁連の新魚市場 落成式および利用開始 7日 ・日台さすな保育園 2日 ・山田地区復興整備事業安全祈願祭	28日 ・船越湾漁協の新魚市場 落成式 16日 ・山田祭 大杉神社例大祭 15日 ・山田町ゆるキャラ（ヤマダちゃん、たけちゃん）山田町公認キャラ認定 14日 ・山田祭 山田八幡宮例大祭 1日 ・座談会①「立ち上げ」実施 座談会②「自己組織化」実施	4日 ・大沢 魚賀波間神社 例大祭開催 豊間根地区災害公営住宅の新築工事安全祈願祭 7日 ・「サマーチャレンジやまだ2013」開始（～11日） 8日 ・ファイダー「写真展私たちの山田」の頃を忘れない」開催（～9月23日） やまだの花火大会 11日 ・山田町社協が矢巾町災害VC後方支援 16日 ・山田町社協が矢巾町に山田高校生のボランティアバスを運行
28日 ・みえ災害ボランティア支援センター閉所（予定）	7日 ・「311を忘れないために」これから三重で取り組むこと」災害シンポジウムおよびボランティア交流会開催 ※三重県内避難者支援団体ネットワーク組織「311みえネット」発足 活動報告書（2013.1.1～2013.12.28）資料・メッセージ集）発行	311を忘れないために ～これから三重で取り組むこと～ 活動報告書 それぞれが東日本大震災支援 （資料・メッセージ）	30日 ・平成25年台風18号災害支援情報発信ページ開始 18日 ・平成25年台風18号災害支援金受付終了 17日 ・「VPⅡ第35便」台風18号接近に伴い、現地出発時間を繰り上げる 16日 ・「VPⅡ第35便」ボラパックⅡ最終便帰着式 1日 ・座談会①「立ち上げ」実施 座談会②「自己組織化」実施	6日 ・座談会③「被災地とボランティアの信頼関係」実施 12日 ・避難者対象アンケート実施（～9月19日）



10月28日 大沢地区



9月15日 山田祭



[VPⅡ第33便] サマーチャレンジやまだ



[VPⅡ第35便] 帰着式



[つくり隊!] 第9回楽しみ隊



[VPⅡ第33便] やまだの花火大会

2013年（平成25年）										年		
7月		6月		5月		4月		3月		月		
28日	21日	20日	22日	10日	5日	19日	1日	24日		日		
<ul style="list-style-type: none"> 山口・島根豪雨災害発生 第23回参議院議員通常選挙 映画「風立ちぬ」公開 		<ul style="list-style-type: none"> 富士山がユネスコの世界遺産（文化遺産）に登録 		<ul style="list-style-type: none"> 長嶋茂雄氏・松井秀喜氏が国民栄誉賞受賞 出雲大社にて祭神が仮殿から本殿に遷座される「本殿遷座祭」挙行（60年ぶりの遷座） 		<ul style="list-style-type: none"> 公職選挙法の改正によるインターネット選挙運動解禁 		<ul style="list-style-type: none"> NHK連続テレビ小説「あまちゃん」放送開始 		<ul style="list-style-type: none"> 紀勢自動車道 紀勢大内山IC～紀伊長島IC間開通 		日本全体の動き
		17日		29日		21日		24日		23日	21日	日
		<ul style="list-style-type: none"> 三陸沿岸道路山田～宮古南起工式 		<ul style="list-style-type: none"> 織笠地区 復興整備事業安全祈願祭 		<ul style="list-style-type: none"> 山田町フォトコンテスト作品展示会（～21日） 田の浜コミュニティセンター開所 山田町さくらまつり（～29日） やまだ観光物産「とっと」ブランドオープン 		<ul style="list-style-type: none"> 盛岡市かわいキャンブ閉所（宮古市） 		<ul style="list-style-type: none"> 大沢保育園新園舎落成式 「鯨と海の科学館」一部開館（～5月31日） 全国高校選抜大会 男子シングルスカルで県立山田高校の山根慶大くんが優勝 		山田町の動き
		14日		21日		16日				17日		日
<ul style="list-style-type: none"> 防災キャラバン市町等連携事業（～11月15日・全13回実施） 		<ul style="list-style-type: none"> 山田町のゆるキャラ決定 ほんぽんマスコット作り活動 		<ul style="list-style-type: none"> 山田町のゆるキャラ一般投票開始（～6月15日） 山田町のゆるキャラフェイスブックページ開設 三重県避難者支援団体相談会開始 山田町のゆるキャラ制作実行委員会ツイッター開始 		<ul style="list-style-type: none"> 「つくり隊！」「こぼみえくらしたすけあいの会協働事業」開始（～9月30日） 山田町のゆるキャラ応援サポーター募集開始（～8月31日） 山田町のゆるキャラフェイスブックページ開設 三重県避難者支援団体相談会開始 山田町のゆるキャラ制作実行委員会ツイッター開始 		<ul style="list-style-type: none"> 貸出し用写真パネル追加・パネルセット内容更新 福島県の地元新聞2社閲覧開始 山田町のゆるキャラデザイン公募開始 		<ul style="list-style-type: none"> 写真パネル展「東日本大震災とボランティア」開催（～3月18日） 「三重から見つめた東日本大震災」開催 		みえ災害ボランティア支援センターの動き



2013年（平成25年）			2012年（平成24年）		
3月	2月	1月	12月	11月	
7日 ・新石垣空港（石垣島東部）開港	21日 ・元横綱大鵬国民栄誉賞受賞	6日 ・NHK大河ドラマ「八重の桜」放送開始 1日 ・東京電力が福島復興本社を設立 復興特別所得税導入	26日 ・安倍内閣が発足 16日 ・第46回衆議院議員選挙 12日 ・今年の漢字「金」 2日 ・中央自動車道笹子トンネル天井板崩落事故発生	25日 ・釜石自動車道 東和IC～宮守IC間開通	
15日 ・田の浜簡易郵便局再開 11日 ・山田町犠牲者二周年追悼式 1日 ・コメリハード&グリーン山田店（ホームセンター）オープン	9日 ・山田町ニュースポーツチャレンジ大会（ファミリィバドミントン）	21日 ・NPO問題による第三者調査委員会立ち上げ 18日 ・山田町が「大雪りばあねっと。」との平成24年度委託事業契約解除 11日 ・新生やまだ商店街協同組合「震災語り部事業」スタート	17日 ・岩手県北バス「山田町内1日フリー乗車券（1日300円）」運用開始 11日 ・「大雪りばあねっと。」が受託事業を休止（御蔵の湯、防犯パトロール等） 10日 ・町議会全員協議会が「大雪りばあねっと。」への補正予算案を却下 9日 ・山田の鮭 大漁祈願まつり	10日 ・山田町民芸術祭（～11日）	
15日 ・継続団体交通費助成事業 助成団体募集開始 11日 ・活動報告書（2012.2.1～2012.12.31）発行 10日 ・「つくり隊！」坐禅体験イベント開催	23日 ・ガンブラ交流活動		21日 ・「VPⅡ第22便」みえ災害ボランティア支援センター幹事団体便運行 2日 ・ボランティア交流会2012開催	23日 ・ボラパックロ冬季便団体ボランティア募集開始	



[VPⅡ] ガンブラ交流活動



かき小屋



[VPⅡ幹事団体便] まなびの時間



「つくり隊！」坐禅体験



ボランティア交流会



[VPⅡ] 新聞コサージュ作り活動

2012年（平成24年）

10月				9月				8月			年月日	内容		
27日	23日	8日	1日	29日	19日			28日	14日	13日	年月日	日本全体の動き		
・関西国際空港に国内初のLCC専用ターミナル完成 ・レスリングの吉田沙保里選手が国民栄誉賞受賞				・レスリングの吉田沙保里選手が世界大会13連覇を達成 ・原子力規制委員会発足				・ニホンカワウソを絶滅種に指定 ・金星の前を月が横切つて隠す金星食を観測						
27日		1日		25日	17日	16日	15日	10日	5日	28日	26日	年月日	山田町の動き	
・野田総理大臣が山田町来町工場（造船場）落成式				・船越小学校災害復旧敷地造成工事安全祈願祭 ・山田祭 大杉神社例大祭				・船越小学校 新設移転土地造成工事着手 ・「なかよし公園商店街」テント解体 ・山田祭 山田八幡宮・大杉神社合同宵宮祭 ・山田祭 山田八幡宮例大祭 2年ぶりに八幡宮の神輿が復活			・「新生やまだ商店街協同組合」設立総会 ・山田町応援音楽会			
27日				22日						25日	18日	16日	年月日	みえ災害ボランティア支援センターの動き
・新聞コーサージュ作り活動 ・お雛さま手芸活動				・スポーツ団体ボランティア活動				・津うキャラ（津のご当地キャラ団体）交流活動 ・音楽団体ボランティア活動			・伊賀市社会福祉協議会と共催で「みえ伊賀発！ボランティア宇治」の運行決定 ・みえ伊賀発！ボランティア宇治運行開始（8月19日） ・津うキャラ（津のご当地キャラ団体）交流活動			



9月16日 山田祭 八幡宮神輿



[VP II] お雛さま手芸活動



[VP II] 津うキャラ交流活動



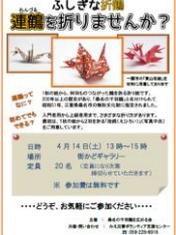
[つくり隊！] 第5回楽しみ隊



[VP II] スポーツ団体活動



[VP II] 音楽団体活動

2012年（平成24年）												年				
4月				3月				2月				月				
27日	22日	19日	14日	31日	30日	16日	14日	11日	23日	10日	日					
<ul style="list-style-type: none"> ・「ちきゅう」世界最深掘削、日本海溝の海面下7740メートル ・改正郵政法が成立 				<ul style="list-style-type: none"> ・アナログ放送完全終了 ・福島復興再生特別措置法成立 				<ul style="list-style-type: none"> ・寝台特急「日本海」運行終了 ・京都市水族館オープン ・東日本大震災一周年追悼式（国立劇場） 				<ul style="list-style-type: none"> ・復興庁発足 ・福島県、福島市の2次避難所閉鎖により東日本大震災の被災3県の全避難所が閉鎖 				日本全体の動き
<ul style="list-style-type: none"> ・山田町名物「山田せんべい」復活 				<ul style="list-style-type: none"> ・山田町内水産会社5社合同新会社「五篤丸水産」開始 				<ul style="list-style-type: none"> ・復興計画の高台移転事業着手式 ・山田町犠牲者一周年追悼式 ・「鎮魂と希望の鐘」除幕式 ・復興山田がんばっぺし祭り（18日） ・船越家族旅行村オートキャンプ場再開 				<ul style="list-style-type: none"> ・生活再建等に関する住民相談窓口設置 				山田町の動き
 <p>4月28日 山田町さくらまつり</p>				<ul style="list-style-type: none"> ・個人ボランティア用プログラム（ハンドマッサージ）指導者講習会実施 ・ポラパックH団体ボランティア事前ガイダンス開始（平成25年9月7日） ・業務補助職員（三重）1名雇用 				<ul style="list-style-type: none"> ・「ポラパックH説明会」開催 ・「東日本大震災支援フォーラム三重」開催 ・「みえ東日本大震災支援団体連絡会（つながろう三重）キックオフ会議」開催 ・活動報告書（2011.3.11～2012.1.31）発行 ・ポラパックH個人ボランティア募集開始 ・「ではってマップ」Web版公開 ・業務補助職員（三重）1名退職 				<ul style="list-style-type: none"> ・「ポラパックH登録団体・グループ」募集開始（7月2日） ・「ボランティアミーティング」開催 				みえ災害ボランティア支援センターの動き
 				 												



[VP II] サロン・交流活動



[VP II] ハンドマッサージ指導者講習会



東日本大震災支援フォーラム三重

2011年（平成23年）										年					
9月					8月					月					
30日	23日	9日	4日		30日	26日	18日	17日		日					
<ul style="list-style-type: none"> ・福島第一原発緊急時避難準備区域を一括解除 ・東北新幹線が震災前の通常ダイヤに戻る ・電力使用制限令が解除 					<ul style="list-style-type: none"> ・菅直人内閣総理大臣辞任 ・福島第一原発、3キロ圏内住民が初の一時帰宅 ・第95代内閣総理大臣に野田佳彦氏を指名 					<ul style="list-style-type: none"> ・北海道電力泊原発3号機が運転再開 ・なでしこジャパン団体初の国民栄誉賞受賞 					日本全体の動き
18日	17日	11日	4日		31日	23日	11日	7日		日					
<ul style="list-style-type: none"> ・山田祭 山田八幡宮・大杉神社 復興祈願例大祭 ・山田祭 山田八幡宮・大杉神社 復興祈願例大祭 					<ul style="list-style-type: none"> ・学生らの学習場「ゾンタハウス」および町民の交流場「街かどギャラリー」オープン ・仮設住宅情報発信所が仮設住宅新聞「希望」第1号発行（～平成24年12月11日・全16号） ・広報やまだ再開 					<ul style="list-style-type: none"> ・「鯨と海の科学館」前の入江田沼にて行方不明者捜索 ・追悼と復興の花火大会「LIGHTS UP NIPPON」開催 ・「ぴはんプラザ店（スーパーマーケット）再開 ・スマイルガーデン山田商店街オープン 					山田町の動き
17日	16日	14日	11日	8日	7日	6日	5日	2日		日					
<ul style="list-style-type: none"> ・東紀州行き！ポラパック 国道42号線矢ノ川峠での落石による通行止めが帰着遅延（JRと代替バスの運行により帰着） ・ツイッター山田町スタッフ アカウント開設 					<ul style="list-style-type: none"> ・「東日本大震災支援シンポジウム」※東紀州地域の台風12号災害支援活動対応により中止 ・東紀州行き！ポラパック運行開始（～10月14日） ・東紀州行き！ポラパック 国道42号線矢ノ川峠での落石による通行止めが帰着遅延（JRと代替バスの運行により帰着） ・「つくり隊！」座談会アンケート開始（～20日） ・業務補助職員（山田町）1名雇用 ・三重事務局スタッフ ポラパック引継ぎ業務のためのローテーション出張開始（～11月21日） ・「つくり隊！」座談会アンケート開始（～20日） ・業務補助職員（山田町）1名雇用 ・台風12号東紀州災害対策会議 ・「つくり隊！」交流会を「しやべり隊」と「楽しみ隊」に区分することが決定 ・台風12号災害支援特設サイト設置・運用開始 ・業務補助職員（山田町）1名雇用 					<ul style="list-style-type: none"> ・「VPI」第23便「保育施設での絵本の読み聞かせ活動開始（～11月18日）（VPI第36便）」 ・山田町現地事務所（トレーラーハウス）設置（～平成24年3月31日） ・業務補助職員（三重）1名雇用 					みえ災害ボランティア支援センターの動き



東紀州行き！ポラパック



【VPI】絵本の読み聞かせ活動



【VPI】避難所仮設風呂清掃活動

年表 | みえ災害ボランティア支援センター3年間の歩み

2011年（平成23年）

4月		3月		年			
4月		3月		月			
12日	1日	30日	20日	14日	12日	11日	日
<ul style="list-style-type: none"> 原子力安全・保安院が福島第一原発事故を「レベル7」に認定 	<ul style="list-style-type: none"> 政府が「東日本大震災」と命名 小学5・6年生の英語活動必修化 	<ul style="list-style-type: none"> 東京電力が福島第一原発1〜4号機の廃炉を表明 	<ul style="list-style-type: none"> 被災者生活支援特別対策本部活動開始 	<ul style="list-style-type: none"> 福島第一原発3号機水素爆発 東京電力が輪番停電（通称：計画停電）開始 	<ul style="list-style-type: none"> 九州新幹線全線開通（記念式典中止） 福島第一原発1号機建屋水素爆発 原子力緊急事態宣言発出 災害対策本部設置 15時14分 日本政府史上初の緊急 	<ul style="list-style-type: none"> 14時46分頃 三陸沖を震源に国内観測史上最大のM9.0の東北地方太平洋沖地震発生 	日本全体の動き
<ul style="list-style-type: none"> 9日 山田町B&G体育館を拠点とし、山田町災害VC開設 14日 ジョイイス（スーパーマーケット）移動販売開始 	 <p>4月23日 山田町災害VC</p>  <p>4月23日 山田町災害VC</p>	<ul style="list-style-type: none"> 28日 応急仮設住宅建設着工 24日 固定電話通話再開 23日 国道45号線開通（宮古市〜釜石市） 19日 岩手県北路線バス運行開始 18日 道の駅やまだ営業再開 16日 宮古市より南向けに順次通電再開 	 <p>3月12日 山田町中央町</p>	<ul style="list-style-type: none"> 11日 災害対策本部設置 	山田町の動き		
<ul style="list-style-type: none"> 20日 「みえボラ新聞」第1号発行（〜平成24年10月12日・全10号） 19日 ボラパック1募集開始 18日 事務局職員募集 16日 事務局ボランティア対象「ボラパック1」実施 11日 「私たちにできることを考える緊急集会・みえ」開催 7日 東日本大震災復興支援みえ宣言 5日 ボランティア活動支援金募集 4日 ボランティア登録募集 2日 事務局ボランティア募集 1日 第1次先遣隊が山田町入り 30日 先遣隊派遣開始（〜5月8日） 	 	<ul style="list-style-type: none"> 26日 事務局をアスト津3階みえ県民交流センター内に設置 14日 先遣隊派遣先を山田町他に決定 13日 被災地でのボランティア活動について注意喚起 13日 物資支援について注意喚起 14日 みえ災害ボランティア支援センター設置決定 11日 ホームページ（仮）での情報発信開始 	<ul style="list-style-type: none"> 11日 みえ災害ボランティア支援センター幹事会（臨時） 	みえ災害ボランティア支援センターの動き			



- ※年表内の略語一覧
- [VC] ボランティアセンター
 - [VPI] みえ発！ボラパックI
 - [VPII] みえ発！ボラパックII
 - [つくり隊！] みえで仲間をつくり隊！
 - [社協] 社会福祉協議会

みえ災害ボランティア支援センター 各幹事団体から

この度の東日本大震災では、大規模災害時に支援センターが立ち上がる仕組みが創設されてから、一番大きな活動が行われました。今、活動を振り返ると、官民共同で組織する利点と難点が見えてきたように思います。利点としては、予算が確保でき息の長い活動に繋がったこと、逆に難点としては、意思決定に関して各幹事団体の許可に時間を要してしまったことに感じています。もちろん、各幹事団体の規模や性格が異なるため、ある程度時間は必要かもしれませんが、今後、即決が求められることを想定した組織づくりが必要ではないかと考えます。

また三重県でも大きな被害が出るであろう三連動地震が発生した場合、活動は今回とは全く違うものになるはずで、前述した組織づくりはもちろん、発生を想定した具体的な活動内容の検討やシミュレーションを、これから進めていかなければなりません。

社会福祉法人 三重県社会福祉協議会
総務企画部 主事 関根正樹

東日本大震災が発生したときは、当法人は参画していませんでした。その後、みえ県民交流センターの指定管理を受託したことがきっかけで、前任者から引き継いだ形となります。よって、当法人における幹事団体への関わりがどのような形であるべきか、またどのような形で参画するべきか、あやふやな状況で整理もできないまま最後を迎えるに至りました。

当法人は、県内各地の中間支援団体が集まって構成していますが、幹事団体への関わりは、同センター事務局の場所貸しに協力している指定管理者としての立場でした。中間支援団体のネットワーク組織としてどのように参画すべきかは、今後の検討課題と感じています。

NPO法人 みえNPOネットワークセンター
代表理事 松井真理子

現在、日本赤十字社三重県支部では、今後発生が危惧されており大規模地震に備えて、災害救護体制の整備・充実に努めるとともに、当面の課題であります防災ボランティアの育成に努めております。大規模災害発生時には、ボランティアの力は必要不可欠であり、その役割を担えるような活発なボランティアの育成を進めていきたいと考えております。

みえ災害ボランティア支援センターは、東日本大震災発生時より設置され、ボラパック等の被災地支援、県内避難者への支援活動等多くの活動を行っておりますが、今後も被災者への継続的な支援は必要であり、日本赤十字社三重県支部では、幹事団体の一員として、今後どのように協力し、いかに関わっていくか課題であると思っております。

日本赤十字社三重県支部
事業推進課 係長 神田裕司

阪神淡路大震災以来、災害救援ボランティアの活動が全国的に注目され、それは特定非営利活動促進法（NPO法）という成果を生み出しました。そして一昨年、東北地方東部に多大な被害をもたらした東日本大震災へのボランティア活動は、今もなお広範囲に、継続的に、多面的に取り組まれています。世間では“自助、共助、公助”という言葉が飛び交っています。あえていうなら震災復興の基本はやはり国や自治体等行政による公助が担うべきでしょう。ボランティアは、公助で対応しきれない部分に関わる、時には行政とタイアップしながら取り組むことがその役割だと思います。

とはいえボランティア活動には息長く、楽しく、無理のないよう、自分の思いを発散させつつ取り組んでいきたいものです。

三重県ボランティア連絡協議会
防災部会長 横山立夫

みえ災害ボランティア支援センターの幹事団体の運営に関わらせていただきましたが、最初は他の幹事団体のみなさんの熱意に圧倒されるばかりでした。そうした中で、月に1度の幹事会は、支援・交流やボランティア活動について、他の幹事団体のみなさんと意見を交わせる大変貴重で有意義な時間でした。

本県においても、南海トラフ沿いで発生する大規模な地震による大きな被害が予想されています。災害時には、ボランティアの活動が被災者・被災地の大きな力となりますが、県内で活動する関係団体が平時から連携してネットワークを構築しておくことが、活動を迅速かつ効果的に行うためには不可欠です。今後も更に災害ボランティア活動が活発に展開していくよう、みなさんとともに取り組んでいきたいと思っております。

三重県防災対策部 防災企画・地域支援課 地域支援班
主査 西口智也

今年の4月から幹事団体の担当としてセンター運営にかかわらせていただきました。三重から遠く離れた岩手県山田町への支援、三重県に避難してこられた方への支援、これから三重県で起こりうる災害に備えたマニュアル作り等、それぞれの幹事団体ができる事や得意分野を出し合いより良い支援ができるよう考えてきました。月に1回開催される幹事会が官民協働で、お互いが対等な立場で意見を言える場であったことはとてもよかったですと思います。様々な経験・視点から出される意見は、勉強になることがたくさんありました。

今後、三重県でも大きな災害が発生することが予想されています。「明日災害が起こるかもしれない」との危機感を持って話し合いを続けていく必要があると考えています。

三重県健康福祉部
地域福祉課 福祉・援護班
主事 小林菜穂子

平成25年度の三重県総合防災訓練に幹事団体の一員として初めて参加した際、みえ災害ボランティア支援センターの立ち上げや運営の難しさを実感しました。

東日本大震災では、発災から3日後に幹事会が開催され、その後の情報収集や活動準備につなげていきました。こうした迅速な対応は、平時からのマニュアルの策定や訓練の実施によつて、機能的な組織を作り上げた、発災以降の幹事団体の皆さんによる努力の賜であると思います。

また、バスによるボランティアの派遣では、県内のさまざまな団体が災害時の支援活動を実践し、力量を高める貴重な機会を提供することができました。こうした経験が今後の市民活動に生かされることを期待しています。

三重県環境生活部
男女共同参画・NPO課 NPO班
主幹 大谷英生

※幹事団体の1つ（特定非営利活動法人みえ防災市民会議議長 山本康史）については、他頁の挨拶等にかえさせていただきました。

平成23年4月、「何かできることを」と思い、ボランティア情報を探していたところ、みえ災害ボランティア支援センターのホームページを発見し、気付けば5月からスタッフとして働いていました。

何もわからないまま入局し、次々に出発するボラバックや日々変化する状況に試行錯誤の毎日でしたが、多くの方々の支えがあつて今日までやつてこられたことに心から感謝です。ただ一つ、激務の末、スタッフがパタパタと倒れていく中、自分一人だけずっと元気でいることが謎でしたが：ボランティアもスタッフも健康と安全が第一です。

対策班として、山田町や三重県に避難されている方々の想い、そして、ボランティアの方々の想いをどれだけ繋げることができたかわかりませんが、本当に多くの方々との出会いがあり、沢山のことを学ばせていただきました。今後はまず自分の足を固めつつ、皆さまとの繋がりを大切に、引き続き何らかの形で寄り添っていくことができればと思います。またどこかでお会いすることがあります。ありがとうございます！



対策班長 森本佳奈
(平成23年5月1日)

災害ボランティアの経験や知識も無く、この身一つでできることを模索し参加したボラバックで、一人では微力でも仲間の思いが重なれば逞しい原動力になること、遠方から訪れて活動する意義を強く感じました。

ボランティアからスタッフへと立場が変わり、ボランティアの限界とスタッフの責任の重さを痛感しながらも葛藤し、ひたすら山田町と三重を往復する日々でした。力不足で迷惑をおかけするばかりでしたが、多くのボランティアさんの熱意に刺激され、山田町の方々の温かさや強さに触れ、スタッフの皆さんに助けていただきながら、長く携わらせてもらえたことを幸せに思っています。

皮肉にも数え切れないほどの素晴らしい出逢いに恵まれ、「感謝」の本当の意味を教えてもらった二年半。山田町の魅力に夢中になるほどに、故郷を思うことの大切さに気付かされました。いただいたものばかりですが、このきっかけを今後余すことなく繋いでいけるように、胸に積もったたくさんの「笑顔」と「ありがとうの気持ち」を時間をかけて着実に返していきたいです。

みえボラに関わっていただいたお一人お一人に心の底から感謝しています。ありがとうございます。



業務補助 松岡佑美
(平成23年8月16日)
ボラバック第5・15・16便)

あの日から1年4ヶ月が経った平成24年7月、みえ災害ボランティア支援センターに入局しました。最も在籍期間の短いスタッフです。既にボラバックは山田町の皆さまに信頼されており、また、「みえで仲間をつくり隊！」は多くの交流会を実施していただきました。これまでに先輩方が築いてこられた事務局があつたからこそ、すんなりと入ることができました。

「少しでも何かできれば」との想いでボランティアをしてきましたが、スタッフになることでその想いが変わるのでは…という懸念もありましたが、それは杞憂でした。これまで以上に多くの方が温かく接してください、見守ってくださいました。震災がなければおそらく出会うことのなかった方々ですが、その方々の存在は私自身の大きな力になりました。こまめに続ける事ができた要因です。

支援センターという基盤を失うことで、これからどういう形でかわることができののか、今はわかりませんが、まずはこれまで出来なかつたこと、山田町でお酒を飲みたいですね。

本当にお世話になりました。ありがとうございます。ございました!!



業務補助 谷畑哲男
(平成24年7月10日)
ボラバック第7・23・32便、
第3・4便)

みえボラ現地スタッフとして、震災の年の8月から勤めさせていただきました。

震災で多くを失い、たまたま運良く生き延びた私が、山田町とは遙か遠くの三重県のボランティア支援団体に勤めるようになるのは不思議なものを感じます。

被災地を支援する側と支援を受ける側との両方の立場である事は、気持ちの置き所に戸惑う事もありました。しかしながら、ボラバックでボランティアに来てくれた沢山の方々と間近に接することは、支援いただいた山田の人達のみならず、私にとっても良い方向へ気持ちが導かれて来たと思えます。

みえボラ活動期間中、スタッフとして三重県と山田町との間で、私がどれだけお手伝いできたか心もとありませんが、わずかでも皆さんの役に立っていたのなら、とても嬉しいことと思います。そしてみえボラに係わる全ての方々に感謝を伝えたいと思います。ありがとうございます。

業務補助(現地班) 佐藤辰也
(平成23年8月1日)



被災地にながら、罹災していない私を事務局スタッフとして迎えていただいていたから2年3か月が過ぎました。最初は何をしたらいいのかもわからない、まさに手探りの状態でした。それでも、みえボラのみなさん、活動の中で出会った方々に多くの元氣と勇氣、あたたかい言葉をいただく中で、自分ができることを探しながら、今日まで務めることができたと思っています。

自分がどれほどのことを為せたのか自信を持って言えるほどのことはありません。ですが、みえボラが残してくれたもの、事務局スタッフとして過ごした時間を無駄にしないように、そして、これからもたくさんの方々の「笑顔」に出会えるように、何らかの形で「支援活動」にかかわっていくつもりです。

まだまだ復興への道のりは遠く、厳しいものとなるのでしようが、山田町と、私自身に前に進む力をくれた、出会っていたいただいたすべての人に、心から感謝しています。ありがとうございます。

業務補助(現地班) 外館こずえ
(平成23年9月7日)



事務局スタッフから



センター長 山本康史
(平成23年3月14日)

ボランティア支援センターの事務局といっても何を言えば良いのか手探りの中、必要な事を自ら考え実行してくれるメンバーが揃ったことは本当に幸運でした。

誰も訪れたことのない山田町で足場を作ってくれた先遣隊のみなさん、1000km離れた現場にボランティアを毎週送り込むという前代未聞のミッションを実現してくれた三重スタッフや事務局ボランティアのみなさん、山田町の中を走り回って信頼関係をつないでくれた現地スタッフや二瓶さん、その全てをとりまどめてくれた事務局長。関わってくれた全てのスタッフが誰ひとり欠けても今回の取り組みは為し得なかったでしょう。

特に、(途中入れ替わりを含め)11名の方のみに有給職員として関わってもらいましたが、今回の事業を行う上で最も大変な思いをさせてしまったのが、この有給職員のみなさんだと思っています。ボランティア活動に有給職員として関わることには葛藤がたくさんあったろうと思いますが、みなさんがいてくれたことでこれだけ多くのボランティアがのびのびと、山田町の方々と共に活動できたのです。みなさんがまさに「土台」となってくれたからこそこのセンターでした。本当にありがとうございます！



事務局長 若林千枝子
(平成23年5月1日)

県を退職したその年に発生した大規模災害に、到底他人事には思えず「自分でできることがあれば何かしたい。」と考えていたとき事務局長就任のお話をいただきました。その際、災害ボランティア活動のための経費を「県が一部負担することを決定した。」ということも聞き、これですぐさまボランティア活動支援のスタートを切れる。事務局体制を整えることもできる。官民協働の支援センターにかける行政の決断に頭が下がりました。

とはいえ限られた経費のなかで、私自身を含めセンター長と局長補佐の伊佐さんがボランティアのまま入局しました。「みえ」の事務局5名はともかくとして、現地スタッフの募集と人選、業務環境の整備にはたいへん苦労しました。けれども今振り返ってみると、さまざまな幸運と出会いがありました。当初は1名、のち2名の現地スタッフ雇用、そのために山田町の商工会や観光協会から得られた協力が大きな力になりました。そして何よりもスタッフ一人ひとりのやる気と能力に恵まれました。そこに事務局ボランティアの協力があって、より大きく花開くことができたと思っています。「ひと」こそが「ちから」であることを、今振り返ってしみじみと思います。



事務局長補佐 伊佐彰代
(平成23年5月1日)

平成23年3月11日。地域活動の予定が夜だったので、たまたま自宅にいた所変な体感があり、テレビを点けたら思いもよらぬ映像が映されており、唾然としていたら、臨時会の連絡がありました。津に向かう途中あらちちらに、警察の方々が立ち止まらなれ、物々しい雰囲気の中運転していて、母子家庭だった頃、伊勢湾台風で被害を受け、あの時一筋の明かりにホッと「大丈夫ですか？」の一声に安堵した事を思い出しました。

微力ながら、できることがあれば何でも、事務局でお手伝いさせていただきましたが、ボランティアに参加された大勢の方の温かい思いやりと行動力には、本当に頭が下がる思いでした。

特に若い方々は学校、お仕事で時間の制約がある中よくぞ頑張ってくださいました。またセンター長、事務局長、事務局スタッフ、現地スタッフの皆さんも素晴らしい能力を発揮され、どこにこんな気力があるのかと感心いたしました。素晴らしい経験をさせていただき、本当にありがとうございます。



総務班長 番家康文
(平成23年7月6日)

一昨年の6月、陸前高田市でのボランティア活動にその一員として参加しました。そこで見た光景はあまりにも無惨で、絶対にあつていい筈のない光景でした。その後、この時の思いを契機に、結果として、当センターでお世話になることになりました。

センター事業を円滑に運営する為には、関係機関とのさまざまな丁寧な協議等が必要です。日々の業務でこれまで、その使命を遂行できたのも、センターに集う多くの皆さまのご支援・ご協力及びチームワークの結果がこれを可能にしたのではと思っています。

現代社会、なかなか安心して暮らせません。台風・地震等の自然界の怒りが時に人間に鋭く向けられ、私たちを不安に駆りたてます。しかし、そのような時でも人は支え合えます。「人は共に力を合わせれば、どのような困難でも乗り越えられる」ということをセンターにて、体感させていただきました。センターに集う皆さま、ありがとうございます。



情報班長 山畑直子
(平成23年5月1日)

私は事務局ボランティアから有償スタッフとなりましたが、新事務局体制となった平成23年5月はちょうど、それまで事務局運営を担って頂いていた方々が日常へと戻っていく頃で、余裕もないまま次々とボラパックの説明会へ出席し帰着をこなさなくてはならず、残業も休日返上もなんのその、気がつけば森本さんと二人、朝の9時から夜の10時まで差し入れの根昆布しか齧っていなかった。なんてことも今では笑い話です。

家庭の事情からなかなか山田町へ赴くことができない私は、現地の空気感等を掴むのが難しく、時には厳しいお言葉も頂きながら、また時には家庭崩壊の危機を乗り越えながら、自分自身もどかしさから心折れそうになる時もありましたが、信頼できる仲間やボランティアの皆さんの出会いにより、山田町に行くことはお任せして、「みえボラのⓂの人」としてできることを探し続けることができましたと思います。

情報班として、情報の収集、整理と共有、発信など、力不足も甚だしかった私ですが、多くの出会いに心より感謝します。ありがとうございました！

山田町長 三重県知事から

■山田町長からのメッセージ

めっきり冬らしくなり、つい先日までの山田町の短い夏が遠い事のように感じられる今日この頃です。という言葉からもお気付きのことでしょうが、人の記憶とは不確かなものです。2年半前の大災害も多くの方には遠い昔のこととして片付けられているように思えます。オリンピックなどの話題で被災地が忘れ去られることが、現場をあずかる者として懸念されます。実は3年目が多くの問題が顕在化する時期なのです。私はこの一年が被災地にとって一番重要な年だと感じていきます。

震災後、多くのボランティアが押し寄せ、津波が引くようにいなくなりました。そのような中、みえ災害ボランティア支援センターの皆様方には、継続してご協力を頂きました。この記録誌を見ればセンターの活動内容は一目瞭然であり、すばらしい活躍が多くの方にも伝わると思っています。みえ災害ボランティア支援センターは平成25年12月で活動終了というところで、発災からこれまでの支援活動に対し、町民を代表して心から御礼を申し上げます。

今回、生まれた縁を大切にし、今後もさまざまなかたちで交流ができればと思います。

復旧、復興は町内いたるところで始まっております。国民の皆様の大切な税金を使つての工事です。すこしたりとも無駄な事業をしないよう、次世代に重荷にならないコンパクトな町づくりが目標です。

そして二度と津波で命を落とさない町づくりをめざし、町民一同頑張つてまいりますので、皆様には今後とも山田町のことをよろしくお願い申し上げます。



山田町長 佐藤 信逸
平成25年12月吉日

■三重県知事からのメッセージ

東日本大震災による未曾有の大災害から3年近くが経とうとしていますが、改めて、被災された方々へお見舞い申し上げます。

みえ災害ボランティア支援センターは、発災から3日後に立ち上げて以来、幹事団体やボランティアなど多くの皆さんに支えられ、活動を行ってまいりました。

岩手県山田町へボランティアをバスで派遣する「みえ発！ボラパック」は、震災から1か月後の平成23年4月に第1便を運行するとともに、その後、支援の内容を変えながら2年半にわたり継続し、計72便、延べ1,290名の方に参加していただきました。

全国でも数少ない、長期的な支援活動ができたのは、センターとボランティアの皆さんが一体となつて取り組んだ大きな成果であると考えています。

また、東日本大震災により三重県へ避難された方々に対しては、笑顔と元気を取りもどしていただけるよう、県民や避難者の皆さん同士で交流していただく、「みえで仲間をつくり隊」などを開催してきました。

こうした活動は、ご参加いただいた皆さん、お力添えをいただいた皆さん一人ひとりの思いの結集であり、厚くお礼を申し上げます。現地はまだまだ復興半ばです。築かれた絆を大切にしながら、県として引き続き支援を行っていくとともに、これら支援活動から得た経験や教訓を三重県においても生かしていきたいと思っております。

今後とも皆様のご理解、ご協力をどうぞよろしくお願い申し上げます。



三重県知事 鈴木英敬
平成25年12月吉日

山田町の方から

私が最初に発した言葉は、「何で？10数時間もかけてみちのくの又みちのおくの山田まで？」。帰ってきたご返答は「被災地の一番遠いところを支援することに決めたのです。」との力強い言葉でした。

発災から2年8ヶ月が経ちますが、みえの皆様は、10数時間かけておいで頂き、本年9月までボラバス71便約130名、地元の人間にとりましては、何よりも皆様の愛と笑顔が生きる勇気と力の源となりました。日々、気持ち落ち込み心が折れそうなきなど、みえのボランティアバスとオレンジ色のビブスのボランティアの皆様からの声掛けが心の支えとなりました。「ありがとうの心を込めて感謝、感謝」であります。

このように、感謝できること、お話できることが生き長らえている証と捉えて頂ければ幸いです。経験のないこととは言いながら、これまでの活動において皆様方には大変失礼な言動や行動が多々あったものと思っております。この場をお借りし心からお詫びを申し上げます。

これから、プレハブの仮設住宅でも半年間寒さと雪との戦いははじまります。いつもそうですが、春の来るのが待ち遠しい今日この頃です。どうか、三重県の皆様そしてみえ災害ボランティア支援センタースタッフの方々におかれましては、ご健康に留意なされ、ますますの活躍を願いつつお礼とさせていただきます。



山田町社協
復興支え愛センター長
社会福祉法人
山田町社会福祉協議会
事務局長 福士 豊

平成 25年 11月 吉日

三重の皆様、長い間ご支援いただきありがとうございました。

23年4月の先遣隊7名を皮切りに、4月28日の「ボラパック」20名の第1便の皆様を始め現在まで千名を超える多くの方々、そして9才から81才まで幅広い年令と何回もくりかえし山田を訪れる方もおりました。又、ボランティアの内容も文化的な事や、スポーツそしてガレキ撤去等と山田町民のニーズに対応したタイムリーな素晴らしい内容でした。まさに「みえボラ」は一般市民を中心として、三重県知事様を始め各種団体の大同団結のもと、「みえ宣言」を実践した三重県あげてのボランティア活動と思えます。

私個人も伊勢ロータリークラブを中心とし、伊勢市の方々と交流させていただき、ずいぶん元気づけられました。公私共に一生忘れる事のない温かくすばらしいご支援です。残念ながら山田町の復興はまだまだです。できますれば、今後共息の長いご支援をいただければと誠に勝手ながら願うものです。

あらためて心からの感謝と御礼を申し上げます。

ほんとうにありがとうございました。



山田町商工会
会長 阿部 幸栄

平成 25年 11月 吉日

あの悪夢のような震災から2年8ヶ月、町は今、二度と津波で犠牲者を出さない安全な町づくりに、全力で取り組んでいます。

みえ災害ボランティア支援センター様には、震災年4月から今日まで山田町を応援していただいております。その間、被災者のニーズが変わる中での対応、大変ご苦労されたことと思います。先般、みえ災害ボランティア支援センターさんにお邪魔した際、ホテル入口で、ここから「ボラパック」が発出したことを聞かされ、片道15時間もかかる山田町までの移動を、1290名のボランティアの方々はどうのような思いでバスに乗り込んだのだろうか、それを思えば心から感謝の気持ち一杯でした。又、送り出すまでの事務局の方々のご苦労を考えますと、ただ、甘えるだけでいた自分たち、頭の下がる思いです。

今回のみえ災害ボランティア支援センターさんとの関わりについては、私たちが忘れかけていた「相互扶助」の精神も含めて、震災の教訓として後世に語り伝えていく責務があると強く思っております。私たちは、今後応援していただいた皆様の想いを胸に、皆様にはしないような素晴らしい町づくりに邁進していく覚悟でございます。どうぞ、いつまでも山田町を見守って下さるようお願いいたします。本当に有難うございました。



山田町観光協会
事務局長 湊 敏

平成 25年 12月 吉日

んです。私の場合は、社協さんのほうから連絡がくるとほっと安心しましたね。社協さんの方でいついつ炊き出しが来ますよって話があると安心しました。

阿部：自分も今回の体験で色々な団体の方とお会いしましたけども、他の地での災害の時でもやはり大きい組織の方々は活動しているらしいんですよ。そういった方が実際に来ていたんだというのの後で知ったんですよ。存在を知らなかったもので。川村さんのおっしゃった、「知らない中の信頼する情報」ってのは本当にその時は重要ですよ。

松崎：同じ業種に「どう？」って聞いて、「そこは大丈夫」って言われたりね。

～気持ちが大変～

山本：個人でボランティア活動する人たちに、三重の側で1時間半くらい講習してもらってからこっちに来るんです。今はほんほんマスコットとか三重で講習をして、それでも素人が手習いでやって当日までに練習してから来てねってやるんですけども。その辺はむしろこっちの方に上手な人がいるんじゃないのという形ですとやってもらったんですね。

鈴木：それはそれでよろしかったですね。

松崎：上手下手じゃなくて、コミュニケーションと言うかそういう有難さのほうですよ。

阿部：ハンドマッサージというのも集まるきっかけとか、ふれあうきっかけだと思う。上手なハンドマッサージしてもらうために来るっていう人もまあ全員じゃないかもしれないんですけども。

川端：また保育園はまた違がったと思う。非日常のことがずっと続いて、みんな疲れ果てていて。そんな時ハンドマッサージだったり体のマッサージなどをしながら話を聞いてく



れ、心も体も癒されて、すごく良かったんじゃないかと思う。

～続く繋がり～

山本：最後にぜひ皆さん一言ずつボランティアに向けて、特にみえのボランティアに来てくれた千何百人の方々に向けてコメントを一言ずついただけると有難いなと思います。

阿部：活動自体は締めを迎える事なんですけど、まだ繋がってる感はあると思うんです。活動が終わったから、はいさよならでなく、こういう場も必要ですよ、たぶん住民の方との繋がりが出来ていると思うので、それは大事にしたいなと思います。やっぱり私たちもお礼を出来るような何か仕組みのようなものを考えなきゃなというのが率直に思っていることです。だけどまだこれで終わりじゃないので。何度も言っていますけども、せっかく出来たつながりなので、ボランティア活動だけじゃなく文化交流でもいいですよ、継続できればなど、ほんとに思うんですね。ありがたうの意味、思いをこめて。

川端：みえ隊の方々ともたくさん貴重な出合いをさせていただきました。保育園の場合は調理補助・行事の準備・草取り・園児と遊ぶ・大掃除：とにかくたくさん手伝っていたいただきました。私たちがただだったら本当に寂しい毎日だったと思いますが、皆さんがワイワイやって来て、とても賑やかな、楽しい日々を過ごすことが出来ました。みえの方々、遠いところ何度も何度も来ていただき、たくさんのご支援をいただきました。本当にありがたうございました。

鈴木：ちょうど仮設が行き渡った頃みんな外に出てこなかったんです。みえのボランティアの色んな方が色んな催し物を持ってきて、皆さんが外に出てくれるようになってくれましたね。それから今はみんな明るく普通に出来るようになってきました。それもう本当に私たちもう嬉しかったです。本当に感謝しています。ありがたうございます。

川村：まだまだいつ復興するかちょっと見えていないのですけれども、いつかしっかりと復興した姿を見せるのが今の全

てのボランティアの方々に対する恩返しなのかなと思いますので、きっちり復興したいなと思います。ありがたうございます。

竹内：いろいろな趣向を凝らした支援をしていただいた仮設の人達が、いっぱい外に出てくるようになったので素直によかったと思って感謝しています。ありがたうございます。

松崎：正直に言うと、これから住宅再建が始まる。これから第2弾の勝負なんです。これで終わりだというのがちょっと寂しい部分もあって、みえさんがボランティアをしたっていうことを残す意味でも1年に1回でも来るようにすると山田町を支援していただいたものがずっと見えるんじゃないかなと思うんです。ここでぶつと切れてしまうと、今までしてくれましたとても感謝していますけど、それが津波と同じように風化してしまうと思うんです。今までみたいに頻繁になるわけではありませんが、お祭り前に来てボランティアをしてからお祭りを見てもうとかね1年に1回くらいはそういうのを企画してずっとこう繋がってもらえる事が希望かな。

山本：ありがたうございました。色々と教えていただいて、きつとそうだろうなと思っていたところ、意外にそこが大事だったんだなって思ったところ、色々ありました。ここで終わってしまうということに對するご不満も重々心に思っています。また私たちも本当にもうちょっと続けたかったという思いを持っています。

逃がさんぞというメッセージを受け取ってこの座談会を終わりたいと思います。本当にありがたうございました。

【平成25年8月6日】



が次にくる。
山本…誰かが知っている、信頼している誰かの紹介というのは、やっぱりまずは信頼しやすいく。
全員…うん、そうですね。

↳ボランティアの活動内容

山本…あと信頼するに至るまでの事で、他の団体さんとか思い浮かべていただいで欲しいのですが。

竹内…何回も来てくれる人たちがいますね。1回きりの活動とか結構あったんですけど、何回もまたここでやりたいたいという声があります。

松崎…活動した所によって仮設の人と信頼関係が出来るように調整したり。

竹内…1回入って顔を覚えてもらい、また来たとき「この前来た人たちだよな」という風になってそれが定着している。

山本…1回来てくれたボランティアさんより繰り返し来るボランティアさんのほうが喜んでもらえますか？それは活動内容よりも。

竹内…内容のほうが重視になってきていますね。なんでも来てくれるとありがたいのですが、今はみんな色々出来るようになったので、もつとこんなやりたい、あんなのやりたいと言いう要望が出るようになってきています。

松崎…みえさんは、みえ災害って一つになっていても内容が結構濃かった。というかそういう方達が色々な分野に育ったので内容はすごかったです。同じボランティア活動で、何回も来ることはあるけどみえさんは内容は濃かったですね。

↳これからつくり上げていくもの

阿部…例えば三重県で災害がなければいいのですが、もしあった場合こっちから恩返しという訳ではないですけども、行きたい人たちが何を知っていなきゃいけないのか、どういう流れでやるのか、またそれを支える体制がどうあるのか。

その防災の意識とボランティアの意識というのが、これから作っていかなくちゃいけないと思うんです。まだそこまで至ってないんですけれども。絶対そういうの。

松崎…今、復興は住宅再建が先で動いていますけど、そうやってくると10年先の事になると

思うんですよ。それから、3月11日を考えようとしたって忘れてしまう。だから今のうちそついうの作らなくちゃならない。

鈴木…忘れないようにしているからね、あの日の事は。

阿部…町にも、地域防災計画ってあるじゃないですか。自分たちでどんなことが出来るんだらうかというのを考える場も必要であるのかなあ。

↳ボランティアって何？

川端…最初「ボランティアって何？」って本当に思っていました。「いいですよ、とんでもないです」って感じで。地域の人たちもそのようでした。ところが日々大変になってきて、お願いしてみようという気持ちになったようです。阪神淡路大震災の時、自衛隊や警察官などの活躍を見てきた人達がボランティアとして沢山入ってくれました。山田の人達はボランティアに対する認識が全然なかったと言っていました。

松崎…ボランティアは難しいですね。あまりボランティアがやってくれるとその住人を…なんでしょね。

鈴木…その分やる気がなくなる？

松崎…たとえば今そこに草がっぱい生えているとします。自分一人だとこの位かかるのに、ボランティアさんがきて一緒にやれば半分ですむ事、それがボランティアになるかなと思う。ところが、今までもそうだったかもしれないですけど、ボランティアの仕方がなんとなく私はちょっと違うんじゃないかなと思う。たまにやるのがボランティアなんです。大



鈴木聖一さん

変なところを手伝ってもらうのがボランティアです。自分たちがやって頂戴っていうのじゃなくて、一緒にやるのがボランティアじゃないかな。でも最初の避難所とか、避難所の時はしようがないかなと思うんです。

川端…どどん変わるからね。

松崎…うん。ずーっと同じボランティアの考え方ではない。ボランティアって時期時期で活動の内容が違う。最初的时候は疲れているから、たしかにおんぶにだっこしたいけど、時期時期じゃあ一緒にやりますかって感じになると、それに慣れてしまつて。

阿部…時期時期というのが正直難しいですね。悩んで悩んで色々聞いて、暗中模索な感じでやってきていました。やっぱりその時期の変わり目というのが今だから言えることで、当時はわからなかったです。これを絶対忘れないうちにまとめないといけないというのがあるのですが、自分が一番知りたいのは、避難所運営されていた方のタイミングだった。そういったところからボランティア活動って絶対来ると思ってた。今回みたいにくう押し寄せてくるというぐらいの感じで、そこを受けている人に、うまくマッチするような感じっていうのがやはり、検証しなきゃならないという時期にきているのかなと思います。やはりみえのみなさんも活動が終わるっていうのが、今後どうなるのかと正直心配ですけど、やはり地域貢献というか、地元の人もまじえて今ボランティア活動しているので、そつちを強くしていかなきゃならない。

↳知らない中の信頼する情報

川村…避難所にいる時ですが、毎日毎日直接来るんです、避難所に物資支援やりたいですとか。炊き出しをやりたいですとか。その人たちの情報がない中で入れ替わり立ち代わり来られても誰も信用していいかわからない



川村聡さん

念があるために、長期で支援してくれる人（団体）をすべて一括させていたのだという形です。コンタクトをとった方には「いつまでいるの？」って先に聞くのが私の癖でした。長期で支援してくだされば、メニューがかち合わないよう活動していたら感じます。みえボラさんがほっとサポートセンターに入る時に、きっとサポーターの方から私の所に行った方がいいよって言われて私の所に来て、それからのご縁なんですよね、きつと。

↳信頼と安心↳

山本…今回お話を聞く中で1つのテーマは、よそ者がいかに地域の方と一緒に生きるきっかけを作っていたのか。やはり信頼関係も出来なければボランティア活動も出来ないですし、「あんた誰？」というところから始まっているはずですよ。その「あんた誰？」が、「あーみえさんね」って言うってもらえるまでに一体なにがあったのか。是非みなさんどんな出来事があったのか、どういうふうにしてらっしゃったとか言っていたければ。

鈴木…現地スタッフにいい人があれば別に地域関係なくいいんじゃないですかね。

川端…みえの人たちが来るたびに言うんです。「自分たちの住んでいる所の景色は驚くほど山田町に似てるんです。津波がきたら…自分たちも他人事じゃないんです」「見に来てください。本当に山田と同じようですよ」って。そういう思いで皆さんが来て下さったのだと思います。ボランティアもいろいろな人が来しました。みえ災害ボランティア支援センターという組織がバックにあったので、安心して手伝って頂くことが出来ました。

阿部…ボランティアを悪く言いたくないのですが、これは伝えなきゃいけないというケースがいっぱいありました。警察



川端京子さん

沙汰になるような事、流浪的な方で食べ物求めてくる方もいました。ただ、活動していただくという意志の部分は強いのですが、受け手になる住人の方にちょっと迷惑がかかるんじゃないかなと。中間的な私たちの立場って微妙じゃないですか。何かしたい、お手伝いしたいです、ありがとうって始まるんですけども、いや要らないですとも言えないですし、歯がゆい。

松崎…ちゃんと募って来ているということは、川端さんが言ったように信じられそうなのは頼むっていいことが出来るけど、やっぱり「ん？」って思うところはわかる。震災後いろいろな人が来て、何か悪い事をしようとしてきた人結構いましたよね。

山本…今回ボランティアとして来てこの人ほんと大丈夫かなとか悪いことを考えているかなというのは具体的にどんなことでしょうか。実際にあったかどうかではなくて、そういう疑いの目を持つとすれば、どういう疑いがあったか。例えば個人宅の片付けを手伝う、そこで盗難があるとかそういう心配…なんですかね。

阿部…私が直接見たわけではないのですが、川端先生もおっしゃったようにボランティア自体があんまり浸透してなかった時、「なんでお手伝いされているんだらう」って方が他にもいたと思うんです。そうすると何かしら話があり、何かお礼をしなきゃいけないという人がいたという話があり、その中でお金を請求したと。そういう報告を受けてその人たちがこの誰って調べたのですが結局は見つかからない。そういうのが1個でもあると、やはり気を締めていかなきゃいけないんです。そういうところで、疑心暗鬼になるところもありましたので、それを防げなかったという反省点もあるんです。

松崎…山田の人だけかもしれないけど、行政が入ると安心すると言いますね。仮設の集会所・談話室の利用申し込みの窓口を一本化したのはそういうこともあるんです。そうしないと色んな人やボランティアが来たとき区長さんが何もわか

らないで受けて、商売を談話室・集会所の中でやられるというのもありえます。窓口を利用してちよっと怪しいなと思ったとき、こちらがサポートするという感じですね。

↳信頼するための要素↳

山本…色んな所からボランティアが来る中でどうやって信頼関係を作るのかというところが難しいし大事なところ。いかに信頼してもらおうのかという所をちよっと配慮するときとコミュニケーションの仕方が違ってくるのかなと。その場合どういう部分があれば受け入れやすかったのか、それぞれで思っているところがあればまた是非聞かせて頂きたいです。色んな団体さんを思い浮かべて頂いて、あそこは信頼しやすかったな、あれがあるから信頼しやすかったな。そういったキーになったような要素ってというのは何ですかね？

鈴木…スタッフの方ですね。
松崎…みえさんの場合はね、最初きたときはハテナってクエスチョンがついていた。知らなかったから。それでも地元の人たちが雇われているというから、ああ大丈夫かなというのがあります。

山本…なるほど。最初は…言葉は悪いですけど警戒しとかないかね。トラブルが起こってからは遅いですがからね。そこは乗り越える何かがあるんです。最初のスタッフの印象って大きいですか？第一印象。

松崎…その人を見ますね、それぞれの判断力ね。勘という人相とかね。

山本…人相ですか。あんまりノウハウになっていないな。人相いい人を先遣で選んでくださいって。(笑)

阿部…みえの方々の紹介ということ、すつと入って。やっぱり知名度って大きいですね。例えば、みえボラさんの繋がりがあってなると多分壁がひとつクリアする。あとは実際に会って先ほどお話をされたように、会って肌が合うか合わないか



松崎由美子さん

座談会 ③ 被災地とボランティアの信頼関係 ～山田町とみえボラ～

震災初年度から山田町で活動を続けて来たみえボラ。同じ場所でも継続的に支援する中で、支援する側と受ける側との信頼関係はどのようにして構築されてきたのか。

ボランティア活動に関わってきた山田町の方々にそれぞれの立場で経験・思いを語っていただきました。

出席者

阿部寛之さん（山田町社協復興支え愛センター）

松崎由美子さん（復興推進課被災者支援係）

竹内美奈子さん（ほっとサポートセンター山田）

川端京子さん（健康福祉課子育て推進室）

鈴木聖一さん（街かどギャラリー（山田町ゾンタハウス内）

オブザーバー

川村聡さん（国保介護課介護保健係）

松岡佑美（みえ災害ボランティア支援センター）

聞き手

山本康史（みえ災害ボランティア支援センター長）

※順不同（役職は当時のもの）※以後 敬称略

～「みえボラ」との出会い～

山本…最初みえの名前を聞いた時どんな感じでどんな経緯で、その後、私たちのことを見てくれたのか言って頂けたらと思います。

阿部…当時は私たちボランティアの方々はどうやって活動していたかというのがわからない状況だったと思います。そのとき来られた方々がそうだったことでもお手伝いできますよというお話をいただき薬にもする思いで、協力いただけませんかと言ったのがきっかけだったのを覚えています。期間が長ければ長いほど信頼関係は出来るので頼れる部分も多かったです。ただお帰りになる際にまた新しい方にな

るので信頼関係を作るといふところが入れ替わり立ち代わりだったのを記憶しています

山本…そうですね。最初の先遣隊が4月の頭に来て、最初にバスで帰ったのは4月のゴールデンウィークの頃。それまでは先遣隊が3人位ずっと張り付きで入らせていただいたんですね。そこでの入れ替わりで人が変わっちゃうと信頼関係はこれから？

阿部…みえボラさんはずっと切れ目なく入って下さったので、何か困ったとき人が足りないときにはすぐお願いできる環境にあったというのが本当に、強みというか有難いことだったと思います。リピーターの方は何回も来ていただいたので、ああまた来てくれたという嬉しいところがあります。



阿部寛之さん

川端…私の勤務先だった織笠保育園も避難所になったんです。その頃私たちはボランティアというものがわからず「何でよその人に手伝ってもらうのか？自分たちのことは自分たちでしよう」という思いでした。しかし町職員である織笠保育園の保育士たちは町内の避難所へ、栄養士は町全体の支援へと移ることになり、調理をする人が足りなくなり困っていました。そんな時、みえのボランティアさんたちが来て手伝ってくださいました。調理補助の他に保育園の夏祭りや運動会、発表会にも来てくれましたね。調理補助は毎日2〜3名、行事には10名ぐらいの方々が来てくれました。被災の大きい地域でしたが、みえ隊の皆さんから暖かい気持ちのこもった食事を作ってください、子どもたちも避難所の皆さんも元氣になりました。みえの方たちにはとても感謝しています。

鈴木…我々は場所を提供するだけだったんですけど、仮設の人たちに色々な折り鶴とかギターとかを教えていただきました

した。そうなると思えば仮設の人たちは外に出るようになってくる。ああやっぱり良かったなと。ただ残念なのは男の人たちがなかなか出て来なく、どう言ったらいいかってね。皆さんが入れ替わり立ち代わり来て下さって、もうそれを待っている人たちも結構あります。

川村…私、ボランティアの皆さんと課として関わるようになったのは4月に国保介護課に異動してきてからということになります。

山本…みえに関わらず、例えば仕事をしているなかで、ボランティアってどういうふう映ってらっしゃいました？

川村…まず自分のことを投げ打って来て下さるというのが非常に素晴らしい。きっとボランティアの方々も、自分の生まれた所とか育った所とか関係なく山田に来て色々やっているうちに家族的な気持ちになり、何度も来たくなるのかなと

竹内…ほっとサポートセンターは震災の年、9月にスタートしたんですけども、サポートセンターの仕事自体私たちも初めてやることでした。仮設の人たちとのホーム支援を行って下さいといつも何をしてもいいか分からなくて、そこで初めて会ったのがみえさん、連鶴でした。

山本…みえだと連鶴で出会いましたが、他に色々な団体があって参考にしようなところがありましたか？ほっとサポートをするうえで。

竹内…そうですね。あとは繋がりの中で「この人知ってるよ」といって紹介していただいて、そこで「こういうのが出来ます」という声をかけていただき、それを私たちも習いながらその場でやってみよう形をとりました最初は。

松崎…ほっとサポートセンターの取りまとめ役が私だったので、仮設に入る方の不審者…申し訳ないのですがそういう懸



竹内美奈子さん

が、僕たちでなんとかしなきゃいけない、お互い協力してや
ってかなくちゃいけないという意識があって、それで、まと
まりやすかったのかなとも思います。

奥中…自己組織化という意味では、もう全然問題ないかなと
思います。ただ、全部自分たちで考えるのではなく、ある程
度型にはめたようなパックの中で、例えば、決められたミー
ティングであっても、その班の独特のやり方、肉付けをその
中でやっていくのがいいのかなと思います。何のリスクもなく
無事終わるのがいいんですけど、何かあった時に、添乗とい
うか専門の方がおられると助かるかなとも思います。

大橋…このボラパックは先遣隊から始まり、36便までずつ
と続いています。だから、自己組織でやるのは良いこととは思
います。ただ最初の人が大変なのは仕方ないとは思いますが、
次の人はそれによって楽というのではなく、また違う
ところも開拓していただいています。いろんなノウハウをそ
の人たちはその人たちでつくり上げながらフィードバック
して、組織に返しているの、いいのかなと思います。この
12月28日に事務局が終わるとのことですが、そういう意味
でみえボラとしていろんな収穫があったのかなと思います。

二瓶…皆さんが全く対等の立場で、たまたま募集が集まり、
たまたまリーダー・サブリーダーとなつて、一週間の活動を
したわけです。その活動をするうえで、具体的な指示や注意
事項を、リーダー・サブリーダーの方はしっかり頭の中に入
れてみんなをリードし、活動が終われば報告します。その報
告が次に活かされ、その繰り返しで36便まで積み上げられ、
現実が続いたわけです。だから、最初からリーダー・サブリ
ーダーを事務局が決めるんじゃないかと、皆さんの合意で決ま
っていくというのは、全く見ず知らずの人間が集まって一つ
の活動をする上で、すごく大事なことかなと思います。

山本…実は、最初、添乗員が付いていくという方法もありえ
ました。そこを、あえて取らなかつたというのは、一つは、
各便が現地で長い期間ちゃんとボランティアするというこ
とで、きつと皆でチームを作れると考えたからです。スタッ

フがついていくことになる、運営する事務局側の労力も負
担も大きいです。なので、あえてチャレンジしてみたいです。
結果として、みえボラが長く活動できた一つの原動力は、皆
さんに苦勞を分かち合ってもらいスタッフが裏方に徹する
ことができたことでした。皆さんの話を聞くと、それぞれに
チームづくりの雰囲気の違いがあります。これを同じスタッフがや
っている、自分のやり方を押しつけてしまい、それぞれの
便の色が消えてたかもしれないし、トラブルにつながって
いたかもしれない。添乗員をつけないというのは安易に取
れる方法ではないのですが、皆さんがおっしゃったように、
ちゃんと報告を聞いて次に引き継ぐ、現地に信頼できる方が
確保できる、そういう場合は、一つの方法かなと考えさ
せていただきました。

それぞれの思い

山本…最後に、何かメッセージなり思いがあればお願いします。
す。

中田…いろいろ前から準備していただいて、本当に良い経
験をさせていただいたと思います。ありがとうございました。
山中…行く機会を与えてもらったし、バスがあつたからこそ、
何回も山田町に行けたので、本当にありがたいと思います。
行かなくても続けていける何かを、いろんな仲間がつながり
あつてできていければいいのかなと思います。ありがとうございました。
ございました。

太田…交通手段とか宿泊施設とか確保できて、行くことがで
きて、本当に良かったなと思っています。一人よりも、何倍
以上のことができたような気がしますし、本来、出会わな
かつた人とすごく出会うことができ、自分自身の経験にな
つたと思っています。今でも19便のメンバーとは定期的に
食事会なんかを開いて、今後も継続して何かをしていければ
いいなという話や、みんなで山田町に旅行に行つて、その後
の様子を見たいと話しています。

奥中…ボランティアを通じて、いろんな方々との出会いがあ

りました。その出会いの中で結婚という幸せを掴んだ人もい
て、そういうのも、非常に良かったのかなと思います。今後
どういった災害があるかわかりませんが、すごく大きな経
験ではありますし、そういった時のモチベーションの持って
いき方とか、すごく学んだことがこの席では話せないくらい
あります。今後も、何かあった時にはスムーズに動けるよう
な体制を作っていたらいいのかなとも思いました。

大橋…私はみえボラで行かせてもらって、自分たちでもボラ
バスを出させていただきました。本当にためになったと思
います。みえの事務局は一応の区切りですが、何かあつ
た時にすぐに対応できるように、定期的に催し物というか会
議を開いたりというのが必要だと思います。三重県から行つた
方々は、三重県で災害があつたら大いに活動できるでしょ
うし、本当に良い財産だと思いますので、この方々のリストは
大事にしなから、何かが起こったときにはお声かけができれ
ば一番いいと思います。お声掛けしなくても動くとは思いま
す。そして、県予算をきっちり取ってください。災害が起き
た時にすぐに動けるような組織化が大事だと思います。

二瓶…非常に貴重な財産を、みえの事務局は得られたと思
います。この大きな財産を、事が起きた時に対応できる活かし
方を考えていただきたいと思います。
県や市への繋がりもおありに
なるでしょうから、人のつなが
り、組織のつながりというのを
重要視し、向こうから何とかし
てほしいと声をかけられる組
織づくりで、財産を活かしてい
ただきたいです。

山本…皆さん、今日は本当に貴
重な話をありがとうございました。



全員で記念撮影

【平成25年9月1日】

ラとして、ボラセンや役場、地域の方に対しての対外的な顔になります。みえボラの顔という意識も持っていたらと思うんですけども、その辺で、気をつけたこととか何か困ったこととかありますか。

大橋…3便の場合、ボラセン内の責任者は誰というのが難しかったです。アリーナはみえボラ、決裁を取るのが違う人、というのが非常に微妙でした。そういう時はこちらが推し量りながら、他の団体さんにも上手く話を持ちかけ、まとめていくということをしました。担当作業柄、社会福祉協議会とか町役場へ直接話をするということもさせていただったので、いろいろと便宜をはかっていただいたりもしました。整備途上のところというのは、組織対組織の兼ね合いというのが、非常に難しかったと実感しています。

奥中…私たちの時にはお風呂もありましたし、ラジオ体操もありました。組織対組織という問題はだいたい解消していただいた後だったので、対外的な問題というのは印象はないです。ボラセンを開設した当初はすごくそういう問題があるのでしょうが、それをいかに早く解消するかによって、あとあとスムーズにいくかというところがあるかと思っています。

山本…二瓶さんは5便から見えて、今思うところはありますか？

二瓶…対外的なところでは、ほとんど顔を出していません。ただ、ある時点で、絵本があるのを読み聞かせをして、その後寄贈出来ないかという話が事務局から出ました。なので、保育園や幼稚園、小学校に行って要望を聞きましようということになり、最初は私が直接動いたんです。しばらくして、ボラセンから、具体的に活動してほしいという要望が出てきていないのにニーズをとってこられ



二瓶健さん

るとはどういうことでしょうか、という意見が出ました。それに対して私が動くんじゃないかと、松岡さんたちが動いてスケジュールを作り、それが社協を通じて、みえボラが動くという形になったんです。手が届きにくいと思われるところに對して動いているのに意見を言ってくるのは、何かが違うと思います。松岡さんたちが動いてくれたので、上手く回るようにはなりました。

松岡…ボラパック口になってからは、こちらから活動を提示して、会場の調整やマッチングをしてもらう、という形が出ています。ですが、ボラパックの時は、こちらからニーズを提案して活動を行うとはどういうことか？を理解してもらったことから始め、そのために、絵本の読み聞かせ活動、そして35便では特別便と一緒に運行したんです。先ほどの二瓶さんの話のようなことを繰り返しました。

山本…現地のボラセンの人たちは、初めてボラセンを運営して、いっぱいいっぱいやってきて、こんなもんなかなかという流れの中だったのかなと思います。ただ、支援に行く側としても、こういうことだったらもって役に立てるのにと、自分たちが聞く中でこういうニーズがあるはずなのに、なんでやらないの？という思いが出てきます。それと、現地の組織とのすり合わせという部分で、本当に二瓶さんにも迷惑をかけたし、難しい人間同士の関係が負に働いた部分は、事務局のみんなに走り回ってもらって、一つ一つ解決していきました。

松岡…その時に難しかったことを乗り越えたので、今ではスムーズに運用出来ています。

山本…最初の先鞭を付けてもらったのが、二瓶さんの絵本の読み聞かせだったと思います。

松岡…押し付けボランティアになっていないことを証明する必要がある、例えば、保育園の方からボラセンに一本電話を入れていただくだけで、解決する場合もありました。

大橋…やってあげたいねという心と、やってほしいという心が形になってないだけで、組織が本当にきちっとされていれ

ば、もっと最初からそのつながりをスムーズに出来たのかもと思います。

山本…現地のコーディネートを、どうやってみえから提示するかによって、支援する側も気持ちよく活動ができるという部分もあります。今回山田町でその経験をしたから、自分たちの身に起こった時、どういうことをしなくちゃいけないというのを、考えるきっかけになったのかなと思います。

自己組織化というチャレンジ

山本…今回、自己組織化というのを一つの大きなテーマでやらせていただいています。事務局のコーディネーターを同行させず、最初から役割も皆さんに決めてもらい、その代わり現地で何かあったら、二瓶さんも含め、現地のスタッフにすぐに対応してもらおうというやり方をしました。その良かったところ、悪かったところ、改善すべきところを、しっかりと見ないといけません。実際にリーダー・サブリーダーを務めていただいて、スタッフがつかないことの良し悪しについて、意見や感想をお願いします。

中田…私たちの時は、お一人同行いただいたんです。なので相談もできました。保育園に行くというのも本当に思いもよらないことでした。現地にいるからこそわかる活動なんだなと、すごく思いました。

山本…現地で継続されている人がいる強みですね。

山中…24便の参加者の中には、他県発のボランティアバスへの参加経験者がいました。みえボラは添乗がないから、行くメンバーで全部をやらなくちゃいけない、と他県と三重の違いを聞きました。

太田…添乗をしてくださらなかったから、逆にメンバー全員



座談会の様子

ったです。「失業しました。」と言われると、「なんで、失業したの。今まで仕事は何してたの？」とズバツと聞きました。喋らないといられない、という感じになりますね。

山本…1便から5便の方は、(被災地の交通事情が悪く)行きたくても行けなくて、やっと行けるといいう状況で、ものすごくモチベーションが高い方が多かったので、余計に自己紹介も盛り上がったと思います。時期によって参加しやすい人の層が変わり、便の雰囲気違ってしまっているので、進め方のコツに違いがあったのかも知れませんが。自己紹介で趣味とか素を出してもらえようようにすることで、この人ならこういう役割ができそうだっていうところを、皆さん見ていただいていたというところになるんですかね。

～会話の重要性～

山本…夜のミーティングは、すごく仲間づくりの役に立っていたと思います、どんな話をしてもらってましたか？

大橋…3便は、とにかく喋りました。現地についてからも喋り、自己紹介の続きみたいなことをご飯食べながらやって、全体で喋るのが終わったたら、自分たちの班ごとに喋るということをしていました。喋ることで自分たちの人間関係をつかっていって、いろんなものをつくり上げました。

奥中…その日あった反省や対応を話ししました。途中で、班のメンバーをシャッフルしてそれぞれの意見を聞いたたら、僕はボランテアにきてるんだから、チーム分けとかやめて目的をちゃんとしましょうとか、思っていることを言いあってみんなで答えを出すというようなことをしました。二瓶さんに話を聞いたこともありました。傾聴ボランテアをされてる年配の方もおられたので、答えが出ないときはその方にバラバラの雰囲気をもとめていただいたり、そういう会議でした。行き詰まったら誰かに振れば、という感じでした。

太田…基本的に活動班のリーダーから、その日の反省点とか改善点を報告してもらい、他のメンバーにも気づいたことを言ってもらおう。あとで次の日はどうしようかとか、班決めを

してました。その時、誰かがお菓子を買って、みんなに配って食べながらというのが多かったんです。真面目な話が終わると、みんなそれぞれ好きな話をはじめるといいう感じでした。**山中**…ミーティングもあっさりしていました。その日の反省だけおしまい、次の日のことを決めておしまいたいな感じでした。皆さんそれぞれの世界に入ってたと思います。

中田…その日のこと、起こったことを一人一人反省があればという感じでした。日程後半は、ミーティングの後に、一度豚汁夕飯を作ろうか、一度温泉に行こうか、じゃあいつにする？とか、和気あいあいとしていました。その後、翌日の絵本の読み聞かせ練習を消灯ぐらいまでやってました。

山本…二瓶さんは、あまりミーティングには出なかったということですが、何か印象に残ったことかありますか？

二瓶…何回かしか出てないんですが、その日のリーダーが、今日はこうでした、こういう問題があった、という報告でした。私の方から道具の使い方方の説明を1、2回した程度で、具体的にごうしてくださいます、ああしてくださいますという話はありませんでした。ただ、皆さんのご意見の中で、体育館に物干しする場所がない、シャワーに行く階段が危ないということ、それぞれ作り直しました。階段にはケンブリッジという名前をつけました。ミーティングに出て、ご意見を拾い上げられたのは良かったと思います。

山本…基本的には、夜のミーティングで今日の反省と明日への準備はしてくださいと、事務局からお願ひしていました。それを肅々とスムーズにやっていたところ、それをきっかけに色々話を広げられたところ、それぞれのメンバーに合わせてつくっていくものだなと感じます。年齢層とか違い



ば、やり方を変えないと上手くいかないだろうというのは、聞いてて感じます。

～人間関係～

山本…メンバー間のトラブルとか人間関係、その辺で、気をつけたこととか、困ったことかありますか。

大橋…最初の頃は、被災地の状況が本当に大きく変わり、気持ち的にも不安定な方が出てきますので、日頃から誰と誰が喋っているということ把握し、あの人は、この人に喋ってもらったらいいなとか、ものすごくフォローしました。お互いを気遣い合うという姿勢があったので良かったです。

奥中…現地で、自分のプライベートの携帯で写真を撮っていることに、不満を持った方がいたんです。その不満が、すごく確かな意見なんです。現地で写真を撮るのはどうかという強い思いに対して、ミーティングの中で班長さんが気を配っていただいて、各自で写真を撮るのはやめましょう、と伝えてもらいました。そういう意見をきちんと聞いて、きちんとみんなに周知するという、そういう役割をしてくれる方がいたので助かったというのがあります。

山本…不満を持った方が直接言ってしまうと、かなりきつい言葉になってしまうとか、尖った表現になるので、誰かがそれを一回咀嚼して伝えるっていうことができる、かなりマイルドに納得できますね。お互いに納得できるやりとりになると思います。他にもいろいろきつとあったのでしようが、一週間ほどの間に仲良くなって帰ってこれれば、概ね解決して記憶に残らないといったところなのかなと思います。

大橋…3便の場合、内側より外側の方が難しく、ある団体さんをどう扱うかとか、そういうところでトラブルになりかけたりました。そういう時は、リーダー・サブリーダーが対外的なものは全部引き受けて上手くまとめてくれました。

～対外折衝～

山本…リーダー・サブリーダーって肩書きがつくと、みえボ

いうのは、人の関係が親密になるように僕も感じました。

二瓶…誕生日会はいくつかのグループがやってますね。非日常的な形で来てますから、そういうイベントというのは、あつという間に盛り上がるんですね。はたから様子を見ていて、非常にこっちも楽しくなり、良かったです。

大橋…ラジオ体操を始めたましたが盛り上がりました。

二瓶…毎朝、毎朝。

大橋…3便から始まったんです。

太田…22便の方は経験者が何人かいる中、リーダーは経験者じゃないという状態でした。前の便はこうだったとすごく主張する方と、腰を据えてリーダーを支えてくれる方が

いて、そのバランスをとるのが難しかったというのがありました。経験者の方に、いきなりリーダーがこうしてくださいと言うのではなくて、上手く相談して意見を決めた上で、みんなに伝えていくという方法を取りました。

作業のリーダーをわざと経験のない人にしてもらい、経験者に支えてもらうという形をとりました。そうなると、経験者の方は支えなきゃいけない、経験のない人は、経験者に相談して、という感じで上手くいったのかなと感じました。

山本…経験者との接し方って、仰るとおり難しいと思います。**奥中**…意識的にリーダーっていう存在があるので、その人を立てるといっても難しいです。いろんな人の意見を、直接リーダーに伝えてしまうと、リーダーとしては不快に感じることをどう噛み砕くか、そういうところは難しかったです。

山本…リーダー・サブリーダーや役割分担を事務局としてお願いしましたが、皆さんどう感じていますか。ボランティアという意味では本来同じ立場なんです、そこにリーダー・



太田安彦さん

サブリーダーなどの役割をつけて、責任感に温度差をつけてしまうというやり方で、違和感がありましたか？

二瓶…どういいういきさつにしてもリーダー・サブリーダーに指名されて作業に入りますよね。その時に、私の立場としては、話す対象は班長やリーダー、そしてその作業のリーダーです。ということは、その人がいるのといかないのでは、物事の進め方が全然違ってしまいます。その人がどう思っているのかわかりませんが、少なくとも一つの目的を持って作業に当たるということに関しては、リーダーは絶対必要です。

中田…初めてのサブリーダーだったのですが、とりあえずこれをやれば良いと言われ、少し気が楽になりました。

山本…中田さんの便は人数が少なかったから、みんな何らかの役をされたわけですね。役のない人はいなかったのですか。

中田…いなかったです。

山本…あまり違和感なく、役割分担をしたっていう感覚なんですね。

山中…リーダー・サブリーダーがいないと、動けない部分があると思いますし、役がなかったにしても、活動していく中で自然とそういう役割は出てくると思えました。

二瓶…ずっと見てて、リーダー・サブリーダーでこの人は向いていないなというのはいなかったんじゃないでしょうか。

山本…リーダー・サブリーダーを選んでいた事務局として、何かコメントはありますか？

若林…皆さん同士は説明会で初めて顔を合わせるわけですが、事務局は名簿と座席表があるので、名前も顔もわかっています。説明会を受けている様子を観察させていただき、質問される様子、眼差し、姿勢、あとは職業、年齢、経験、そういうところを加味したうえでお願いしました。相対的に見せていただいて、目に狂いはなかったと自画自賛をしております。

あと、何回か行っていただいてる人は、前の便はこうだったと引きずられる方が多いので、あえてリーダーをお願いしないというのもありました。県外や、最初の頃は国外の方もいらっしやいましたが、そこは三重県の方をお願いしました。

山本…チームワークをつくる工夫というのが、いろんな人が集まるボランティア活動の大きな要素であり重要点だと思います。どれだけ一丸になれるかというところで、半分以上成果が決まってしまうと思います。

人を見極める

山本…人選を行う際に気にしたことかありますか？

奥中…バスでの自己紹介で、全員の座席表を書き、そこに趣味や年齢などをメモして、それを見ながら自分の感覚やもう一人のサブと相談、そしてリーダーに伝えて、というやり方をしました。自己紹介はその人を知るために必要と思います。

山本…では、非常にテクニカルなノウハウですけど、こんな自己紹介をしてもらえば、その人となりが分かるのか、こういう質問でその人を探ったみたい

なことはありませんか？

奥中…趣味です。山岳部であったりとか、スケボーであったり。

太田…今はまっていることを聞くと、そこから広がっていき

ました。堅い話じゃなくて、柔かい話をして。

山中…自己紹介は最初の人が短いと短くなるので、一人2分

間自己紹介とか、そんな指定をしないと難しいんだっていうのを学びました。また、16人中11人が学生でしたので、

もっと丁寧に説明しないといけない部分があったのかなと思いました。

山本…最初の人の自己紹介が短いと、痛い目にあうぞ、という事ですね。

大橋…私たちの場合、一人の自己紹介が長いんです。話が途切れる人がいると、みんなが質問する癖がつくので、面白



奥中雄二さん

合は苦勞するかなというのを感じました。また、配車係の車が他の車とぶつかってしまふ、そういうトラブルが続きましたが、そういう時だからこそ、みんなでもう対応していかうかという話し合いもできたのだと思います。8便までに築き上げていただいたマニュアル、そういったものを確立してきてくれたからこそ、助かった面はあったと思います。**山本**…その怪我や事故が出た便は、確かに記憶に残っています。そういう時の緊急対応は、便の中でもしつづ、ボラセンにも報告し、みえの事務局にも連絡してとなりますが、リーダー・サブリーダーで手分けをして対応したのでしょうか。また、他のメンバーたちは手伝ってくれましたか。

奥中…事故をした時に、相手の方に申し訳ないと菓子折りを段取りしてくれた女性の方がいました。みんなが自発的に行動して下さる、そういう雰囲気だったので助かりました。

山本…夜のミーティングで皆に考えてもらおうと。

奥中…ミーティングがないと、リーダーとサブリーダーだけで考えても進まないと思います。難しい意見もありましたが、その中でもバランスが取れたのは、よかったですと思っています。

太田…19便は経験者が誰もおらず、知らない者同士で人間関係をつくるのが一番苦勞したところと思います。最初の自己紹介が終わったあとも、なかなか会話が弾みませんでした。最初のサービエリアに着いて食事の際にメンバーの一人が、皆で一緒にご飯を食べようと言をかけてくれて、そこから一気に輪が広がっていきました。それが、すごく助かったですね。現地についてから話がスムーズに進んだきっかけかなと思っています。あと、メンバーの一人が少し心無い発言をし、それを聞いた他のメンバーとトラブルになってしまふかも、ということがありました。ですがリーダーが、どちらにも波風を立たないように、その場を上手く収めてくれたということがありました。

山中…私は、15便で参加させていただいて、15便リーダーの記録日記を全部プリントアウトして持って行ったんです。リーダー・サブリーダーは初参加で、私しか経験者が

いない状況でしたので、どうしても仕切らざるをえなくなりました。あと、学生さんが多くて困ったのが配車係です。当時は、ボラセンからの配車が少なく、私個人的には学生さんに運転をしてもらうのは嫌だったんです。近い距離ではありませんが、何か起こったときに若い学生さんたちに責任感を負わせるのは申し訳ないので、決めるのに困りました。活動自体は、二瓶さんの開拓された保育園での絵本の読み聞かせが毎日、8月31日で避難所が閉鎖という時だったので、支援物資の搬出作業と掃除や片付け、あと本の乾拭き作業というのがあって、延々と本を拭くという、その三つがメインの活動だったので、危険を伴う活動というのはなかったんです。参加された学生さんたちの中には、「以前からボランティアをやってます」と、やる気満々で読み聞かせに行行ったものの、子どもたちの心がつかみきれずに「失敗した」と言っていました。それもいい経験になったのかなと思います。

中田…35便は8人でした。男性3人女性5人。男性の方は結構慣れている方で、女性5人のうち3人はボランティア自体初めてでした。けど人数が少ない分、誰かが何かをやらなければいけないというので、役割分担はみんなやりやすくて言ってくれたんです。本当に最後の方の便だったので、いろんな点で確立してもらってあったので、苦勞という苦勞はあまり感じなかったんです。

山本…二瓶さんは、現地に滞在して、長くいろんな便を見てもらっていました。苦勞したこと、感じたことは、どうでした？

二瓶…夜のミーティングには、私は意識的に出席しなかったんです。私はあくまでもサポーターであり、サポーターとい



山中千聡さん

うのは現地活動の作業段階でのお手伝いだと思い、ボラパックスの人とは距離を置くべきだろうと私なりに考えました。ただ、最初からしつくりきてるグループ、なんとなくしつくりしていないグループ、そういうのは感じました。そこ意識していたのか、私なりの隠れた名物のラーメン屋さんに、グループ全員でラーメンを食べて帰るといふ機会を設けたり、あるいは、私の手元に魚の材料が入った時、鍋を作って、鍋を囲んでみんなで食べようじゃないかというような機会を何回かつくったりしました。要は、全く見ず知らずの集まりが、一週間の中で気持ちをついに物事に対処するということとは、いかに大事なことを、皆さんに理解して肌で感じていただくことが、現地に詰めてる人間の役割というか、仕事の一部分かなと思いました。それが、一つの結果として、みえボラの成果となったんじゃないかなと思います。

山本…ありがとうございます。胃袋で仲間つくりをするというのは、すごく大事ですね。見ず知らずの人間がいきなり集まってチームになってください、と放り出されて簡単に仲良くなれるわけがない。ただ、何かしらお手伝いがしたいという方向性は、皆さん一致しています。その方向性をいかに仲良くするということにつなげていくのかは、これからの大事なノウハウになってくると思います。

＜チームワークつくり＞

山本…見ず知らずの人が多いチームをまとめていく、チームワークをつくっていくためにどんな工夫をしたか、教えてください。

大橋…会社でリーダー的に動いている人を責任者にし、その人を中心に、みえボラだけでご飯を食べ、喋ることを心がけました。知らない者同士が一緒にいるというのは、とにかく一緒に喋る時間を多く持たないといけないと思いました。

奥中…これも胃袋の話になってくるんですが、メンバーの誕生日会をしようということになって、特別に美味しいものを食べて、みんなで馬鹿なことをした記憶があります。胃袋と

座談会 ② 自己組織化

くみえ発！ボラパックにおけるチームづくり

平成23年度のみえ発！ボラパックは、スタッフが添乗せず、ボランティアの方々のみでチームとして活動していただきました。

一からチームをつくりあげる「自己組織化」について、当時のリーダー・サブリーダーの方々に話を伺いました。

出席者

大橋克哉さん（ボラパック第3便リーダー）

奥中雄二さん（ボラパック第8便サブリーダー）

太田安彦さん（ボラパック第19・22便サブリーダー）

山中千聡さん（ボラパック第24便サブリーダー）

中田一美さん（ボラパック第35便サブリーダー）

二瓶健さん（みえボラサポーター）

オブザーバー

若林千枝子（みえ災害ボランティア支援センター事務局長）

松岡佑美（みえ災害ボランティア支援センタースタッフ）

聞き手

山本康史（みえ災害ボランティア支援センター長）

（以後 敬称略）

山本…忙しいところ本当に皆さんありがとうございます。みえのボラパックは、バスに添乗員が乗っていないということが特徴でした。現地活動も参加者の中からリーダー・サブリーダーを決めていたというのが一つの特徴で、私たちは自己組織化と呼んでいます。その苦労とか、良かったこととか、実体験の中から次につながるようなお話を聞ければと思います。進行を務めさせていただきます、支援センターの山本です。よろしくお願います。

大橋…3便のリーダーをさせていただきました。よろしくお願います。初めてのリーダー体験でした。よろしくお願います。

奥中…第8便のサブリーダーとして、初めてボランティア活動に参加させていただきました。奥中です。どうぞよろしくお願います。

太田…太田安彦です。19便と22便のサブリーダーで行かせていただきました。よろしくお願います。

山中…24便、サブリーダーの山中です。大学生の参加者がとても多い便でした。よろしくお願います。

中田…中田です。35便にサブリーダーとして参加させていただきました。よろしくお願います。

二瓶…ひよんな縁から、みえの災害ボランティアに関わることになりました。5便から36便までの約半年、お付き合いさせていただきました。皆さんと一緒に活動できたことが、私にとって気持ちの中で非常に大きな大きな財産になりました。おかげさまで人的なつながりもできたことは、私の宝だと思っております。よろしくお願います。

リーダー・サブリーダーの役割

山本…リーダー・サブリーダーはこんなことをやっていた、こういう苦労があった、というのを詳しく教えていただければと思います。

大橋…まだ、あまり情報がわからないまま行きました。出発当日、まずバスの中でいろいろな班の責任者を決めてくださいと言われました。初対面の者が32人、責任者を決めるという時も何も情報がないので、サービエリアに到着するまで自己紹介を延々とやっていました。本当にとにかく何か役に立ちたいという想いの方々がかりでしたので、責任者も心良く引き受けていただきました。メンバー32人の気持ちは一緒でした。現地の引継で、ボランティアセンター（以後ボラセン）の運営をしなければいけないと聞き、どうしたらいいんだろう？と、ディスカッションをずっとやっていました。いい経験をさせていただいた連帯感の強い3便でした。

山本…そこで苦労したという部分はどこですか？

大橋…時間がない中で引き継ぎましたので、どうしたらいいのかというのも、全部自分たちで考える必要がありました。

3便の時期でも、まだまだみえボラの位置というのが不明確だったんです。静岡県、長野県、全社協、事務室の一角で陣取ってる方、いろんな方が

いる中で、みえボラの位置が非常に難しく、みえボラが一旦引いてしまうとボラセン自体が動かないということもありえるかもしれない、そこがものすごく気を遣ったところなんです。ボラセンという箱物の中で、役割とかが明確にならなければいいんですが、それがなかったので非常に苦労したんです。ですが、それがなかったから、次の人に自分たちの苦労をさせたらいけないと、それぞれの班でマニュアルをきっちり作ろうということになりました。最初の方々は本当に苦労しながらされていたと思いましたが、3便でもまた苦労はありました。

山本…1便〜5便までは、現地のボラセン運営のみえのボランティアでも担当させていただいて、センターの中にずっといましたので、非常に微妙な空気感をよくご存知だと思います。8便は、難しかったですね。8便の奥中さんは、どんな苦労がありました？

奥中…顔も見えない、喋ったこともない人ばかりだったので、バスの中での役割分担・人選が非常に難しかったです。8便はがれき撤去がメインで、現地へ行けば常にトラブルだらけでした。がれき撤去中に、土のう袋から出ているガラスで足を切ってしまった方がいて、たまたま看護師の方がおられたので応急処置は出来ましたが、そういう方がいない場



大橋 克哉 さん

規模で考えられていました。ところがボラパックという手法を身につけた。それに対して、構成団体や予算付けなどは特に変えることなく今に至っています。時代の要請でやることが増えている中で、幹事団体の再構成を含め、見直す時期にきているのではないかと思います。

かたや、南海トラフ地震の時に支援センターはどういう形、機能をさせようとしているのかという絵が、まだ全員違うと思います。南北に長い海岸線に津波を受ける三重県で、例えば29市町にひとつずつしか市町ボラセンを設置しないと考えているなら、実際には設置されるであろう民間設置のボラセンに集うボランティアのケアはできなくなる。南海トラフの状況をきちんと押さえてからの議論じゃないと、できない想定の上でできない計画を重ねてしまう可能性があると思います。

鳥井：4月11日の東日本大震災支援みえ宣言の時に企業関係者の所に行った時、僕たちのすることは賛同署名だけではないのか、協力できることはするよ、という温かい言葉も掛けて頂きましたので、そういうネットワークは広がっていかねければならないと思います。

また、東日本大震災での支援センター立ち上げのドタバタを教訓に基金を置き、また、その基金の中に個人や企業から寄付を受けられる受け皿の意味合いも持たせたつもりですが、県が集める基金では自由な融通が利く経費には充てづらい。そういう所はやはり支援センターとして旗を立てて支援金を募らないとやっぱり他にとられてしまう。愛知・静岡・三重とみんなやられた時、静岡のような防災先進県、愛知のような人口や団体の多い大御所相手に三重がどこまで食い込めるかと考えると支援センターの役割は大きいと思う。三重が世界のボランティアをいかに受け入れられる体制を三重県が県の中に作れるかという所が大事と思っています。

最後に、今回の支援センターの運営とか体制は個人に頼りすぎている部分があるので、もっと組織として強固で継続的なものにしていかなければならないと思っています。

山口：まず、お金の面では共同募金会と協力していく方が良いのではないかと個人的には思っています。

それはさておき、課題で感じるのは、そもそも支援センターのあり方、何をするといいところなのかという事を幹事団体のみんなで共有できているのか、ということ。幹事団体の関わり方がこれで良いのか、という事を自分が担当の間不安を感じていました。自分の反省でもあるのですが、それぞれの担当者個人じゃなく、組織としてどれだけ支援センターを自分たちの組織だと思って動かしているのかな、という事があります。立ち上げの時に限らず普段からの支援センターのあり方を共有することが大切なのかなと感じています。

明石：今日の午前に支援センターの立ち上げ訓練をしました。が、その中でも、「今日は訓練だから来たけど実際にはこちらに来られない」「自分の団体でも仕事が増えるのだからこっちは人を出せない」という話がありました。支援センターを立ち上げると決まったら、幹事団体は担当者の仕事を全部外して支援センターに派遣するくらいの準備はしてもらいたいと思います。南海トラフを想定するなら特にそうだし、県外の支援となると議論はあるかも知れないけれど、支援センター設置の際の準備・覚悟を各幹事団体でしておく必要があると思います。

山本：最後にもう一言付け加えたい方どうぞ。

亀山：支援センターが何をやる場所なのか、原点に戻って南海トラフで起きる地震に向き合ってもらえればと思います。水害支援からできたボラパックを基点に今回東日本大震災の支援が形作られていましたが、今後本当に南海トラフで地震が起こった時には、ボラパックは支援センターがする事なのかというところから、まず始めると思います。東日本大震災ではせんだい・みやぎNPOセンターがたくさん寄付を集めて支援活動を行うNPOに助成(再配分)していました。



そういった形での動きも必要になると思います。それをみえNPOネットワークセンターができるのか、できないならどこがやるのか、NPO室か、など。県域でそれぞれ得意不得意もあると思いますので、できることを確認し合って体制づくりをやっていくべきかなと思います。

端無：もし南海トラフの地震が起きて、日本にあるNGOが三重県に入ってきて、そこがお金を集めて何十億円というお金が集まるのがいいのか、三重県のみならずスクラムを組んで世界に発信して三重県に入るようにするのがいいのか、ちゃんと話をしていかなければならないと思います。今災害が起きるとNGOが入って、ここで活動しました、寄付をお願いしますってやるでしょう。それが本当に被災地に全て活かされているのかというとちょっと。その辺考えてもらいたいなと思います。

西川：そろそろ地震型のセンターに変えていってもいい時期に来ていると感じます。その簡易版としての水害向けセンターがあるとと思います。

古川：今回、センター長個人に結構負担をかけてしまった。センターを普段どう維持するか、代表を誰にするかなども含めて考える必要があると思います。

山本：最後に私もひと言だけ言わせてください。

今回の支援センターの取り組みで私が後悔している事が一つあります。それは、支援センターが個人をコーディネートするセンターになってしまったこと。水害であれば個人をたくさん送り込めばいいのだけれど、地震の場合はそうではなく、継続的に支援に関わってくれる組織をコーディネートする方が、もっと色々な事ができたと思う。ボラパックで多少軌道修正はできたつもりだけどまだまだ不十分だった。南海トラフの地震を想定した時は、支援センターは組織をコーディネートする場であればならないと、みなさんの意見を聞きながら感じました。

みなさん今日はありがとうございました。

んとか形になったけど、立ち上げ最後の資金、特に実働で動く部分の出していくお金をどう確保するかは非常に大きな課題となった、ということですね。次の災害に備えて400万円という三重県災害ボランティア支援・NPO活動促進基金（以後、基金）をつくって確保していますが、それだけではもちろん足りないよね、という部分はこれからの課題だと思います。

鳥井…災害発生時、いかに早く旗を立てて支援金をくださいといえるかどうかにかかってくると思います。大規模災害時に、三重にくださいといえるような環境をつくっておくことが大切。例えばFacebookを通じて、クレジットカード決済で募金を集める方法があるらしいけど、そういう方法なら世界から集められる。



鳥井早葉子さん

る。ただ、手続きが面倒なそうなので、もっと簡素に使える小口も大口も含めていرونなどから寄付を集められる様な仕組みを考えておいた方がいいと思います。

亀山…平時時から通帳や印鑑を持っているのは強いですよ。東日本大震災の時はそこを一から作っていたという経緯があるので、通常から運用できる通帳を持って、平時時から寄付を募っているというのは強いと思います。

〜経験を踏まえ、次の災害に向けてひと言〜

亀山…一つは、NPOや中間支援組織との関わりをどうしていくのかという点。NPOや中間支援組織の方々はボランティアの運営に関して日頃からノウハウを持っている所が多いので、南海トラフの地震では自分たちの事として現地の災害ボランティアセンターに関わって運営に力を貸していただけではないかと思っています。そういったところに今回経験を持っていたことが難しかったので、今後はNPOや中間支援組織の方々に、防災も自分たちの活動範囲の内であるという意識を持っていただけのような取り組みが必

要だと思っています。

もう一点はネットワークづくり。企業等からお金を出していただくなど企業を絡めていこうという話が出ていた時、最初の半年が勝負だと思っていました。5月以降は私自身が関われなくなり企業まわりの話も立ち消えになりましたが、お金をいただくいただかないに関わらず、企業にはお願ひしますと少しでも回ったらもっとネットワークが広がって復興の力になったのではないかな、と感じています。南海トラフの地震が起こる前にいろいろな形で支援センターを知ってもらって企業貢献の対象としてセンターを位置づけていただき、日頃から信頼関係を築けると良いなと思っています。

加藤…支援センターの平時時の取り組みについて、現状の幹事団体による幹事会にいる人は、担当が毎年変わって、かつ事務局がない組織なので過去の蓄積が弱い。予算も扱っていないので突然お金が必要になった時にも簡単に使えないという課題がある。普段の支援センターのあり方をブラッシュアップしていく必要があると思います。

もうひとつはお金の話で、今後災害時に向けて基金を40万円積み立てていますが、それは初動経費をなんとかできる程度のもので、今のように事務局スタッフが支援センターを運営すると考えると事務局の運営経費で数千万の単位になってくる。それは基金では積んでいないし、当初のマニュアルにあるような、幹事団体で一人ずつ出しますというのは、地元の災害ならよりいっそう難しいと思います。

今までの話で事務局がないことが課題だったという事なので、そこから、そこを真剣に突き詰めていかないと対応できないと思います。

端無…私もお金。平成23年に東紀州で水害があった時、近



加藤俊輔さん

所が被災して支援活動のお金集めに結局苦労したため、今僕が主催している団体は100万円のストックをしています。やはり根本的な解決は支援センターではされていないなと感じます。事務局と金、という話は切り離せないと思う。いくら県がお金を出してくれてもそれがすごい紐が付いていたら意味が無いので、初動に自由に使えるお金というのは今のうちに準備しておく必要がある。

亀山さんがNPO中間支援組織の話をしていて、僕はみえNPOネットワークセンターの一員でもあり幹事団体にはなっているが、支援センターがここにできるという協定はあったとしてもみえNPOネットワークセンターとしての関わりについて全然話し合いができていない部分があるので、そこも解決していかなければならない。

支援センターが現地に対して物や金を投入するシステムがあれば一番いいですけど、次の南海トラフ地震の時に本当にできるのかという不安があります。

古川…お金の事は最大の課題だったので、設置された基金を今後どう活用していくかです。ただ、課題はあったとしても今回は大きな方向性やスピードはうまく機能していたので、それが後退しないように留意してほしいです。

南海トラフ地震対策は、標的が絞られたともいえます。これまでと同様に、幹事団体が集まって計画をつくる。県外の災害にも支援に行く。他人事じゃなく、将来助けて貰うためにも、三重が経験を積むためにも、積極的に対応する。私は今回信頼できる仲間がいたので不安を感じませんでした。そういう核になる体制を維持することと外との繋がりを作っていくことが大切だと思います。特に県社協にどんなポジションにいて貰うかが重要になると考えています。

西川…支援センターの過去を少し思い返すと、平成16年に旧海山町や旧宮川村の水害があって活動し、その後、平成23年に東日本大震災が起きました。実はこの二つには大きな違いがあって、昔はみえボランティア情報センターという名称で、情報の受発信をメインとする組織構成メンバーや予算

が今どの部分のパズルのピースを集めているか分からなくなっていたのではないでしょうか。だから、チームとしてこれだけの人数を要する幹事会が、複数のリーダー性ある人間を常時投入できなかったのだと思います。

古川…私は今回の支援センターはなかなかよく対応できたと思っています。行政だけならあんな広がりをもった活動ができなかった。事前に幹事団体間の協定書があり、センター設置マニュアルがあり、スケジュール感も持っていた3月14日の臨時幹事会の時点で活動期間は3年という話がでていたし、当面のことについても、3月末までは現地にライフラインがないので私たちは準備。4月末頃にライフライン復旧、その後に支援活動開始という見込みをセンター長が提示していた。幹事団体の仲間がいるし、特に市民会議のみなさんが大勢でセンターに詰めていたので活気と安心感があった。さらに、平成16年水害時の運営記録やボラパックの出し方パンフレットを先輩方が残してくれてありました。手探りの対応なんだけど、割と見えている感じがしました。足りなかったのは、今までの経験

が水害だったこと。水害対応は精々一ヶ月程度の活動で、県からの予算もなく、無理をできる人が力技で何とかしてきた。でも今回は3年想定なので力技ではいけない。ここからは未知の領域でした。ボランティア的ではなく、予算をかけて専従が張り付いた支援センターというのは全然違った。



古川明郎さん

支援センターの予算をどう確保したのか

山本…ありがとうございます。古川さんから予算の話が出てきたので、お金の事について話を展開していきましょう。

鳥井…専従職員を雇用することができなければ、支援センターもNPO室も忙しきで共倒れになると、ひしひしと感じました。そうしたら東日本大震災支援関連で専決予算(緊急

を要するため県議会は事後承認で知事が実行できる県予算のこと)の話があり、事務局人件費などの予算が取れました。**加藤**…行政は、なぜそれを支払う根拠があるのか、とか、何の経費をみるのか、など、細かい部分が必要です。今回は最初そのあたりが不明瞭で、そこはみんなでどんどんブラッシュアップしていったのですが、今後に向けては、今回の経験を踏まえて事前にある程度決めておく必要があると思います。もちろん、決めすぎると柔軟に対応できない部分が出てくるのでそこは難しいですが。

西川…過去、協定(平成18年に幹事団体同士で締結した災害ボランティア活動の支援に関する協定書)の中に金銭的な話を入れると締結が難しくなるわってことで最初の時にお金の話は入れなかったんですよ。それが今回は良くも出たし悪くも出ました。

古川…総額これくらい必要という目標があって、それをどう負担し、どう集めようという形で進みましたよね。その中で三重県がどのくらいいただけるか、予算部局にどう交渉しようかな、と考えていました。

亀山…4月半ばに行政側でお金が付くかも知れないという話ができるまでは市民会議がお金を300万円出すという話を根拠にいろいろな事務作業を進めていました。県社協からも100万円くらい出してもらえらうという腹積もりもあり、それ以外には企業からバス代を出してもらおうとか、他に活動支援金を県民に呼び掛けて集めようとか話し合っていました。

市民会議がバス代の半額を企業に負担してもらおうというプランを立てて幹事会に予算計画を提出し、その計画を三重県NPO室・男女グループの辻千賀子さんが書き換えて予算確保に動いてくださいました。もし、県予算が確保できなければ企業にお願いしてと当初は考えていました。

鳥井…バス代の補助の予算が取れたのは6月補正でした。それまでは企業などに寄付をお願いして財源を確保したいと考えていました。

西川…その為に、4月11日の東日本大震災みえ宣言のイベントでも、なるべく同意者を獲得するために知事とか三重大学長とかの印鑑を集めようとなりましたよね。

加藤…今は三重県の半分負担が当たり前の様になっていますが、当時は企業向けに文章を作って中小企業連合会とかに配りましたね。500〜600部くらい。

山本…でも、手遅れだったんですよ。

古川…3月中に、支援センターへ寄付するときの振込手数料を無料にもらうために銀行へ依頼に行ったのですが、その時に「銀行内はもう震災の翌日に声を掛けて義援金で送ったよ」と教えてもらいました。3月中でも遅かったのです。また、連合三重は独自の活動もされていたし、ボラパックへも参加してくれましたが、会社と労働組合両方に、もっと早い時期に声を掛ければもっといろいろ協力してもらえたと思います。

端無…先遣隊を派遣した費用のうち私が紹介したメンバーの経費は東紀州コミュニティデザインが日本財団からの助成金100万円と自己資金30万円を出したのだけど、結局お金はあつたという事ですか。

古川…先遣隊派遣の頃が一番しんどかったですね。市民会議でもなく、東紀州コミュニティデザインでもなく、支援センターとして先遣隊を出すという時に、その経費の裏付けがなかった。市民会議からの寄付申出があったのと、これまでの実績から一定の一般寄付や助成金を見込んでいましたが、決定的な財源根拠があるわけではありませんでした。

また、県予算として要求できたのは、時期的な制約もあって、5月以降の事務局運営経費とバスの運行経費の一部でしたので、それ以前の経費、つまり先遣隊派遣の経費などは対象外とせざるをえなかったのです。

なお、初動時の先遣隊については、財源だけでなく、権限や能力の問題もあります。今後の大きな課題だと思います。

山本…つまり、お金集めについては2週間くらい周回遅れではじめてしまった。今回は幸い専決予算が取れたことでな

基本は同じですが、マニュアルを形作る中で後方支援部門が他に吸収されて今の形になっています。

あと、組織図の前に、私とセンター長との間の共通認識として、この災害は3年はかかるだろうという感覚がありました。なので大きな組織を作らないといけない、とっていました。

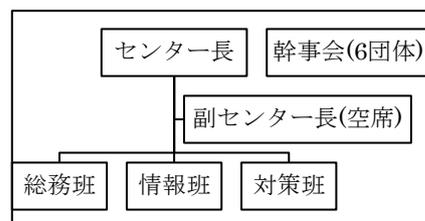
先遣隊は、今思うと情報班として情報をとってくるだけというところから現地の実情に組み込まれて対策班の仕事になってしまい、任務がどんどん不明確になっていったと感じます。

明石：私は実際の仕事とその組織図との関連性をなかなかイメージできなくて、最初はすんなりとは頭の中に入らなかったです。やっていくうちにこれがいいかなあと書き換えもしました。

亀山：組織図はやっていくうちに変えて行くのだろうと思っていたので、私もあまりとらわれずに動いていました。

西川：立ち上がりの頃は事務局もなかったのですが、自分がどの部分の仕事をやっていると感じずぎると縦割りになってしまふのであまり意識しない方が良くないかな、とは思いますが。今回立ち上げ時の支援センターが一番弱かったのは広報部門。私達が何をやっているのかという情報発信が内に対しても外に対しても非常に弱くて、知っている人だけが走ってしまうという状況になった。そうでなければ動かない時期でもあるけど、取り残される人との温度差を埋める努力が組織（幹事団体間、各幹事団体構成員の間）で、できていなかったと思います。

明石：人の手が限られている中で広報は後回しになっていったと思います。ボラバックが動き出す前の頃って、発生する仕事は何でも情報班の仕事になっていた気がします。今思うと、班分けする前に、仕事をグループ핑ングして、それに人を当てはめていくというやり方もあったのかなと思います。



亀山：当時は、組織はあっても事務局長、つまり統括する「人」がいなかったもので、仕事の優先順位をつけてまわすという形ではなく、ボランティアが同列で、自分のできることをあれこれやっていました。だから重要でも面倒な仕事を取り残されていく、ということが起こっていた気がします。いつまでに何をやらなければならないかを知っていて、判断できるリーダーのもとで進める体制が必要だったと思います。ボランティアによる手挙げ方式の限界と私は感じました。

加藤：あのときは幹事団体それぞれが何をしているのか正直言ってみていなかったところがありました。それでもNPO室へはたくさんお問い合わせがあり、対応が大変でした。みなさんが自立分散型でそれぞれのコネクションを持って強みを持って動いているのをまとめ上げていく事ができれば本当にすごいのでしようけど、そういう情報共有ができてなかった。少し経ってから毎日夕方5時に全幹事団体の担当が集まって会議する事にしましたが、あんまり効果が無かった気がします。顔を合わせるだけで情報処理できる訳ではないと感じました。MLで情報を投げ合うだけでもため、統括できる人がいなかったということはあると思います。

端無：自分は先遣隊の時にそのことを強く感じました。自分が声を掛けて先遣隊に行ってもらった人に支援センターから指示がない。結局私から指示を出して市民会議のMLにその報告をするんだけど、それがどこまで共有されているかわからない。自分の関わりがどの程度認められているのかわからずイライラしていました。センターに連絡しても、先遣隊派遣の経緯を知らない人が出たりする。最後はセンター長に聞かなきゃ進まないけど、こんな聞いたら忙しいだろうなって思うこともありました。

山本：ありがとうございます。大きな災害に対し3年続ける組織を作ろうとする割には、先の見通しがないままみんなができることをやっていた。みんなイライラしたし、私も多くの人に当たりながらやっていた記憶があります。深夜家に帰ったら涙が止まらなくなったこともある。みんなそうだった

たと思います。そんな中でみんなできることをやっていたけど整理されておらず抜け落ちも多かった。特に情報共有、意見共有と言ったところが決定的に足りていなかったというところが分かりました。組織や体制について、他にありませんか。**山口**：一つのことを決めるのに、幹事団体に了承を得て、センター長が決定をして、というステップは仕方ないと思うけど、MLに情報を流して返事を待って、でもなかなか返事がなくて、というのはイライラを増長させた一つの原因かなと言います。

亀山：立ち上げ当初、幹事団体にそれ相応の役職を担っていただくという流れで進んでいて、県社協に副センター長を、という話がありました。実際にはそうならず、積み残してしまいました。その結果、センター長に権限と責任が集中する一方、県社協は参画している意義や存在感が発揮できなかったように思います。センター長が一人で全てのことをできるわけではないので、それぞれ権限を持った方が何人かいて、副センター長レベルで、他の幹事団体の方もそれなりに主要ポストに就いていただいで指示命令系統に参加してもらうという形があったのかなと思います。

西川：その場で決定できる市民（NPO）と決裁が必要な所（県、県社協）との差がすごく出たかなと思います。限られた時間の中でやるうと思うと伝達役にしかならない人ではだめで、決定権を持ったものが幹事会に出る必要があるでしょう。そして、その中で権限を分散していく。

最初の段階はどっかが引っ張っていく必要があつて、それは今回センター長だったけど、実はセンター長としてではなく対策班長の動きをやらざるを得なかった。なぜかと考えると、平成16年の水害を経験している人はボラバックというひとまずの完成形を思い描けていたけど、他の幹事団体の方々とその共有が無いとそれぞれ



西川 泰弘 さん

に旧海山町（紀北町）が被災した際に現地災害ボランティアセンター（以後、災害VC）の副センター長をやらせてもらっていて、災害の経験の有無よりキャンプとかアウトドアが平気な人が絶対いいだろうとわかっていたので、山登りとかサバイバルのできる人、日本中を旅して歩いている人20人くらいに声を掛けて、その中から第2、4次の先遣隊のメンバーを推薦しました。



端無徹也さん

ただ、行ってもらったメンバーと私は密に連絡を取り合いましたが、私と支援センター、支援センターと先遣隊メンバーとの連携が取れていなくて、行った人も何をしに行くのかわからないままで、とりあえずできることは何でもやってくださいと伝えたりしていました。支援センターから行く指示と私から行く指示と二系統になっていたのも問題だったと思うし、私もどうすれば良いか苦悩しました。

次の災害を考えた時、今回私が推薦した人で三重県民は実は8人中1人だけ。先遣隊を三重県民から派遣できなかったということも次の大きな課題と思います。

亀山…私は第1次先遣隊でした。市民会議の中で行ける人を募集してリーダーを決め、4月初旬当時は燃料不足も懸念されていたので燃料を積んだ車を運転できる方なども手分けして探したり、車両を確保したりしました。早く現地の状況を掴み支援先を決めなければならぬ中、7名で行きました。かなり無理をして送り込んだ観がありました。その結果参加していただいた消防団の方々へのフィードバックやケアが何もできないままになったことが悔やまれます。早く入るといことが目的化していて、調査のための人材というところではあまり手当てできていなかったと思います。**明石**…支援センターの電話回線を引いてから問合せの電話がたくさんかかってきました。夜はボランティアで対応したのですが、昼間はNPO室が対応してくれていました。幹事団

体から電話番号を出せないかとMLで流れていましたが、反応は十分ではありませんでした。

亀山…土日の対応については3月19日から仮設事務所を開設したのでボランティアが対応するようにしたのですが、4月半ば、そろそろスタッフを雇用しようとしていた頃、鳥井室長に「そろそろ加藤さんを通常業務に戻してほしい」と言われて本当に申し訳なく感じました。朝も昼も夜も加藤さんにかなり無理をしてもらっていたという気がします。

山本…幹事団体のメンバーも何人かは来て頂いていましたが少なかったですね。マニュアルでは支援センターが立ち上げれば幹事団体それぞれ人を出し合うと決めていましたが、事実上機能していませんでした。その辺り県社協はどんな状況だったのでしょうか。

山口…正直、あまり支援センターについて重きを置いていなかったと思います。県社協としては、全国社会福祉協議会からブロック派遣の話もあり、県社協として先遣隊も派遣して、結果、大槌町社協を支援する事に決まっていくなのですが、その動きがメインになってしまいました。



山口訓広さん

支援センターにも担当の私としては

関わらなければと思いつつも、組織としては重きを置いていなかったのは反省点かなと思います。先遣隊人選の際にも県社協は独自に出していたので協力できませんでしたし、電話対応等についてMLで協力依頼についても、あまり対応できませんでした。

県社協で出した先遣隊や既に現地入りが始まっていたブロック派遣のメンバーとどう連携するかというところが見えないままに動いていて、うまくできなかった事も反省点だと思います。

亀山…先遣隊については、派遣するという合意形成をきちんとしてから出すべきだったと思います。今回はその辺が後付

けで、第1次、第2次派遣の頃は各幹事団体に、これでよろしいか？と何度も確認をとりながら進めました。先遣隊の位置づけが曖昧だったために、私たち先遣隊はどが出しているの？と所在なく感じた先遣隊員もおられると思います。行く人の後ろ盾となり、また現地の方としっかり関わり合いを作り出せる力のある人をつけた上での先遣隊派遣が望まれたと思います。



亀山裕美子さん

もう一点、これは事務局の人材のことですが、スタッフが雇用される5月初旬までの間、ボランティアコーディネーターがいなかったという問題がありました。何かしたいと支援センターに駆けつけたボランティアの方々が無沙汰にしている。誰も声を掛けずほったらかしにされている状況があるのには忍びない状況がありました。ボランティアセンターというものがどういうところか、幹事団体の共通認識になっていなかったことも一因としてあったかと思えます。

山本…進行役が発言してしまうことを赦してください。災害が起こってから立ち上げる組織の脆弱性が現れたと感じます。当時は事務局長が決まるまでが本当に大変でした。センター長としては活動や組織を創りあげるところに手一杯で、全体を見て仕切る番頭さんがいないとこのような事業ができなと感じました。

どうやって組織を作ったか？

山本…さて、人についてはこのくらいにして、次に、どうやって支援センターの組織を作ったかというところでお話をお願いします。

西川…多分一番最初にビニールシートに組織図を私が書いたのが始まりだと思います。元々支援センターマニュアルに書かれている組織図で、県災害対策本部などの危機管理組織と

座談会 ①立ち上げ支援センターはどのように立ち上がったのか

みえ災害ボランティア支援センター（以後、支援センター）はNPOや三重県社会福祉協議会（以後、県社協）、三重県などが協働で、災害が発生することに立ち上げることとなっていました。東日本大震災という未曾有の災害においては今までにない形でのセンター運営となりました。

この回では、東日本大震災を受けて支援センターがどのように立ち上がったのか、何ができて何ができなかったのか。また、今後に向けての課題について話し合ってくださいました。



出席者

- 西川泰弘さん（NPO法人みえ防災市民会議 会員）
 - 明石須美子さん（NPO法人みえ防災市民会議 会員）
 - 亀山裕美子さん（NPO法人みえ防災市民会議 会員（当時））
 - 端無徹也さん（東紀州コミュニティデザイン 事務局長）
 - 山口訓広さん（社会福祉法人三重県社会福祉協議会 職員）
 - 加藤俊輔さん（三重県男女共同参画・NPO室 職員（当時））
 - 古川明郎さん（三重県男女共同参画・NPO室 副室長（当時））
 - 鳥井早葉子さん（三重県男女共同参画・NPO室 室長（当時））
- 聞き手
山本康史（みえ災害ボランティア支援センター長）（以後 敬称略）

自己紹介と震災当時の状況について

山本…まずは自己紹介と、どういう状況で3月11日を迎え、支援センターに関わる様になったのかをお願いします。
明石…震災があったのは、私がみえ防災市民会議（以後、市民会議）に入ってからちょうど1年経った頃でした。職場が県庁なので、仕事が終わってからアスト津に詰めて、できることはしなきゃいけないという気持ちで関わりました。震災の

当日は市民会議の親睦会の予定でしたが中止になり、仕事の後すぐアスト津に来たのを覚えていますが、

山口…当時はボランティアセンター担当でした。こんな大きな災害が発生して何からやったらいいのかという不安と、でも何かしなければとすごく気持ちが焦っていたという印象です。支援センターの動きと同時に社会福祉協議会の全国ブロックでの職員派遣などもあり、頭の中を整理するのが必死でした。そして4月1日に別の部署に異動になってしまい、バタバタしたまま関わりが薄くなってしまいました。

鳥井…私は震災当時、県の他部署に4月から男女共同参画・NPO室（以後、NPO室）で関わることとなりました。赴任すると加藤さんは被災地に行っていて、古川さんはマスコミからの電話対応に追われていて話を聞く時間も無く、私は過去の議事録を読んで情報を把握しました。幹事会にも参加し、とりあえず継続的に活動するために予算がほしい、という認識ではじめました。

西川…発災当日は私も明石さんと同じく県庁にいて地震の揺れを感じ、揺れ方からプレート境界型地震だと感じてからは仕事そっちのけでした。テレビで仙台空港沿岸の津波が砕波しているのを見て、それが5m以上の津波で起こるという知識があったので大変なことになると思いました。幸い当時は残業のない職場だったので、仕事が終わったら支援センターに詰める、という動きをしました。

古川…NPO室で支援センターの担当をして3年目でした。当日は四日市に出張していて、帰ったらみんなテレビの前に集まっている。大変な事になってるなと思いました。災害が発生したとき、幹事団体は翌日夜に集合することになっていましたが、メーリングリスト（以後、ML）で今晩集まろうと決まりました。

普段から幹事会で話し合っていたので、支援センターを立ち上げることへの不安は少なく、県外の災害ではありますが、

対応することへの違和感もありませんでした。

端無…当時私は尾鷲市議会議員でした。ちょうど委員会中に地震があり、散会になってから地元北川の津波の動画を撮りに行きました。テレビを見て大変な事になるなと思い、情報をとろうとしたけど東北に知人がおらずなかなか取れなかったですね。翌日には友だちとか災害の仲間から、東北におまへは行かないのか？とかの話をやりとりしていました。
加藤…当時私は入庁1年目で支援センターの担当も古川副室長と共にさせて頂いていました。その当時は支援センターについて、なにか対応しなければと思いつつも、具体的にイメージできていない部分がありました。4月1日から塩竈市に行政職員として支援に行くことになり、それまでにお金と組織の作り方、情報共有をどうするかという課題を抱えましました。色々決まりは作っていたけど、いざ起こってみると先の見えない不安を抱えた一ヶ月だったように思います。

亀山…当時は市民会議の事務局をしていました。震災当日はアスト津の5階で開催されていた防災の講演会に業務で参加していました。地震が起きて中止となり、職場に戻りました。午後6時くらいに帰宅していいと言われたので、そのまま支援センターの臨時会に出席しました。県はもとより、前年に県社協ともいろいろな形で関わりを持っていたので、幹事団体の中でみなさんの意思疎通の要になればと思っていました。

どのようにして立ち上げ人材を確保したか

山本…本題に入ります。まず、支援センターは災害ごとに立ち上げるといふ事で今回も震災後から人集めをはじめたわけですが、その時の苦労や課題などについてお願いします。
端無…当時私も市民会議に参加していましたが、幹事会には出ていなかったのが非常にやきもきして山本さんや西川さんには怒りをぶつけた事が多々ありました。そんな中で先遣隊を派遣するという話が見えてきました。自分は平成16年

目次

座談会

① 立ち上げ	資	2	5	7
② 自己組織化	資	8	5	13
③ 被災地とボランティアの信頼関係	資	14	5	17

メッセージ

山田町の方から	資	18		
山田町長 三重県知事から	資	19		
事務局スタッフから	資	20	5	21
みえ災害ボランティア支援センター各幹事団体から	資	22		

活動年表	資	23	5	33
みえ発！ボラパック 集合写真	資	34	5	37

※ 活動報告および検証は表紙側よりお読みください（左綴じ）



東日本大震災 復興支援

みえ宣言

2011年3月11日14時46分。千年に一度といわれる未曾有の巨大地震発生。

地震、そして津波による破壊のすさまじさは想定を遙かに超え、そしてそれに伴う複合的な被害。想像を絶する惨状を伝え聞きながら、私たちは茫然とするばかりでした。すぐにでも被災された方々のもとへ応援に駆けつけたいと思っても、それすらままならない現実。私たちは無力感、そして焦燥感の中で、それぞれが「できること」を考えました。

そして今、1ヶ月を経て、自衛隊や警察、消防、海上保安庁、ライフライン企業、土木関係者等の絶え間ない努力や海外からの様々な支援により、被災地域の生活基盤は一步步復旧へと進んでいます。被災地域の皆さんの努力やいち早く被災地で活動された社会福祉協議会、NPO・NGO等支援組織の尽力により、復興に向けた取り組みが始まりつつあります。

震災。津波。被災後の生活。近い将来、東海・東南海・南海地震が連動して被害を受けると予測されている三重県にとって、とても他人事ではありません。

三重県民の皆さん、茫然自失の時は過ぎました。無事であった私たちにできることがあるはず。被害を受けた方々に寄り添い、復旧・復興に向け、ともに歩み出す時が来たのです。

これから始まる長い復興への道。途中で息切れしてしまわぬよう、悲しみを乗り越え前に進めるよう、一人ひとりができる、さまざまな取り組みを結集して、被災された方々や被災地域を支えていきましょう。

私たちは、被災された方々が笑顔を取り戻し地域が復興するまで、息の長い支援活動を三重から展開することを宣言します。

みんなのえがおがみたいから！ 今、三重から。

2011年4月11日(東日本大震災から1ヶ月の日に)

「ほっとけやん・東日本」

代表発起人

三重県知事	野呂 昭彦 (当時)
三重大学長	内田 淳正
三重県商工会議所連合会長	竹林 武一 (当時)
三重県商工会連合会長	藤田 正美
三重県共同募金会長	井村 正勝
みえ災害ボランティア支援センター長	山本 康史



みえ災害ボランティア支援センター (MVSC)

それぞれの東日本大震災支援

(資料・メッセージ)



写真：岩手県下閉伊郡山田町 北浜地区

(左上：平成23年3月、右上：同年11月、左下：平成25年4月、右下：平成25年9月 撮影)